

他律的に神命に畏服する宗教にては、神は宏大なり、故に信者の直接に接し得る所にあらず、而も神意神命は一切行動の規矩なるを以て之を知る事甚切要なり。此に於て彼の高遠なる神の命を聞き、其意を知るの方法手段なかるべからず、神意啓示 (Offenbarung) 梵 Prokta 回教にて Qur'ān 又は Tadjira の信仰を生ず。幸福主義の道徳に於ける神託は吾人の利益の指導にして、又自律の進歩したる宗教にては眞善の啓示なるも、律法宗教にては神命の發表なり。此の如き神命の啓示は、時には直接に個人に下る事なきを必ずべからざるも、其は特別なる個人に限り、多くは世界の太初より神典聖言として完全に成立して、人間社會に存する者即原始啓示として尊ばれ、一宗一國の聖典、無上の法典として行はる。婆羅門教にては此法典は古聖人 (Rshi) が神より聞きし所 (Gruti) なりと信じ、諸の法典を始とし之を大成したる摩奴法典 (Mānava Dharmaśāstra) となりぬ。猶太教にては其法律 (Torah) は古聖モーセがシナイ山上に神より受けし處なりとて、其五書 (Pentateuch) に編成せられ、回教の法律は神の直接の說法即哈蘭 (Qur'an) にして、其は豫言者モハンメッドに依りて人間に傳はり、波斯教のは悪魔に對する法律即エンデダード (Vendidad) にして、聖人

ザラトストラが善神アフラより傳へし所なり。法律尊崇の結果其宗教の中に聖典崇拜を生ずべきは其職皆一なり。

法律、聖典の尊崇は、又之が宣布者、傳達者の信仰となり、多くは之を聖人、或は豫言者の尊崇となし、一般に神命の傳達者、誠命の指導者として僧侶の威權は一般人民の上に出るに至る。此の如き僧侶は祭祀祈禱を司らず、其神は宏大にして人間の願意を傳達するが如きは不敬なればなり、若し又祈禱をなす時あるも、福利の爲に非ずして贖罪の祈願のみ。兎に角僧侶は神人の媒介者なるも、神に對して人を代表せず、只神命の傳達者のみ。即其の第一に勉むべきは、人をして神の威力を知らしめ、自ら罪惡あるを悟らしむるにあり、此に於てか僧侶の職務に始めて説教 (Predigt) あり。人既に自ら罪人たるを知れば、進で之が贖罪として法律を嚴守せしめざるべからず、此に於てか董督 (Zucht) あり。此の如く人をして法律を嚴守せしむるは、又此に依りて神の怒を鎮め罪を脱し得るの望を與ふるを要するを以て、董督の裏面には罪惡に對する慰籍 (Trost) と贖罪に關する保證 (Verheissung) との職務を帯ぶるに至る。

此の如く人間に對して重大の權力と感化を有する僧侶は、之が職務を果すべき資格を有せざるべからず。然れども法律宗教の意識にては、僧侶も人間として同じく罪人たるを免れず、故に人間としては到底此の如き監督保證の機能を有する能はず、之あるは只威力宏大なる神の意志に依りて、特に僧侶に此の職務機能の委任(Mandat)ありしに因らざんばならず。此點に於ては法律宗教に於ける僧侶は、君主政治に於ける官吏の如く、君主の特撰に依りて其機能を與へられし者なり。此委任特撰の人と雖、固より精神上の資格を要するを以て、神は又之が賦與として、僧侶の心に特別の教育を與ふ、即神の吹き込み(Göttliche Einhauchung)と稱する者にして、此の信仰に依りて僧侶の熱情整實は昂まり、其の中には往々にして特に神の吹き込を感じ、其任命(Berufung)を受けたるに激し、大に起て信仰を鼓舞し、道徳を刷振したる者少なからず。

即セム民族特に猶太人の間に多く起りし豫言者(Prophet)と稱する者は、此種の僧侶にして、彼等が國王人民を叱咤し、利福祈禱の僧侶迷信崇拜の習慣を打罵し、獨り偉大なる神の前に偕伏して畏敬虔信の熱誠を獎勵したるは、宗教史上の快事なり

とす。猶太に於けるエレミア、イザヤ、アモス、ホセヤの如き、亞刺比亞に於けるモハシメツド、日本の日蓮、印度のナリナクの如きは其の著しき者なりとす。蓋し豫言者の信仰たる、其源は幸福主義の道徳に於ける神巫の類に發し、其の神の吹き込みは神託に發するも、其内容根底は全く變じて神威讃仰神命畏服にあるを以て、其が道徳上に及ぼす勢力の大なるは偶然にあらず。此を以て豫言者は即宗教改革者にして、宗教改革者としては彼の自律的道徳の宣布者たる佛、基督等と其内容を異にするにあらず。

此の如く、法律宗教に於ける僧侶は、一方にては神の特命の信仰より豫言者、宗教改革者を出だし、甚多く効績をなすも、又他方にては法律の偏固なる規定に拘泥し、其僧侶の特撰は某の一血統或は階級に下たる者となすに、至れば、僧侶は一定の階級となり、終に無精神惰眠の僧侶社會を作り、徒に法律を固守して其權力を逞うし、其規定を嚴にするの弊を生ず。婆羅門教に於ける婆羅門族、猶太教に於けるレビ族(Levi)、回教に於けるウレマハの如きは、皆此の如き階級門閥的僧侶の最も社會を害し、宗教并に道徳に悪結果を與へたる者なり。此の如き制度信仰は階級的なる

を以て、其中に傑出したる人才を出だす事亦望み難し。  
 終に尙法律宗教の中にて禁慾主義を記せざるべからず。法律宗教にて自己は罪過の我なるを以て、其身體は之を罰するを要す、故に戒日には齋戒し、或は斷食す。而して其僧侶たる者は、特に罪障の重きを意識して、此に依りて人民を教導する者なるが故に、自らは特に戒律を嚴守し、進では罪過の源泉たる肉慾、我慾を脱する事を勉めざるべからず。即世間の慾望を絶ち、妻子の累を離れ、所有を棄て、肉食飲酒を禁じて修道せざるべからず。此に於て僧侶は修道僧(Monk)となり、其修道者の居所は禁慾修道の道場にして修道院(Monastery)たり。此の如き制度道德は即修道組織(Monachism)なり。修道組織は法律的道徳を基として、罪過意識の秀でたる所に發生せざるなく、婆羅門教にては婆羅門族は老年に至れば遁世者(Sannyasin)となりて山野或は教團に生活し、回教の中には毛衣を着する修道僧の一派即ち毛衣派(Che)ありて後に乞食僧(Dervish)と相合して修道組織をなしぬ。基督教にては律法的特色多かりし羅馬教會には修道組織あり。佛教の修道組織は外形に於ては婆羅門教の法律宗教に出でしも、其根柢は既に自律的の道徳に進める者なり(印度宗教史考)

第四部(一)  
 第四部(一)

修道修行者は、多くは自ら罪を脱せんとするものなれども、僧侶にして之に兼ねるに豫言的精神と神の任命を受けたりとの信仰を有する者あれば、此人は先づ衆に代はりて、罪過を滅殺し、神意を奉體せんとするの人となり、此に於てか神に對して人間を代表する代表者となり、一切人間の爲に罪を贖ふ代贖者(Expiator)となる。代償(Eretnar, Redemptio)の信仰は、此の如く元は法律的道徳の罪過意識に出でし者なり。然れども此は進で人間の救濟者、度脱者(Savior)の信仰となりて神の照鑑を信じ、神の慈愛攝護を信ずるの宗教を生む所以なり。印度にて佛教の頃に出でし救濟者(印度宗教史考四)及釋迦佛陀の如きは、主として修道に依りて人間の導師救濟者となりし人なり。基督の如きは之に加ふるに、神の任命に依りて奮起したる代償的救主なり。佛敎の阿彌陀佛の神話の如き(帝國文學三卷二七)も、亦代償的救主の信仰を代表せり。

## 第六章 自律主義の道德及其儀禮

他律主義に於ける神命畏敬は、實に敬虔の誠實を養ふ最大源泉なり。敬虔の念進み罪過の意識と共に贖罪滅罪の保證信仰せらるゝ事篤くなり行き、從て人間の罪に怒る威力の神は一轉して賢明正義の神となり、又一切智一切能にして世間を導く神となる。此に於て世界は神的智能開發の場となり、一定の秩序に從て一定の終局目的に進では即濟度過程(Hellsprozess)となり、神の正義は即其照鑑(Vorsicht)となり、今迄は法律の源泉たりし神は、人の心に入りて其強みとなり、其力其慰となり。此に於てか最高の宗教的意志なる自律的意志に出づる行爲は、自己のなすべき處は其れ自らにしてなすべき事として、一切の善行を修し即世界の終局目的は神的にして一切の道德は即此目的の爲に存する神的秩序なるを自覺し、此く神の照鑑に成れる世界の進行秩序を増進する善事を修し、心を淨め身を修むるは一に神の恩寵攝護(Grado. 梵語 Anugraha)に出づとの宗教的意識に基く。此の如き自覺意識に依りて意志實行をなすが故に、自己の慾望は固より之を道德的理想に服従し、一切の善事は特に神の命ずる所にあらざるも、自然に其れ自らにして神的秩序

に協力する所以なりとして喜び進で之を行ふ。此に於て善行は一として世間的道德の善にして、又同時に宗教的道德の善ならざるなく、神に虔信に、人に對して善良なるは、即世界の道德的又濟度秩序に協力し之を増進する所以となり、世間の道德を修めて一切善行を修するは又世の道德を増進する所以にして、二者の意義と内容とは同一なり。此の如き宗教にては、行爲の主體なる人の意志が宗教的動機に出づる限にては、如何なる善事も神に事ふる所以ならざるなきと同時に、其意志善行は神の恩寵に助けられ、其照鑑の中に行はるるが故に、何れの善事も其恩寵に依りて人に此善事を行はしむる神の榮光ならざるなし。故に基督教にては善行を以て天に在す父を榮むる所以となし(馬太五)保羅の如きは斷然法律の道德を破毀し其心の行即義なりとして曰へり、

それ法律なきの異邦人もし本性のまゝ、法律に載たる所を守らば、法律なしと雖も己の法律たるなり、彼等その良心に銘されたる法律のはたらきを表彰し、其良心これが證をなして云々、(羅馬書二章)

佛教にありても、其原始の道德は純粹に自律的にして、自淨其意は其訓言の根本な

り。其宗教的理想なる無明滅盡の涅槃に入るには只正見に依り正思に住し正行を修するの正道を踏むあるのみ而して其正道の正たる所以は無明に反對して涅槃に到達すべき者に外ならず。佛教は世間の慾望を絶つを以て無明を滅するの方法となしたるが故に其宗教的道德は直に世間の道德に同じとはいふべからざるも而も佛教の眼より見れば通常の道德は尙眞の道德にあらず世間に交りて其慾望に擾亂せらるゝは正命即正しき正活にはあらず眞の正しき生活を營むは入正道を踏むにあるを以て眞の道德は宗教的道德に外ならず。原始の佛教には明に自律的道德を開發したるも尙未だ攝護恩寵の概念を得ざりしが此概念は佛滅後漸次に發達し此の如き道德を完うするは既到達彼岸なる佛隨の攝護を要すとの信仰を生じ馬鳴に至りては衆生の信心と如來の攝護と相待ちて始めて眞正道を歩むべしとなせり。故に馬鳴は諸の道德を修し自己の我慾を絶ちて人に布施し(施即施那 Dana) 諸惡を止め諸善を修し(戒即尸羅 Sila) 勉めて此道德を練磨す(忍即禪提 Kshanti) 是は即菩提の道に進みて宗教的道德を修し宗教的理想なる佛地に到達すべき所以なりとし此等を總稱して眞の宗教的道德即到達彼岸の方法たる波

羅蜜多 (Paramita) なりとせり。而して其後にいでし龍樹は一步を進め此波羅蜜多を修するは一に佛の慈悲攝取に出づとして波羅蜜多是佛の攝護を父とし慈悲の女を生むと唱へたり。此に於て何れの人も其道德を修むるは即佛の攝護を得る所以にして又一切を度脱する方法即世界の神的秩序を進むる所以となせり。純粹に自律主義道德の宗教にありては道德を修する外に宗教的に神に事ふる所以あるべきにあらず。神に歸命し神の慈悲に感憤する所あれば特に神を拜し儀式を修するに及ばず眞正の道德を修むれば足れり。神に事へ神の意志に隨順せんと欲せば特に神に供物を供へ祭祀をなすを要せず保羅の言を借りて云へば己を神に獻げ又肢體を義の器として神に事へ只だ道德に依りて神的秩序を増進し神の理想に協力すれば足れり。心に誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん否神に守らるゝは其目的にあらず自ら神として神を守るなり。此を以て純粹に嚴密に云へば自律的道德の宗教には有形表象的の祭儀を容れざるなり。故に保羅は又曰く(羅馬書一)

其身を神の意に適ふ聖き活ける祭物となして神に獻げよ是れ當然の祭なり。

然れども道德的行爲のみの發表は十分に宗教的感情を満足し難き者あり、宗教的感情は神に對する歸命感謝の情を間接に其動機に發する道德的行爲に發するは固よりなれども、又其外に直接に感情を發表する祭儀を求め、歸命の情は發して、禮拜若くは念佛の唱名となり、特に其禮拜念佛の方法は自己を神に歸托して其攝護に委するの姿勢を執る事多し。佛教にて三歸禮其他の文を合誦し、或は合掌して佛前に拜跪するが如き基督教にて身軀を斜にし若くは跪きて手を額にして禮拜するが如き皆是れなり。又其感謝の情を發表しても、或は湧き來る感謝を音聲に發して、報謝の唱名をなし、感謝の祈禱をなす。此等の儀禮は感情直接の發表なるが故に、道德の進歩したる自律的宗教にては此等儀禮のみにて宗教的感情の能事終れりとなさず、進で之を道德的行爲に轉進するなり。

自律的宗教にては其宗教的道德に瘁盡するの外に神に奉仕するの路あるなく、又其感情直接の發表なる祭儀は神に事へんが爲なるよりは、寧ろ自己の心情を満足せしめん爲の所作にして、其用は此に依りて高尚なる宗教的感情を増進し、以て其道德の養源となすにあり、此以外に儀禮神事の宗教的動作あるを要せざるなり。

然れども基督教佛教の如き宗教にては、其道德は自律的の基本に立ちながら尙法律的主我的他律主義の混淆あるを免れず、此種の動機に出でたる儀禮多く其中に存せり。佛教が始には佛の遺法を誦せんが爲に用ひられし讀經を功德廻向に用ひ、始には佛隨追慕の爲なりし佛像、佛塔を崇拜して無上の功德ありとし、始には佛教々團に屬する比丘沙門は即修道の信者に外ならざりしに、今は之を僧侶として司祭の業を執らしむるが如きは皆他分子の混淆に外ならず。基督教にては亦然り、神に祈禱を捧げて特に某々の事を請願するが如き、若くは洗禮、其他の修法、機密(Sacrament)に依りて特に信者の資格を得、或は神の恩寵に接するの方便となすが如きは、自律的道德に用なく害ある者にして、基督教の中に存せるなり。

此故に自律の根本觀念は此等二教に現はれたり、と雖も、事實上此二者は未だ純粹に自律の宗教にあらず、其の純粹なる者は歴史上に未だ現れざる理想的宗教として之を將來に期せざるべからず。此理想的宗教の道德如何なるべきかの大要を云へば、道德的世界秩序は即宗教の道德にして世間道德の理想の究竟は終に宗教の理想に攝せられ、神の意識に基きて一切道德を修する事、即ち神意若くは神の終

局目的觀念 (teleologische idee) に隨順協力する所以となるなり。言を換て云へば宗教上の終局目的 (telos) 即道德の規範 (nomos) となるにあり。此故に純粹の自律的宗教にては、特に神に事へん爲の行爲儀禮を要せず、從て特に神人の媒介者として神意を人に傳へ、人の信心を神に報道するを職とする僧侶司祭あるを要せざるなり。一切善は即神事にして、一切の信者否一切の精神ある者は皆僧侶にてあるなり。一切の儀禮僧侶を滅却して而して一切を儀禮僧侶となすは其理想なり。

## 第七章 宗教的道德の修養

宗教的行爲は其宗教的意識、宗教的意志の種類に應じて當に守るべきの規範あり、從て其道德を修練して此規範に従ふの方法を盡すを要す。宗教的道德の修養教育即是れなり。

第一。主我的の宗教にては、其行爲は神に對して發するも、其動機は我慾にあるを以て、特に其道德を修練するを要せず、只我慾の請願をして神に對して有効ならしめ、神をして己の意を聞き之を保護せしめん爲には、之が儀禮に一定の方法方式あり、此に従へば即有効なるを以て一に之を修するあるのみ。故に此程度の宗教にて其實行に大切なるは供養祈禱讃歌をして有効ならしむる儀式の修練にあり。而して始の間は一般人民が此儀式を營むを以て、何れの人も此修養あるを要すれども、事實に於ては修養練習を要する程に丁寧複雑なる儀式を生ずるに至れば、大抵既に僧侶司祭の階級職業が一定し來りて、祭祀儀禮の神事は専ら司祭の營む所となり、之が練習をなすは僧侶のみなり。吠隨の時代にて此職に當りしは即婆羅門 (Brahmana) にして、婆羅門は幼時より家を出で、師に就き儀式に川ふる讃歌を誦

し其儀式の方法を習得したり此の如き者を主我的宗教に於ける行為の練習とす。  
 第二。法律的他律宗教に至りては其道德は神誠を奉じて之を實行するを要するを以て常に神命に背かざるやうに行爲をなすの修養を要す。而して此修養の第一義は神意を知るにあり然れども威力鴻大なる神の意志は猥に發表せず只之に信順なる信服者にのみ啓示せらるゝが故に神意を知るには先づ神が己に對して其意志を表明し與るゝ資格を作らざるべからず。是れ即法律宗教にては入信式受禮の必要なる所以にして猶太教にて割禮(Verschnittung)洗禮(Baule)の受禮が始めて神の國に人として神の子たる資格を得る方法となりし所以なり。婆羅門教にては其が法律的道德の宗教たる性質を具ふる限にては此と同様の儀禮あり神の啓示なる吠陀を誦し其法律たる正行に關する規定を研究し實行するには儀式を履修して之が資格を作らざるべからず。生れてより諸の拂淨式(Sanskara)を行ひ其第九の儀式に至りて婆羅門族の標章たる聖繩を肩に掛くれば此よりして宗教上の正行を行ひ得るなり。  
 此の如く歸敬入聖の式を終りし者は此より神の法律に依りて道德を履むを義務

とし如何なる困難に遭ふも其苦に耐えて神の法律に従はざるべからず人界の苦惱に顧みずして神に信順服従するは其道德煉磨の要義なり。詩篇は此道德的鍛練に當りて其感情を述べて曰く

我れ汝の誠命をまもるに速けくしてたゆたはざりき、  
 惡しき者の繩われに纏ひたれども我れ汝の法を忘れざりき。(一一九の六〇以下)

此に於て法律宗教の道德修煉は神は正義の神にして其法律を守る者には必ず正義を下たすとの信仰となり正義は何時かは勝を制すべく不正不義は何れの時にかけ滅すべしとの豫言的希望は猶太教の法律宗教に道德鍛練の最大動機最大獎勵となれり。

要之法律宗教に於ける道德の修煉は入聖式(Einweihung)と法律確守との二點にして入聖は即新なる宗教的生命を得る契機にして之を再生(Wiedergeburt)と稱すべし。其法律確守は即漸次神に近くべき靈化(Heiligung)の過程なり。

第三。自律的、道德の宗教に至りては其根本思想の變化と共に其道德の修煉亦從て變せざるべからず。然れども此に注意すべきは今の宗教には純粹に自律的の



道德修養をなす者なく、假令其實は自律的修養なるも、其名と形にては法律宗教其他の混淆あるを免れざるなり。

自律的道德にては道德修養に入るに先ちて、何等の宗教的儀式を要せず、其道德養の第一動機は外より受くる戒命受禮にあらざりして、自らの心情が自ら宗教中の罪人たるを意識し、罪惡を脱して道德を増進せんと憤勵するを以て、其初の入門となす。即佛教にて宿善開發とて、善の素質が人をして道德に進まんと決意せしむる時は是れなり、宿善開發とは即佛教にて云へば自ら煩惱罪障の我たるを覺知して、菩提心を發するの時なり。基督教にて云へば己が心中の精靈に神の恩寵が開發する初なり。保羅は此契機を説きて曰く、

我儕神の榮を望んで欣喜をなす……こは我儕に賜ふ所の聖靈に依りて神の愛我等の心に灌げばなり。

(羅馬書五の五)

後世の基督教にて此契機を洗禮に求むるは固より猶太教分子の殘存せる者なり。宿善開發若くは發菩提心は多くは何かの近縁に依りて一時に發し來るの觀あれども、其實は積堆し來れる宗教道德的修養の結果の現はるゝに過ぎず、所謂宿善の

發するなり。基督教の神學にて此の如き時機に當りて心が順に神の恩寵に照らさるゝが如きに名けて、此の契機を**暎照**(*Erleuchtung*)と稱するは、實に此宿善の堆積に依りて心が漸次宗教的徳行の憤勵に向ひつゝありしを不諱に過ごせし者が一時の近縁に依りて順に意識に上り來りし状態を見しが故なり。此故に宿善と暎照とは異なる者にあらず、只其見る方面を異にしたる名の差異のみ。

此の如く既に宗教的道德に進まんと驟起する事あれば、此よりは神の慈悲攝護を無二の歸托所として、其修煉實行に**電勉**するを要す。此間の電勉期は龍樹の所謂**忍辱到彼岸及精進到彼岸**にして、基督教の語にて云へば福音に従て基督に隨順する生活に進み行く事なり。

宗教的意識は、此般の道德的修養も亦神の慈悲攝護に依りて始めて不退轉に又完全に行ひ得べしと信ずるが故に、佛者は之を佛攝取の光明に攝せられて善行に進むと觀じ、念佛三昧念佛とは佛名を唱ふるのみにあらず、一心に佛を信じて之に歸命委託するなりの歸命修善となし、基督教にありては神の恩寵に依りて善道に進む者と信じ、神に依屬しての修善にして、救済を來らしむる信仰(*fides salifica*)を以て

善を行ふなり。此故にポロは云て曰く、

そは神其の善旨を行はんとて爾曹の衷心にはたらしき爾曹をして志を立て事を  
行はしむればなり。  
(神立北書  
の二三)

又我等彼に依り信仰に依りて、今居る所の恵に入ることを得……患難にも欣喜  
をなせり、蓋は患難は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來たらせざるを  
知ればなり。  
(羅馬書  
一五)

此の如くにして道徳を行へば、只天然的人として道徳を行ふにあらず、神的人  
として神的人の道徳に碎屬するなり。此を以て此の如く攝護恩寵の中にありて徳  
を修する道徳的生活は、既に肉躰凡夫の人間としての生活に異なる者あり、信者は  
既に生命の更はりしを信じ、再生を得たる感を抱くなり。即是れ佛教の菩薩、地に  
して、基督教にて靈化せられたりといひ、ルーテル派にて神祕的合一 (Union mystica) を  
得たりとなす状態に進み行くなり。但此間に道徳信仰の退轉せざらん爲に、佛教  
にて特に佛名を唱へ、基督教にて諸の sacrament を修するは、只此修煉を有形に  
表象したる者にして、純粹の自律的宗教の中心道徳にあらざるなり。

## 第八章 宗教的團體の組織發達

### 第一節 教會團結の基礎

總て儀禮は神と人との關係を圓滿にし、神と融合する理想を現實にする方法にし  
て、又保證なれば、宗教的意志は儀禮に依りて神に近づかんとするのみならず、又其  
中に安慰保證を得るなり。而して此の如き神人融合の理想は、下祈禱供犠の目前  
直接なる儀禮より、上は修善慧行の遠大なる道徳に至るまで、總て神と躬親的關係  
を有し、又は之が助力あり、之が攝取に與れりとの信仰に助けられ、此の如き神の威  
力又は慈愛の中に近親與衆の協同親和あるを感ず。

即利益祈願の有形的儀式を營む時には、希求する所の目的題目は自己の利益にあ  
るも、其祈願方法は万人に共通に有効なりとの信仰を有し、且多人と共に祈願儀式  
を營めば、其同信同行の人の多き事は、自ら其儀式の有効なる事の保證を與へ、主觀  
的個人的安慰に客觀的聲援と成べし。主我的道徳の宗教にても同信同行の與衆  
が多きを望み、祭場には部落の民衆、或は一家の人員盡く來集し、聲を共にして祈禱

をなす事多く、従て其騰詞にも興衆の多きを列挙する者多し。即此階段にある宗教の團結は、家族的又は種族的にして、其目的は自己の利福にあるも、儀禮は幸福到達の保證として自ら興衆同伴の協同を要求するを見る。幸福到達の保證は又自ら其結果の現實となるを要求し、神力の顯現して現に自然界に活動するを渴望し、此神力啓示は又興衆と共に之に接して其が神力の顯現なるを確認し得べきが故に、此點に於ても主我の儀禮は興衆の協同を要求せり。されば幸福保證と神的啓示との要求は、神人融合を目的とする儀禮の必然の結果として、此の如き幼稚の時代に於ても既に宗教的協同團結の根底原動力となれるを見るべし。

進で他律主義の宗教に至れば、同一啓示を信奉し同一の教權を奉行する事は、先の儀式祭儀と同じく贖罪及靈福の保證となるが故に、其の宗教的團結の中心點は一層明瞭となり、従て團結の力を増進す。特に此階段にては神法啓示の要求信仰切實にして、或は原初啓示、或は古聖祖先よりの傳承、或は立法者豫言者の一般國民に宣傳したる所、或は又僧侶の家傳として社會的勢力を有する神法が其道德の中心たるが故に、其結合力は民族國民の結合に密着せるを以て、其儀禮は國民と範圍を

同じくせり。されば法律的宗教は多くは社會の團結と相互扶植せる國民的宗教 (Volks religion) なり。

自律的道德は内心良心の満足に依りて成立せるも、其内心とは主我孤立の我執私意にあらざ、弘く人類と同情して同じく迷ひ、同じく神に遠き衆生として博愛慈悲の念を起し、此の如く包括的なる我の解脱安樂を求むるにすれば、其道德は自ら普遍包括的なり。既に此の如き意識を以て徳を勵み行を修し、或は神を念ずる人々なれば、其人は相別るゝも其精神は融和協同して同一の理想を求むる者とならん。此故に自律的道德が本然の性、或は自己精神に宿れる神を求め、其顯動を庶幾するは一見すれば個人的主觀的なるが如きも、其主觀性なるは即客觀的包括の基本にして、自律修道者の精神的團結は又自ら理想を中心としての宗教的數團となるべし。即此の如き數團は、家族國民の制限を超えて普遍に人類衆生を包括すべき宇內的宗教 (Universal-religion) なり。

此の如く宗教的實行の要求は、自ら宗教的團結の需要となり、社會的勢力を生じ、宗教をして個人意識の主觀的事實に止らず、社會的生命ある現象たらしむ。其社會

的現象としての發達は社會學の題目にして、教會團結の研究は即倫理學より社會學に轉ずるの過渡なるを見るべし。兎に角宗教的團結は、個人家族の利害より起り、民族若くは一國族の中に社會的生命を有して其社會的團結を助け、又其團結力の影響を受けて發達し、其極は終に一切世間的團結を支配せんとする教會を生ずるに至りぬ。此組織の發達の間には世間の社會的組織と宗教の社會組織とは相互に影響し相平行して發達し、人文發達の階段に應じて各其に適應する宗教の組織あるを常とし、此等の階段に沿ひて種々の階段を経、其組織の中心團結力、亦此と共に變遷せり。家族生活に於ける家族團結の中心は家長としての父に存するも、宗教的組織としての家族に於ける團結の中心は司祭としての父に存し、或は又國家としては、團結の中心は其主權にあるも、宗教の組織は必しも國家の主權を中心とせずして、別に其中心權力を有して團結す。されば今宗教の團結組織を研究するには此に關係多き社會的團結の成立性質を替へざるべからざるも、其注意は主として此等社會的團結と並び立ちて特に宗教的團結をなさしむる中心力を大本として着目するを要す。

宗教的團結の歸着する所は、其宗教的理想に隨て其宗教的客體を崇拜せしむるにあるも、其團結の勢力は其理想の方便たるべき具象的勢力あるを常とす。宗教の單純なる時代には其理想といひ、或は教理といふべき者十分に具備せず、又意識的に了知せられざるを以て、不確的なる理想の發達として現るゝ有形的祭儀は其團結の中心力となる。宗教複雜に赴きて理想信仰が其大勢力として意識せらるゝに至れば團結の中心は教權の源泉に歸し、又理想を中心とするに至る。同じく教權を中心とする者にても其教權の源泉一ならず、或は純粹に法律に依りて教團を作るあり、或は國民的法律に依りて宗教的國家を作るあり、或は理想に依りて團結したる教團の教權に依るあり。上述の組織種類を分類せば左の如くならん。

- |      |       |      |
|------|-------|------|
| 祭儀組織 | 即司祭中心 | 家族組織 |
| 成立組織 | 即教權中心 | 法律組織 |
| 教會組織 | 即理想中心 | 組合組織 |
|      |       | 自由組織 |

固より此く分類するも、實際に於ては此諸の種類の性質が相混合して現はるゝ事

多きを記せざるべからず。

## 第二節 祭儀組織 家族及種族

原始の宗教にありては、其信仰には思想觀念の變化なくして万人一様に外界に生氣を認め、天然的神話に依りて活動するも、此信仰は直に人心を結合するの連鎖とならず、其信仰は表象的に祭儀に發表し、同じき信仰が同じ神を崇拜し、又同じ方法祭儀にて其神を祭る、外面的行事を共同するに依りて人心を結合す。根底は信仰にありと雖も、其直接の勢力は祭儀にあり。

儀禮祭祀を營むには、一定の法式ありて、其祭を司る者は即司祭 (Priester) なるを以て、原始の時代にありて共同の祭儀に依りて結合するには、司祭常に之が中心的人物たり、故に儀禮組織は又即司祭組織なり。司祭組織にて儀禮に依りて團結するは、文化の發達したる後迄も存し、日本にては佛教輸入の時迄、羅馬にては基督教輸入の時迄も是れなり、然れども、此司祭組織の祭祀儀禮には、一家族の祭として行はるゝと、一種族、一社會、共同の祭事として行はるゝとの二種あり。羅馬にて私祭 (Sacriva)

privata) 公祭 (Sacriva publica) と稱する者是なり。此二種中何れが宗教史上初に現れしやは明に決定するを得ず。原始の社會的組織は家族と部族と明に相先後せしにあらざして、家族の團結も部落あるが故に、安固に、部落の團結は家族の集合に依りて成るを得、二者相助けて發達せしなり。然れども、分析的に觀察するに、家族ありて相集まれば部族となるべきを以て二種の階段は劃然たる區別なきながら、尙家族を先とするは寧ろ便宜なる假定といふべし、されば宗教に就きても家族の中に儀禮生じ、此より部落の共同的儀禮生じたりとして、二者を前後に叙述するを便とす。

先づ家族中に行はるゝ儀禮より始めん。一家族の中にて、第一に祭禮の場所となるは爐即竈なり、竈に火を燃やせば、此は自然に神の居所となり、又火は自然に供物となり、家族此處に集まりて祈禱の詞を捧げ、讚誦を唱へて諸神を祭り、家族の安全等諸種の事を祈願し、又家に婚嫁ある時、子の生れし時、子の成長して某の時機に達せし時なども、爐邊にて此と同種の行事をなす。此等の所謂冠婚葬祭は、其國其時代の事情に應じて、其方法意義に多くの異同あるも、原始の時代にては此等行事は

盡く神に對する祭祀にして、印度にて、小兒生れてより結婚するに至る迄の家内行事は皆完成式として、神に對する儀禮として行はれ、羅馬にても結婚は結合祭(*sacra in Galia*)として一の祭なり。此の如き家族祭祀(印度にて *Grihyam Karma*、羅馬にて *sacra familiaria*)を行ふに當りては、家族は擧て其司祭となるも、之が中心首長たるは、家族の長なる父若くは母にあり、子弟は之が補助參與として之に與る、而して此共同の行事は、家族を以て宗教上の一團躰となす所以なりとす。父若くは母が司祭の長たるには、彼等は固より祭祀の方法祈禱讚誦の詞を知らざるべからず、且多くの場合には特に祭祀の豫備として或は齋戒沐浴し、或は特に其衣服を清淨にし、其衣裝を特別にする事あり。例せば、印度にては此豫備なる入聖式には、家長は其妻に助けられて別の小屋に入り、沐浴身躰を清淨にし、爪髪を切り頭に布を纏ふ等の事をなす。

家族祭祀は始は爐邊に行はれて、火の保護神、例せば印度にては火神なる *アクニ*、太陽なる *カシヌ*、羅馬には家の守護神 (*Penates familiares* 又 *Privati*) を祭るも、後には家の守護神は必しも火に關係ある者ならず、又從て爐邊以外別に祭壇を設くる事あり。

農業社會にて祖、先、崇、拜、行はるゝ場合には、始には食事を共にするの意味にて祖先を爐邊に招き祭る事ありと雖も、或は又祖先を敬重して、祭壇を設け、其他狩獵漂遊の社會にて、其家族種族の神として *トテム* (*Totem*) を崇拜するあり。兎に角家族的私祭行はるれば、一家族は其祭壇を共にし同一司祭長を奉ずるの故を以て、家族は一の宗教團躰となるなり。今日にても基督教の家族にて同一食卓につきて、父母が祈禱の監督として、家族が食卓祈禱をなす事あり、或は佛教の家族にては家族は定時に佛壇に集りて、家長を導師として讀經等をなす。此等の場合には、少くとも其間のみは家族は司祭組織の一宗教團躰をなせるなり。

此の如くにして、家族中に私祭の團結ある時には、大抵其と同時に幾多家族の集合なる一部落には、又公祭の行はるゝあり。其場合には、一部落一種族を以て一の宗教的團躰となし、一定の祭壇を作り、人々之に會合して公祭をなす。即此宗教團躰は種族組織と稱すべし。羅馬人は種族の公祭を種族祭祀 (*Sacra Gentilitia*) と呼びぬ。種族の公祭は、種族全躰の幸福を祈らん爲に、其種族の守護神、即氏族の祖神、地方の開拓神等を祭る者にして、種族全躰の人々は、此祭に會合して祭祀の主人となる。

社會の團結は此の如き會合に依りて固めらるゝと共に宗教も亦此に依りて公共の事業となり同一の儀式及其信仰を以て一般を支配し、種族の人々を同一宗教團結に包括す。種族組織の公共儀禮を營むに至れば、家族に於けるが如く總て人々盡く司祭として祭を行ふ能はず、社會の中にて最も儀禮に通じたる人を選びて祭事を司らしめ、若くは此の如き司祭の子孫之に當りて、此に特別に司祭の一階級を作り、此階級は血統に依り、或は儀式の熟練に依りて其人を作る。公祭の方法莊大丁重なるに従ひ、司祭の中にも祭祀全體の司管者、儀式の補助者等諸の分業を定むるを常とし、或は司祭の中に各家傳を有して從て各特別の祭祀を司り、或は同一祭祀も家傳に依りて其方法を異にする等の事を生ず。

公祭の組織を最も綿密にしたるには蓋し羅馬にして、其公祭には、人民全體が行ふ祭即公の祭禮 (Saera popularia) あり、又種族の執權者が種族の幸福を祈りて人民の爲にする祭祀 (Saera pro populo) あり。前者は我國の節句の如く、後者は我國の新嘗祭、四方拜等に相當す。此等の祭祀には、人民は種族幸福の爲に都府の殿堂に集まりて莊大の儀式を營み、其司祭は公司祭 (Sacerdos publicus) と稱し、其業務たる儀式は甚

複雑の知識を要したりしかば、彼等の中に分業階級の分別甚多く、彼等は皆政府監督の下に其業を行ひ、公祭にて祭るべき神即ジュピテル (Jupiter)、マルス (Mars) の如きには各共に附屬したる公司祭ありて、之を燃火者 (Flamen) と稱して特に其神に事へ、其外一般の司祭長としてポンテファックス (Pontifex) あり。羅馬の宗教は此等の司祭を中心としたる團結なりき。我國の古宗教も亦此に似て天子を首とし、中臣、忌部、兩氏司祭として政治の一部分として公祭を行ひ、此に依りて國民は宗教上一團結をなしたり。

印度の如きは殆ど公祭の思想なき國なれども、王者が施主となりて祭祀をなす時には、其祭は羅馬の人民の爲の祭に近き者あり。其所禱に曰く、

婆羅門は光榮と神聖とに充ちて生れかし、勇者、守護、強き射手なる轉輪の威ある王は王の勢力に生れかし、牝牛には乳多く、荷獸は強く、馬は早く、女は多く産し、武裝したる人は勝ち、壯年は多幸なれ、此供儀者には勇者なる兒生れかし、願に從てバルシャメヤは何時にても雨を與へよ、米穀は豊穰に實れかし、勤勞と安息とは我々に惠あれ。

即是れ國民一般の幸福を願へる者にして、殆ど公祭に似たり。印度にありても、司祭即婆羅門は一定の階級を作りて、其中に分業ありしやいふ迄もなし。要之儀禮組織にては、内部の信仰よりは寧ろ外面の祭儀を通有する事が、宗教の團體を作る基本となり、其團結の中心は家長若くは僧侶なる司祭にあり。而して此司祭は自ら神人の媒介者となるが故に、諸種の結果を生じ、家長は殆ど家に於ける生ける神となり、家内の安全幸福、家畜田園の事に至る迄、其人の保護にあるが如くなり來る。司祭が一定の階級となるに及びては、其尊嚴は一層を加へ、其社會上の位置は他の人民を支配するを得て、或は社會納税の義務を免れ、時には政治に干渉する事先に神政府の條に述べしが如し。此の如き威權あるは、畢竟司祭には其神力支配の力に依りて社會の安寧を保護する力ありと信ずるが故にして、或は司祭は病を醫する力ありとして、醫師の業を執り、或は風雨を左右するの祈禱者となり、其より又人の幸運を豫言し、或は占星術、卜筮者となり、又神の宣託を傳ふる者となる。神託宣傳の役目は、後に司祭が裁判者となり、又進では豫言者、聖人となるの源にして、重要な事實なりとす。

### 第三節 法律組織

律法的道德の宗教にありては、法律を其聖典となし、又司祭僧侶は、神意宣傳者として、神の法律を知得し、神法に従て神罰を行ふ監督者、又司法者となり來る。判官たる僧侶の教權を中心として、神法を行ふ宗教は、即法律組織なり。

法律宗教に於ける僧侶の事務中、最も重要なるは一般人民の監視にして、或は其道德を監督して其罪を罰し、又之を悔悛せしめ、其他法律の道德を進むるにあり。然れども法律の道德の中には、祭儀と見らるべき者をも含蓄し、人民をして一定の禮を受けしめ、又一定の祭時を恪守せしめ、出産、結婚、葬祭等の家族的行事には、僧侶の參列して一定の方法に據準せしむ、其他罪を犯せし者の懺悔を聞き、家族内の不和を調理する等、後世僧侶のなす處も既に此時に始められり。猶太のレビは人民を教育して、其道德を進め、人民の洗禮、割禮、或は除越祭等は、皆其の舉行する處なりき。婆羅門も亦此に同じく、彼等は時には裁判の陪審をもなしたり。波斯火教の如きも、ザラストラの立法に基きたる宗教なるを以て、其僧侶は拜火儀禮の職掌をなすのみならず、又、拜火清淨の旨意に基ける一切の行事を監督したり、即空氣、住居、衣服



を清淨にするは宗教上の義務なるが故に、其僧侶は躰育衛生の監督者なり。心を清淨にし、家内平穩なるも亦宗教の必要事なるを以て僧侶は兒童の家庭教育より家族道德の監督者なり。墨其哥、祕露の宗教にても、宗教道德は法律的なるを以て、僧侶は人民道德の嚮導監督にして人民の懺悔を聞き之を戒むるを職としたり。法律組織の宗教にては僧侶は此の如く人の道德生活に對して法律的威權と教師的干涉とを有するを以て、社會人文の上に諸種の結果を呈し來る。其直接の結果としては僧侶の權力を大にし、間接の結果としては僧侶を社會文明の嚮導者擔任者となして文明を進歩す。

僧侶が神の法律として行ふ事の中には、祭儀時代と同じく祭祀を爲すあり。祭祀は大抵時を定むる者なるが故に、歲時の計算より延びて天文的觀測を興すを得。此事は祭儀組織の中にも既に存するも、法律組織に至れば歲時の測定は法律的命令の如く行はれ、一方にては國家の威權と結合して僧侶は曆算の根本、教權となる。多くの國にて一國曆算の事が僧侶の手に存し、羅馬法王ゴレゴルの曆法を制定せしは、此法律的宗教の殘存結果なり。曆數の司管は又年代、記、歴史、記録の司管とな

るを常とす。猶太の聖書に列王紀略、民數紀略等の年代記録が聖書の中に列し、日本にても忌部氏が古記録を管し、印度の富蘭那即古事記が王者の年代を記録せるは皆是れなり。且僧侶は人民の教育者なるが故に、學術は多く其手に歸し、或は神の造りし者として天然を研究するが爲に天然科學の始をなし、或は世界の始終形態等に関する教を定め、或は神々に關して其傳記を傳ふ。科學的の事柄にして宗教的意識に直接關係なき事が、宗教の重要なる部分の如くなりしは、此が爲なり。例せば、基督教の僧侶が七藝を修し、婆羅門教、佛教等の僧侶が宇宙形態説を説きしが如きは、皆此實例にして、明治今日の佛僧が尙地球説を敬視して須彌山説を云々するは、此時代の餘波なり。此の如きは、當時にありては文明の爲に利益多く、僧侶が學術に貢獻ある所以なるも、而も僧侶が永く此の如き古代の學術を神聖視して、宗教以外に進歩したる科學に頑抗せんとし、所謂文化の争鬭若くは科學と宗教との衝突を生ずるに至りしも亦此に因す。羅馬教會がガリレイを獄に投じ、佛僧が日本科學の進歩を妨害せしが如きは、此結果の不良なる方面なり。僧侶が神的法律を楯として社會に干涉し、社會を利益する結果は其威權を増進し、

其社會的位置を昂め、其社會的威權を大にし、或は僧侶は高貴の一階級を作り、其極は王者の上に立つもあり、王者人民は特に之を寄附するを義務とする事あり、多くは租税等政治上の義務を負はず、又僧侶は國家の手にて罰せざる事あり。日本にて僧侶を罰するには特に平民に下して後にせし事あり。波斯の如きは、僧侶は醫師に治療費を拂ふを要せざる迄の特權を有したり。此の如き僧侶の社會上特權は、又王者貴族平民と争鬭の種となりし者にして、佛國革命の歴史日本の山法師の事蹟に明なり。僧侶が神的法律教權の代表者司法者として社會に最上の權力を有するに至れば、僧侶は大抵皆神的人と見做され、又其人民嚮導の點に於ては神智を有し、若しくは神智に接する人となる。婆羅門は地上に於ける神なりと云ひ、秘露のインカは日の子孫なりといふは、皆僧侶を神化したる者なり。又彼等は神智に近き人なれば、從て神意を宣傳する人となり、神託の通辨、神憑の人、豫言者となり、人民は僧侶の直接に神智を承くるを疑はず。彼等には神來ありとし、特別の啓示ありとし、又彼等の豫言、卜占、行爲には過誤なしと信ず。此の如きの信仰は既に祭儀組織の時代に萌芽するも、彼にありては、僧侶が此等の力あるは、彼等が神力の

一部を頌與せられし者として其力量に信頼せるなり、然るに此にありては、僧侶が代表する所の教權に歸服するに出づ。故に彼にありて卜占は單に將來の吉凶を豫言するに止まりて、主我幸福的なるも、此にありては純粹に豫言神託として、神が人間の道徳に對する譴責若しくは賞揚となり、將來人間の蹈むべき道を豫示命令するにあり、故に其道徳は他律的なり。

法律組織は祭儀を轉じて教權を確立する第一着歩にして、宗教教權の發達上甚だ重要な者なり。僧侶は道徳宗教の監督にして、又神聖なる人として、過誤なしとの信仰、及其より生ずる組織は、即後に教主組織に轉ずべき契機なりとす。

#### 第四節 教會組織、僧階及教主制度

教權組織は其れ自らにして、既に宗教上に僧侶と俗人とを分ちたる者なるが故に、其根本に於て宗教的階級を分別せる者なり。然れども、法律組織にありては僧俗の間尙融通なきにあらず、其の僧侶たる者は血統或は師弟相承に依るも、其が僧侶たる所以は法律の神智を有するが故なるを以て、俗人にては或は神法を説き、卜占

をなす者あれば、神智ある人として僧侶と並立し得べく、又其僧侶は神法の教權として人格的威權を有せざりしにあらざるも、其教權は世俗的權力との關係を離れず、多くは一國の社會的若くは政治的組織中に現はるゝ僧官若くは司祭の職務にして僧侶の神權は政權と混淆し、僧俗の別は確乎たる者にあらざりき。

然るに、宗教と法律との分離生じ、宗教の中には純粹に宗教的なる教團(其發生は後節に述ぶべし)を生じ、教團は教權に依りて固成し、宗教、教義及道德の教權が上下階級の秩序ある教會組織を制定するに及びては、僧俗の關係大に面目を改め來らざるを得ず。法律組織は神法の教權に成りたる國民的教會にして、教會組織は教義、道德の教團に成れる成立教會(established church)なり。此の如き成立教會にありては、恰も國家にて主權の委任を受くる者が官吏となり、其他は平民なるが如く、教會の教權に依りて、其一部を代表して其教會、職務(Kirchenamt)にある者と、其他の信者とは、教會の中に於て全然其資格を異にし、甲は即僧にして神の有となりし者、即希臘語にて κληρικός κληρος (Klerikos (Clergy)) 又宗教上の階級に入りし者、即羅甸語にて オルト(ordo)なり。之に反して乙は、此等僧侶に信賴するのみにして、直接に神の所有とな

り其階級に入りし者にあらざるは、俗人即一般平民(希臘語 Plēthē)なり。此二者の別をなすは、教權に依りて成立教會を組織し、其教理を信ぜしめ、其道德監督を執行するに避くべからざる組織なり。二世紀の教父テトリアンも既に之を論じて、教會の教權と名譽とは、教會の協賛を受けて、僧と俗との間に別をなすといへり。されば、教會は僧俗の分別に依りて立ちし者といふべく、僧侶は此時には既に司察にもあらず、司法者のみにもあらず、宗教的の教權の下に集れる教會の階級(ordo ecclesiasticus)なり。既に俗人の外に僧侶の階級を作りて教會階級となせば、教權代表と教會監督の高下の關係にて、其中、又幾何かの階級を生じ、此に僧階制度(hierarchy)を作る。既に僧階制度あれば、教權の把持に階級上下ありとなす者なるが故に、假令其始にありては平等にして上下の懸隔大ならざる分業なるも、其極は上進して一教會には最高教權を握れる機關人格を要するに至る。此の如き最高の教權を人に代表權化して其下に僧階を設くるは即教主制度(Patriarchy)なり。

僧階制度并に教主制度は何れの國、何れの時代の宗教にも、多少之を有せざるなきも、之を完全に作り出だせしは、基督教と佛教となり。基督教の始にありて、十二人

の弟子は特に基督の使徒(Apostle)と稱せられ、其他諸種の宗教的役務ありしも此は僧階にあらず、後に叙述せん如く教團組織の一分子なり。其中長老(Προβυτερος)と監督(ἐπίσκοπος)との二は、教會的教權の差異に出でし者にして、長老は、若年(νεός)に對して彼等の教導者なりしが如く、監督は又嚮導者(ἡγεμόνος)と稱せられ、其に屬する一都一地方の教會配下を支配しぬ。長老とは教會中の役務にあらずして、位置尊稱なりしも、古代の文書にありて長老と監督とが殆ど同一視せらるゝ點より見れば、長老なる人が多く監督の教務を行ひ(二者の關係に就きては異説あり、其下に執事(διακόνος)ありて、其教會を支配せしなり。

佛教にありても、事態全く之に同じく、佛陀在世の時及其後も、教團中の法齡道行にて他に秀でたる者は長老(又具意即アーユシマン(Ayushman)の稱號を有し、佛在世の時は其高弟として尊敬せられしが、佛滅後に及びては、彼等は佛教々團の教權を代表して上座、即佉毘羅(Sthavira, Therā)即教團の父(Sanghapatra)となり、地方、寺院等の區分に從て、各其配下なる教會を組織し、佛教は處々に上座を有する貴族共同的教會となりぬ。滅後百年毘舍利會議の時には、長老なる名稱も單に尊稱たらずして、役

務階級となりし者の如し。其と上座との上下關係は明ならずと雖も、上座は恰も基督教の監督の如く上位に位せしに似たり。其より後印度佛教の教會役務の發達は明ならざるも、諸の尊稱位階が増したるより見れば、役務も亦幾分か複雑に赴きしならん。但印度本土にては、佛教は教會的組織を發達せざりしを以て、其階も簡單なる儘にして亡びしならん。錫崙にありても、其僧階の最上は上座と稱するのみ。

基督教にては、監督は主として都會に住して其教會の監督をなせし者なりしかば、其位置は漸次重要となり來り、都會の教會が團結して勢力を大にするに從ひ、其長老として監督の役にある人は、其内部の整理より外部教會との交通を管し、又教會の教權を握りたり。此故に監督は神に對すれば正統の教權代表者にして、人民に對すれば主權なり。監督即後に司教(Bishop)となりし教役に關して此尊貴の概念を發揮したるは、三世紀のチアリアン(Cyprian)にして、爾後諸都府の監督は皆此旨意に依りて、自ら神權の正統を承けて教會の主權を握る者なりとなし、一の羊群に一人の牧者といふ事は教會組織の大格言となりぬ。此の如く幾多の監督は諸地

方の教會に割據して其間に異同を生ずるも、亦彼等は同じく基督の教會に屬するとの意識を有するを以て、此に監督の相互交通を必要とし、諸地方便宜に従て監督の會合を開くに至りぬ。シノド(Synod 又 consilium)會議即是れなり。此會議は宗教上并に政治上重要なる首府即メトロポリス(Metropolis)に開く事となり、東にありてはアレキサンドリア、アンチオカ等、西にありては羅馬、カルタゴ等は其位置となり、此等首府の監督司教は特にメトロポリタン(Metropolitans)と稱せられ、宛然後世の大司教の位置を占めぬ。其後三二五年ニカイア公會にてアレキサンドリア、アンチオカ、羅馬のメトロポリタンは特に其權能を公認せられしが、其中にも羅馬は當時大帝國の首府にして、又財富の中心なりしかば、其メトロポリタンは漸次他を凌駕するの勢力を養ひ、又其教會はローマの血に成りし之の故因を稱し、ペトロが神より受けし教會の礎といふ事は特に羅馬教會の事と解せしより、羅馬のメトロポリタンは漸次司教の司教となり、シーレンマン帝の羅馬帝國建立策と相合して、并に其權力増長を助け、終に法王(Pope)となりぬ。

佛教にありて、法主制度は西藏の達賴喇嘛(Dalai Lama)と日本眞宗の法主とに成立

したり。西藏なる達賴喇嘛が喇嘛中に法主となりしも、亦其寺院の中心位置を占めしより出で、首府刺薩なる根本寺院は西藏佛教の中心となりしより、其寺の高僧は自然に法王となりぬ。加之元忽必烈の時、此寺を統轄せる喇嘛に最勝喇嘛即發合里巴(Phagspa)の稱號を與て、國內政教の大權を委せしかば、其法主權は愈々鞏固となりぬ。其後元朝亡び明朝起るに及びて、他の喇嘛に對して大海僧即達賴喇嘛を以て政教の首長とせしより、法主權は又た此法主に移りて、其下には札什喇嘛(Zashi Lama)、班禪喇嘛(Panchen Lama)等ありて、威嚴ある法主組織をなせり。

日本の眞宗に於ける法主權の發達亦之に類す。抑も眞宗の開祖は諸處に居處を移すと共に、何れを中央本山とする事なく、之を其弟子に委し、又其布教は頗る平民的なりしに、兼善以後勢力増大するに及びて、台榭王朝時代の僧官僧階の觀念に倣て僧侶に高下の別をなし、漸次法主の威嚴を加へ、其寺は親鸞の創立にあらざるも其女が創建せし因縁を口實として、血脈相承を以て教權を維持し、進で皇室に倣ひて宛然教法上の一帝國を作るに至れり。特に其法主權の發達に利ありしは、戰國の混亂に乗じて、兵力に依り諸侯の間に勢力を占め、時には諸侯の領地を占領し、時

には其家を横奪し、此の如くにして所謂一向一揆の長たる法主は、益其勢力を養ひしが、其後徳川家の政略は其勢力を二分して、法主を東西に對立せしめ、二者並に其保護に依りて法主権を固成し、其下には連枝と稱する一門を列ねて皇族に擬し、僧階には勸學講師等多くの階級を作りて其威嚴を加へぬ。

法主制度は、此の如く何れの處にありても僧階制度と密接して發達し、僧階進めば法主となり、法主制度確立すれば又其中に僧階制度を増長す、其關係は王政と貴族制との如し。僧階制度にありても法主制度にありても、一定の制度組織を有する者なるを以て、其教派は嚴格なる政治組織を作り出だして、制度組織上他と融通すべからざる宗派をなすに至る。其結果として又外形形式の拘泥は自ら宗教の内部的信仰を疎略にするの弊を生じ、其宗派を團結する所以は儀式制度の外形を基とするに至る。然れども此の如き宗派にありても、其大本は教權に基き、儀式制度亦教權に依りて支配せらるゝ者なれば、此教權の勢能併用は他方にては又信仰に干渉せざるを得ず。即ち僧階の高位者及法主は信仰の監督者として、宗義信條を監督制定するの要あり。宗義信條は又信仰を規定するに文字形式を以てし、狹隘

なる宗派心を養成し、時には不幸なる宗義の爭論より、不信者、刑罰を行ふの源を開く。宗義の異同の爲に、東本願寺が其異端と認むる者を獄に投じ、コンスタンチノポリの教會が聖母を崇拜せざりしテストリウスを追放に處したるが如きは、宗義爭論の極端に走りし者なり。又羅馬教會が西班牙等の帝王と合して、新教の徒を刑罰したる宗教刑罰 (Inquisition) の如き、又は回教の法主帝王が其の領内の不信者に課税を重くして之れを苦めたるは、皆教會制度の宗派的固成に伴生せし弊害なり。

僧階及法主制度にありて特に注意を要するは、其教權は單に教會内に支撐を求むるのみならず、多く政權と結托し、又其教權を政治的に固成するの點にあり。即前述の諸例にても大抵明瞭なる如く、基督教の僧階は羅馬帝國の政治と結托して、其結果は羅馬帝國の再興と共に法王の權力を大成し、今日にありても羅馬教會は、其政治的組織の完美を以て稱せられ、從て其聖教主義は最も政治組織の思想に富みり。日本の僧階は即僧位僧官にして、朝廷より出で、真宗の法主制度の如きは、戦國

なるが、又自ら政治的組織を以て法主制度を成せし者回教の如く著しきあり。即ちモハンメットの戦争的布教は、豫言者を以て其教團(Dinama)の君主即カリフ(Kalif)として、政教の首長となすに至りぬ。回教の印度に入りし者の一派シク(Sikh)教の如きも、此の如き政教的團體を作り、其師長(Guru)は法王にして、又軍將なりき(拙著印度下巻頁以下)。

僧階及法主制度は、教權組織が最も具象的に表はれ、宗派の形成が最も明白鞏固に成りし者なり。此を以て、教權擴張と宗派隆盛との希望は、此制度に依りて最も明晰に現はるゝを常とす。此希望の爲に宗教刑罰等の弊事を生ぜしむも、此熱心は又布教の熱情を振興するの因となる事なきにあらず。羅馬教會の如きは、特に此精神の隆盛なりし者にして、政治上に帝王が天に二日なしとて天下を統一せんとすると同じく、法主は「一の羊群に一人の牧者なれば、總て基督の教會は一箇教主の教權に服従せざるべからず」となし、今も尙世界を法王の領地なりとて多くの教區を分ち、司教をして之を管轄せしむ。然れども法主制度に於ける布教的精神には、多くは形式外面に走るの弊と、政界方便の混淆とあるを免れず。其教會は多く信者を得んとするも、内心信仰よりは寧ろ外面的にても教會に服従するを好み、其流弊は終に如何なる方便を用ふるも多くの人をして歸服の告白をなし、其宗義儀式に従はしめんとす。羅馬教會に於けるマニートの如きは、最も此弊害を呈露したる者なり。

### 第五節 教團の概念

教團とは儀式を主とせず、又單に教權に依らず、信仰を主として同一理想に向て修行する人々の精神的團結なり。されば教會は元來字內的の觀念にして、此の如き教會の觀念が発生したるは世界最初の字內的宗教なる佛教にあり。即増一阿含(第二十一卷)に、

四大河入海已無復本名字、但名爲海、此亦如是、有四姓……於如來處、剃除鬚髮、著三法衣、出家學道、無復本姓、但言沙門釋迦子……除去結使、入於無畏涅槃城。

といふは、佛陀の教に依りて修行する者は、諸の族姓の區別なく、同一理想を以て同一の修行をなす者なり、此の如きは即佛者の和合團體即僧伽(Sangha)にして、其は佛

陀を師とし、涅槃の理想を中心として、和合せる教團なり。故に中阿含(淨不動經)に、  
佛陀は其僧伽の衆に告げて曰く、

我今爲汝已說淨不動道、已說淨無處有處道、已說淨無想道、已說無餘涅槃、已說聖解  
脫、如尊師所爲弟子起大慈哀憐念、愍傷求義、及饒益求安隱快樂者、我今已作、汝等當  
復自作……勿得放逸、勤加精進、莫令後悔、此是我之教勅、是我訓誨。

此の如き普遍的性質を帯びたる教會僧伽の觀念理想は、實に又普遍的なる布教的  
精神に出でし者にして、佛陀が成道の始に其弟子を四方に派して布教せしむるや、  
之に命じて曰く(本行集經第四十三品上)

汝諸比丘、若當知、我已得解脫、應於一切諸天人中行、汝等行、爲令多人得利益故、爲令  
人得安樂故、爲世間求當來利益及安樂故……汝等若欲行至他方聚落、爲於多人、生  
隣愍故、聲受彼故、當爲說法、初中後善、其義微妙、具足無缺、汝等比丘、當說梵行、諸有衆  
生、少諸塵垢、薄於結使、諸根成熟、恐畏不能得聞正法。

基督教は第二の普遍的教會の宗教なり。故に宇内の布教の理想は其始より具は  
り、保羅の基督觀に基きし路加福音書(二七)には基督を稱して、

其名に依りて、悔ひ改めよと罪の赦しとは、エルサレムより始まり、萬國の民に宣  
傳せられん、

といひ、此宇内的理想は又宇内的教會の理想となりぬ。ポロロは曰く、  
ユダヤ人とギリシヤ人との別なし、そはすべての者の主は惟一なればなり。凡  
そ之を呼び求むる者には恩恵を盛にし、凡て主の名を呼び求むる者は救はるべ  
し。(羅馬書一三〇)。

ユダヤ人、またギリシヤ人、或は奴隸、或は主人、或は男、或は女の區別なし。そは汝  
等皆キリストイエスに在りて一なればなり。(加拉太書三)。

此の如く主キリストの教に依りて、其名を求め、其教を信する者の團躰は、基督の體  
をなせし者即基督教の教會なり。希臘語の教會なる語エクレシヤ(Ekklesia)は、元  
は只集會の義なりしより轉じ、英語のチャーチ(Church)獨逸語のキルヘ(Kirche)は、其  
に古獨逸のハラハ(Haraha)キルヒ(Horch)即神の森より轉じたる語なり。此等を佛  
教の僧伽即和合に比照すれば、佛教の用語は、始より明瞭に教團の概念を表したる  
者といふべし。



佛教も基督教も、此の如き宏博なる概念を以て其教團の源頭を開きたり。而して其末に至りては、法主制度、僧階制度を生じ、信仰道行の團結を化して、教權、宗義、儀式の教團となしたり。然れども、此等後世の組織は全く教會の概念に背くにあらず。羅馬法王の教會の如きも、不可見の教會とて神の王國は現世可見の教會の原型なりと説く點にては、やはり宏博なる教團の概念が根柢に存するが爲なり。

### 第六節 共同及組合組織

教團は最も宏博なる觀念にして、字內的の性質を有す、此を以て其組織は如何なる性質をも帯び得べく、僧階、法主の制の如きも教團の一形式たるを得べしと雖も、其宏博にして字內的なる性質に最も能く適合する者は共同組織 (Communité) なり。共同組織とは同一信仰を抱き同一理想に向て修行する限は、如何なる制限をも設けず、又可成一定の束縛をなさずして、其信仰を磨き修行を勵むる限に於て共同和合して教團をなすなり。故に其結合は精神的にして、何等法律的の關係及組織あるなし。佛陀在世の時に於ける佛教の教團には、戒律の規定ありて修行者を束縛せ

しも、此規定は法律的の組織關係を示したる者にあらず、其團結は純粹に精神的なる結合なりき。基督教の使徒時代も、亦純粹なる共同組織にして、其結合は基督の人物に歸依翹集したる人の精神的交通なりき。

共同組織は自由の團結にして、信仰道行を以て結合離散の原動力となす者なれば、宗教的團結の此の如き組織に依りて行はるゝは、修行者が儀式宗義等の外形を棄て、眞に衷情に敬虔摯實なる道心を具ふる時にあり、特に佛陀基督の如き偉大なる人物の教化を行ふ時にあり。故に共同組織が圓滿に行はるゝは、其宗教が発生活潑の状態にあるを示す者なり。回教の如きは、モハンメッド在世の時に既に法王的組織を作り、法律的團結の觀念を有したるも、而もモハンメッドが其初メツカにありて、眞摯に説法して少數の信者と共に、周圍の迫害を忍びつゝ、神に事へし時は、純粹なる精神的共同團結なりき。此種の團結が、宗教の活潑にして發達力に富める時代の特産なる事見るべきなり。されば、共同的教團は多くは一宗派の觀念を抱かず、從て一定の宗義儀式を具ふる事なく、又特に宗教的と稱せず、或は哲學派の如くにして、或は道德、修養の圓牀として存す。

其例を擧ぐれば、孔門の弟子三千人は此種の共同生活を存せし者なり。其が天命を敬し祖先に事ふるの道を講ぜし點に於ては、宗教的なり、其が六藝を修め、士大夫の道を修せし點にては、教育的なり、其が仁政を以て王政を行ふに盡瘁せしは政治的なり、共同教團の性質概ね皆然り。希臘にてもソクラテース以後、哲學者即當時世間に賢人として尊重せらるゝ人は、皆此の如き團體を作りて其弟子を教導薫陶したり。プラトーンがアカデミアの森に其弟子を率ひたるが如き、アリストテレスがリュケウムの森の樹陰に一派の逍遙派(Peripatetics)をなしたるも皆是れなり。希臘の末より羅馬の始には、此の如き哲學者の共同團結甚だ多く、ピタゴラス派、エピクロス派の如きは殆ど一派の宗教を作りし姿あり。セネカは此の如き教派を稱して學說(opinio)と祭祀(sacrum)との團結と稱したり。蓋し此等教團の末路は漸次宗派的となり、ピタゴラス派には入門入學の式を定め、エピクロス派は一定の祭日を制定し、新プラトーン派は祕密行事を行ひしも、元は皆精神的の教團にして、漸次宗派をなせしなり。

共同組織は、此の如く新に一宗教の起りし時に出づると同じく、一宗教が始めて某の國に入りて、幾分か祕密的に行はるゝ時、若くは社會の狀態が其精神の公開を許さざる時に出づ。即此の如き時勢にありては、公に其信仰を稱ふる能はざる不利の事情あるを以て、之に歸依する人は真心の信仰にあらざんば之に加はらず、且同信仰の者は周圍と相隔離して、内部にて固く親しく結合し得るが故に、其團結は鞏固なるべし。祕密結社として此等團結が鞏固なるは是が爲にして、羅馬人の稱してトリ(Horti)或はコレギア(Collegia)と稱せし者、希臘にてテアソイ(Theatros)といひしは、此種の結社を總稱したるなり。其實例二三を擧げんに、始め羅馬府にては、無告の奴隸賤民が團結して、死後の安康の爲に共同せし葬式結社(Collegia funeraticia)なる者ありき。然るに基督教初て羅馬に入り、國教の迫害の下に信者を得るや、其信者等は此葬式結社の祕密團結中にありて相交通團結したり。新教の中にも、虔信團結(Collegia Pietatis)は神學の議論に反して、虔信を主として起りし私結社なりき。我國にて王朝の末台嶺の教權隆盛にして、信仰は僧官教義の爲に壓迫せらるゝに當て、念佛修行者、良忍、源空、親鸞等の下に集りし者は、宛然下層人民を包括したる共同結社の姿をなしたりき。特に親鸞が北陸に布教するや、邊鄙の愚民は從來の無信

落實に代ふるに虔信の教を得しかば、其團結は一定の組織なきも、一般に蔓延したる精神的團結となりき。今日眞宗の範圍に於て、祕事、法門、隱し念佛等が大なる精神的祕密團結をなせるは、眞宗の起原より存したる現象にして、其法主組織は却て後世に出でし者なり。

共同組織に屬する祕密結社は一種の奇妙にして、而かも勢力ある現象なり。歐米の文明國より亞米利加、亞弗利加の蠻人の間にも是れなきなく、歐洲の蔷薇十字(Rosenkreuzer)、自由左官(Freimaurer)の如き大なる者を始とし、露國に多き結社より、黑人のエンバカッセイロ(Empacasseiro)、タヒチ土人のアレイロオ(Areios)の如き、又は亞米利加印甸が其種族トテム崇拜の下に祕密崇拜の團結をなせる等、擧げて數ふべからず。又其中には宗教に加ふるに政治上の目的を以てする者あり、虛無黨、哥老會、東學黨の如き之に屬す。祕密結社の起因、勢力、團結力は宗教上、社會學上甚だ興味ある研究問題なるも、彼等は多く其祕密を漏らさざるを以て研究をなす事固より容易ならず。

尙共同組織に就きて一の變態あり。即成立教會特に法主制度の範圍内にありて

一種の精神的團結をなす者往々にしてある是れなり。此現象は特に羅馬教會に多かりき。即十三世紀の始頃、法王の威權は王侯を壓服し、之に加ふるに十字軍の熱情は百年以來一般人心に非常なる動搖を與へしかば、一方にては騎士が宗教上の熱心より團結して十字軍に出陣する者續々たると共に、僧侶等も亦此の如き團結をなして精神的事業に従事したり、此等は教團(Ordre)と稱せられき。其中に著しきは法王の富貴に反對して貧賤無慾を主義とし、乞食として四方に説法せしフランス派(Franziskaner)ありて羅馬教會の中に存立したり、此はアシシのフランスの創むる所なり。回教の乞食僧(Dervish)即毛衣(OEI)一派も亦フランス派と同しく、正統教會中の精神的教團なり。フランス派の平和的布教と趣を異にして、教會正統説の擁護者として破邪の運動を昌にしたるドミニカン(Dominikaner)あり、スコラの神學者の團體として常に異端を排斥し、宗教刑罰の主張者として自ら主の犬(Dominicanes)を以て任じたり。其後ルーテルの改革後之に反抗して起りしシエスイト派(Jesuit)は法王の威權に依りて神の王國を世界に實現するを目的とし、其團體には一種の狂熱的運動をなして、外國の政府をも倒して神の王國の爲に盡さんとした

り。此時勢の大波瀾は、又教會以外に多くの神祕家の團體をも生じたり。佛國のアマリック派 (Amalriker) の如き、其瑞西南獨逸に於ける復興なる自由精神同胞團體 (Brüder des freien Geistes) より以下、マニハ教の分子を交へたるカタレル派 (Katharer)、アルトマンズ派 (Albigenser)、ベネガが始めしベネ派 (Beghinen)、ワルドスの始めしワルド流 (Waldenser)、エックハルトが神祕説を奉じて狂熱的運動をなせし神祕的婦人 (mystische Frauen) 及神の友 (Gottesfreunde) と稱せし團體、及神友團體の餘波以太利に及びて成立せし、コロニミア團體 (Hieronymianer) 又好意同胞 (fratres bonae voluntatis) 若くは共同生活同胞 (Brüder von gemeinsamem Leben) の如きは皆神祕的觀念を抱きて共同團結をなせし者なり。神祕家が好で此の如き共同團結、特に祕密結社をなすは古今多く見る所の事實なり。

兎に角共同とは只管精神に依りて團結する者なり。故に其始にありては一定の制度組織を具えざるも、其團體の生存と共に制度の必要を感じ來り、多くは共和的の制度を以て、其團結を憲法的に組織す、此組織を得れば共同は即組合 (Genossenschaft) となる。此二者は固より判然たる區別あるにあらざり、判然たる組織を作ふと否と

を判つ爲に便宜に命名したる者なり。今日の新教々會は多く此組合組織にして、一定の憲法様の根柢に立ち、議政、布教、財政等各、其機關を具ふ。

第二部

宗教社會學

237

宗教的の道德の結果は、宗教的の團結として社會的の勢力となり、宗教は此に於て社會現象となれり。社會的事實として宗教は生命發達を有し、社會的の人文史的事情と相關聯す、此相關聯生命は即宗教社會學の題目なり。此一部には、先づ宗教が社會的の發達をなす諸の事情勢力境遇を考究し、次に宗教と相并で社會人文の一分子として人心を支配しつつ、宗教と相交渉する諸現象につきて、其特質并に其と宗教との關係を述べ、終に世界の諸民族諸國民に現れたる諸宗教の一般概見をなさん。

### 第一章 社會的現象としての宗教

宗教は個人意識の事實に止まるのみならず、其が道德實行として發表するに及びては協同を要し團結を促し、此團結の勢力に依りて、宗教的意識の内容を感化するのみならず、又其精神の團結をして社會的勢力たらしむ。凡そ宗教的意識は直接主觀的の満足安立を目的として、其が神として崇拜する客體と躬親ら人格的に交通親炙して、其力を自己に獲得し、客觀的の神を十分に主觀に密接するにあらざれば止まず。或は衷心の歸敬といひ、或は專念の信心といひ、絶對依屬の感情といひ、見性の悟徹といふも、皆心の奥に神の交通親炙を求むる契機を言ひ表せし者に外ならず、此點よりいへば、宗教的意識は最も主觀的の機能と稱すべし。然れども最も主觀的に獨得の技能を鍛鍊したる人々が、所謂入神の境に入れば、直接の交通なきままに其技能或は意氣相通じ呼吸相應じ得るが如く、宗教上の衷心悟得が入神の境に入れば、其主觀性の奥は互に呼吸精神相通じて、同じ神の中に交通し、同じ神の下に團結するの感を得べし。即信仰同じき者は互に同じ神に屬するを意識して、精神の一致交通を密接にし、主觀的の宗教勢力は此に於て客觀的の團結の勢力と

なる。

宗教の客觀的團結社會的勢力は、宗教的意識が其根本に於て神と合一を求め、個人生活の範圍を擴大せんとする衝動に出づる自然の結果にして、其の宗教的満足が主觀的信仰の安立より、進で教會宗派の團結をなすも、其自然の經行なり。此を以て同一の教會に屬し、同一の神を信ずる者にありては、其理想信仰を一にし、其儀禮道徳を一にするのみならず、其極端に至れば人々の個人的獨立を宗教的團結の中に沒せしめ、其信仰満足も教會を源泉として、其會員共通の信仰なりと信じ、其道徳も自家一人の行爲としては満足する能はざらしむ。此に於て教會は神の代表救濟の實力となり、教會を母とせざれば神を父とする能はずといひ、教會に屬せざる者は教に與らずとなすに至る。印度のプラバ派が、其信者をして服裝名稱をも一にせしめ、又總て精神財産を教會に歸托するを盟はしむるが如き、又はマニイトが教會は生體にして、信者は屍體の如く、教會を離れては生命を有せずといひしが如きは、此團結を嚴厲に強行せし者なり。

宗教は其根本動機の結果自ら此の如く社會的團結をなし、社會的勢力を有する現象なり。

此を以て其生活發達の過程は單に個人意識の事實のみならずして、社會の人文中に生存して、他の社會的勢力と相交渉影響し、其發達變遷は固より個人の意識に入りて効果を呈するも、此の如き影響の原動勢力は、一個人の勢力に出づる事稀にして、大抵は社會全體の人文的勢力として現れ來るを常とす。即宗教は政治、道徳、言語等の社會現象と同じく、個人的生命の上に立ちて社會全般の潮流を支配する勢力過程を有し、個人の生死に關せずして永久に發達するの歴史的生命を有せり。印度人の間には、其人民社會全般の勢力として印度固有の宗教的勢力ありて、其エタの宗教を生じ、釋迦の佛教を生じ、此に依りて各其時代の人心を支配し、其より流れ出でし宗教の歴史を有せり。其他何れの人種何れの國民に於ても、其宗教的生命歴史を有して其人文の活動の大切なる一分子となさざるなし。固より此等の宗教を觀察して、其經文殿堂等死せる宗教的發表の外に、活きたる宗教の存在を求むれば、其中の各時代各方處に生存したる個人の意識に其宗教の存在を發見するの外なしと雖も、此等無數の生きては死し現れては逝き去りし個人以上、更に宗教の社會的歴史的な生命勢力ありて、其範圍に生れ來る人々の宗教的意識

を支配し、永遠の發達をなすは拒むべからざる事實なり。此社會的方面より觀察を下せば、各個人の宗教的意識とは、人文史的宗教の大潮流の一部に浮動せる者に過ぎずといふべし。

されば宗教は自ら社會的團結を作るのみならず、其社會的生命を發達する間には、密接に社會の他の現象勢力と交渉し、民族的性格、社會的事情に依りて其特色をなし、其發達を左右すると共に、又人類慾求の最深き原動力として、人間の最高の理想を標榜して、道德、法律、科學、美術等一切人文の中心嚮導をなす。太古の民族的宗教が、各其民族の性格境遇を代表して、人種的特色を有したると共に、又其社會的團結に密着して、宗教的制裁を以て社會の風習道德を支配し、宗教的尊嚴を以て、其元首たる酋長或は家長の威權を護成して、社會的團結に深く人心を支配する根據を與へしは、何れの國にありても顯著の事實なり。此より世の文明が進歩して、政治、科學等皆宗教より特立して自家の本分を盡すに至りても、宗教が此等人文諸勢力の間に立ちて、最も深く弘く人心の奥を支配するは多くの歴史の示す所にして、學術教育と宗教とが或は相助け或は相衝突し、美術が多く宗教の支撐に依りて榮ゆる

は、萬目の睹る所なりとす。

宗教が生活する最深の根據は個人の意識にありと雖も、其顯動は此の如く社會的歴史的生命を有するを以て、既に意識の事實として宗教を觀察したる吾人は、進で此社會的方面に移らざるべからず。宗教の社會的生命は如何なる状態を以て如何なる規定の下に發達するか、其の社會的生命と一般社會人文との關係は如何、又世界の諸民族、諸國民の間にて如何なる宗教が其社會的勢力として存在せしか。此等は即宗教社會學の研究すべき題目なりとす。



## 第二章 宗教の社會的發達

## 第一節 宗教の社會的發達の一般傾向

生命とは生活過程の進行に外ならず、此なければ生命は死する者なれば、宗教に社會的生命ありといふは、其歴史的生活過程に發達ありといふに同じ。固より宗教の社會的生命には進歩もあれば退歩もあり、其勢力が増進する事もあれば其感化力が減退する事もありと雖も、其變遷過程には必ず因果の聯絡を有し、社會人心の規律勢力に支配せられつつ進み行く軀制的關係を有するが故に、之を發達とは稱するなり。即發達といひ進化といふは生活を有する變遷にして、此の如き變遷は突然外部よりの干渉に動かされ、或は俄に個人の任意に支配せらるゝ者にあらずして、内外の事情が反應應合して其生活の變化を促す間には、個人的意識として、社會的の人文として、宗教の宗教たる本領中心原動力の統一に依らずんば、宗教の變遷となる能はず。即宗教發達の軀制的關係とは、前に心理研究の下に明にせし宗教の原動力、神人合一の要求が中心となりて、其信仰觀念、其儀禮道德の社會的勢力

を開發する者に外ならず。されば宗教の發達は、固より民族の宗教的需要の大小内外事情の如何に依りて、其遲速を異にし、其程度其内容を異にし、急速に高等なる宗教的の人文を開發する者もあれば、又終に他の人文或は宗教に壓制せられて死滅するもあれば、其變遷が機制的にして偶然ならず、變化複雜の間にも一貫の原動力を有するに至りては、何れの宗教發達も其數に漏る事なし。

宗教は此の如く機制的に發達するも、其或者は早く進歩し、或者は遅くして、諸民族の宗教に異同を生ずると同じく、同一民族に屬する同一系統の宗教にても、其全體の發達が社會の何れの階級部分にも平等一様なる能はず。同じ社會にても上流の教育ある人々と下層無文の徒とは、其思想信仰に非常の懸隔あり、開明國にても其上流と下流との徑庭は、其下流と未開人民との懸隔よりも大なる者あり、從て其宗教の發達程度にも差異多く、其間に衝突を生ずるの例に乏しからず。加之、宗教には内面的の信念と外面的の禮儀との二分子ありて、信念思想は割合に自由濶達に變化して、他の人文的勢力若くは外民族の影響を蒙りて同化革新し易きも、其儀禮形骸に至りては保守的傾向多く、爲に二者相支吾して同一系宗教の中に撞着を生ず

る事少なからず。例せば、神に関する觀念は既に道德的に高尚なる性質を有せるも、其偶像は尙人身牛首等畸形を保存せられ、其道德思想は既に殺人を非とし、人身供物を排斥しながら、其儀禮には尙之が形式を保存して、人身の表象を神に供する事あり。世間學術の進歩につれて知識は一般に進歩せる時にも、一旦教會の宗義となりし者は容易に變更し易からず、終に宗教改革の一因を爲す事も多かりき。宗教の發達は此の如く、必しも齊一單調にあらざると雖も、其現象發表が人心の統一的據據より出でし社會的勢力なる以上は、其發達にも中心點原動力の統一あるべきは理の當然にして、其一般發達及特殊宗教史の研究とは、即此統一的契機を發明するを目的とすべきなり。

宗教の發達は最も密接に道德の發達と相關聯し、文學、美術と相助け、又其進歩は宗教的感情の昇進、信仰の精神的傾向に發表すと雖も、其中心は人間の神に對する態度が其統一を明にしつつ、而も其内容を豊富にするにあり。凡そ發達とは特殊變化の間に統一の觀念が一貫して特殊複雜の事情の中に普遍性の開發するをいふ。此を以て、吾人が宗教の變化を以て一貫の聯絡ある發達なりとするは、此觀念に依

りて雜多の變化を統轄せんとするに外ならず、其進化の中に分化と統一とが相並び相助けて生長し、宗教の根本動機が其内容發表を複雜にして、其複雜の中に理想を現實にせる關係を認識せんとするに外ならず。發達の觀念は個々特別の宗教的事實を統一的に包括する吾人の理性的需要にして、而して又宗教其物は先に心理に明にしたるが如く、神人合一の中心動機を複雜の事情の下に開發する人文史的事實として、恰も發達なる吾人の概念を適用すべき現象にてあるなり。

宗教の發達は、單調より複雑に分化するは第一に注意を惹く事實にして、未開の宗教が簡單なる祈禱供物を以て満足せし祈願も、基督教にては複雑なる諸の機密式となれるのみならず、救を得べき爲には一定の信仰と道德とを必要とせり。固より未開人民の天然的生氣主義より出でし神話は、各人種にて差異特色を有し、其の崇拜せる咒物偶像の類は甚だ任意的に又變化多くして一見甚だ複雑なるに似たりと雖も、其實は甚だ單調にして、未開人の宗教を一々叙述せんには、何れの處にも同様近似の事のみ多く、其反復單調に堪えざらしむる者あり。南洋の宗教と黒人の宗教とが外形名稱の差異の外に大なる區別なく、支那古來の鬼神崇拜と印度の

幽鬼信仰と相似多く、希臘の靈魂の觀念と日本のとが甚だ相近きが如き實例は至る所に存し、劣等幼稚の宗教觀念及慣行の何れの國にも同じきを示せり。此の如きは又未開の殘存として、今日文明諸國の民間宗教に類似多き所以なりとす。日本の盆祭りと中歐の一切靈魂祭(All souls' feast)との如き、實例甚だ多く、一々枚舉するに追わらず。

未開の單調混沌も各其國の歴史事情に依りて特色を開發するに至れば、茲に國民的特色の宗教を生じて、其理想を異にし、其道德習慣を複雑にする事、元は同一なりし印度人と波斯人とが争ふべからざる特色を開發して、冥想的と道德的との特色を開發したるが如き、其特色の中には又其複雑の分子を開發したり。其より以上宗教の内容は哲學道德の開發と共に複雑にして、同じ佛教の中にも、遁世修行の方面と濟度力行の方面と并存し、其無我の根底よりは殆ど相反したるが如き中觀の認識論と瑜伽の觀行とを生じたり。基督教に於ても固より此に同じく、修道院の遁世道德とスコラ神學者の哲學論とは共に同じ教會に屬し、聖教と新教とは共に基督教思想の中に現れて、相對峙しながら又相影響せり。複雑の度は宗教の開發

と共に進むは、明なる事實なり。

然れども複雑分化の中には統一の進歩ありて、宗教的理想の中心は益明白となり、複雑なる觀念道德は此中心理想の爲に存する事念意識せられ、其極は終に普遍的理想を唱へて、一切の宗教を包括統一せんとする希望をすら生ずるに至れり。例を神の觀念にとりて觀察するに、未開幼稚の宗教にては時々、慾望觀想に動かされて、無數の神靈が時に應じて活動せるを觀じ、之を崇拜し、其世界觀が雲霧の如く定形なく消散常なきと同じく、其神も變轉常なし。此より進で、其慾望觀念が多少定形を得、其神靈が各一定の名稱と一定の形相とを有して、相并存する多神教の状態に進めば、則其の各の神靈は各自一貫の統一を得たる者なれども、全體としての統一は未だ十分ならざるなり。然れども何れの國の多神教にても、其諸神界に統一なきはなく、アスリア及フニケアの如き殆ど純粹の多神にても、其中に主要神の特に尊崇せらるゝ者あり、埃及にても、其多神の中に首領神あるを信じたり。印度の如きは三千三百万の多神あれど、其は皆最上神の發現に外ならずとの信仰既に成熟して、其思想は統一ある唯心主義となれり。固より多神が此の如く最上神に統

一せらるゝに至る事情は一ならず、或は神々が其尊稱を同一にする事情よりして、同じ尊稱を受くる神が一神に融合する事もあり、又其一定の神格が天然現象(太陽の如き)として最も人の注意を惹き、或は祖神として或は君主の神として漸次首位を占むるに至る等、一律ならざるも、諸神界が統一せらるるの傾向を呈するは、何れの宗教史にも著し。而して其極は波斯の神々が道德的にアフラマゾオに統御せられ、印度の神々が哲學的統一の爲に梵天に隸屬し、猶太教が國民的正義の守護神として唯一にエホバを崇拜する等、所謂唯一神教に向て進行し、佛教の如き其外面は多神なりと雖も、其根據に於ては十分に唯一神教的統一を示せり。其他儀禮にても道德にても、複雑分化の裏に精神の中心統一増長せるは、既に自律的道德の條下にも之を説きぬ。

宗教の發達は宗教其れ自家の分化と統一とを増進するのみならず、又其他の人文現象との交渉をも複雑にするると同時に、統一の中心に向て進むを見ん。科學、美術、社會的生活の如きは、始は宗教と混雜し、若くは其中に寄寓するも、社會の進歩は此等諸人文の本領を明晰に分化せしめ、而も其獨立的領域職分を保ちつゝ、相助くる

に至る。天文、歴史の如き學科は、元宗教の一部として僧侶の司る所なりしに、後獨立の科學として分離し、宗教をして宇宙形態の論、人類創造の歴史等に關涉して、却て其本領なる道德の清淨を防ぐの弊に遠からしめたり。政治法律の如きも、其制裁團結は元は宗教の信念、祖先崇拜等と混同せしも、後に分離して各其本職に依りて人心を教導するに至れり。此等は文化に依りて宗教の精神的統一を豊富にしたる所以なりとす。

上來説明し來りしが如く、宗教の發達とは、其意識の内容并に社會的勢力が分化と統一とを併進するの義に外ならず。人心の理想希求は其内容を擴大し、豊富にすると共に、永遠の中心を發見する者なれば、宗教的理想の發達亦全躰として此方向を取るを見る。而も一民族の宗教をして此の如き歴史的發展をなさしめ、其勢力の下に立つ各個人の宗教的意識を影響する、其社會的并に個人的事情及其結果に至りては、決して一律齊一ならず、複雑にして又異様なる内外事情の活動せるを見る。今發達の方向内容を左右する勢力事情を概括すれば、其中心となるは民族の心理的性格と其性格開發の反應成り行きにして、之を周る天然の境遇、及其の交通

接觸する外民族の感化あり、此等は相助けて歴史の内容をなす。而して此の如き歴史的進行の一般社會的事情の中にも、時々偉人の出づるあり、其個人的勢力を以て宗教の發達に影響す、即宗祖改革者と稱する者にして、宗教の中には殆ど一個の宗祖に作られし觀あるもあり、其勢力決して小にあらず。以下、此等の勢力につきて逐次觀察を下さん。

### 第三節 自然的境遇事情及外民族の勢力

人の精神は其住居外國の境遇及其より來る生活職業に影響せらるるは明白にして、宗教發達の天然的事情中最も根本的なるは居住地の氣候風土にして、宗教の發達内容は何れにしても多少此影響を受けざる者なし。特に人心幼稚にして其自覺十分に發達せざるに當ては單に天然に受動するの狀態にあり、其宗教には天然崇拜の勢力多きを以て、其影響特に大なり。氣候風土は直接には身体に影響し、從て精神状態に變化を來たし、特に其一般感情氣分に影響して、冥々の間に根本の勢力を逞うす。氣候風土は又其周圍の事物即山河土地の形勢より氣象天候、動植物

界に其影響を現はして、人の感覺界を支配するを以て、其寫象界に及ぼす昭々の勢力も亦決して少しとせず。氣候を成す要素は空氣の温度と濕氣にして、此等空中現象の異同が宗教に及ぼすの勢力は甚大なる者あり。空氣互寒且濕潤にして冬期は永く氷雪の間に影薄き日光を拜せしゲルマン民族の宗教にては、其最大の神は怒りなる爾(Wuth)とSふ今の獨逸語と源を同うする、オーディン又ウダン(Odin, Wodan)にして、其は吹き暴るゝ風の威力に神靈の飄搖を觀て之を勇氣武力ある神としたるものなり。而して其の神話は寒暑が争闘交替するに出でたる歲時神話(Jahres-myths)にして、光明と暗黒と闘ひ寒と温との争に基きたる健闘より成り空氣の神なるロキ(Loki)が冬の神と共謀して、其暴威を振ふや、最良の神なる白晝バルド(Bald)は此健闘に倒れ、此に宇宙の大悲惨を呈し、所謂神の微光(Ragnarok)即諸善神の戦死最後は始まるなり。此の如く善神が一時折伏せらるゝといふが如き悲壯なる神話は、寒國に始めて見るべき者なり。

氣候が宗教に及ぼせし差異の最好適例は印度と波斯とにあり。此二國の人民は元共に中央亞細亞より東南に移り來り、印度の北境に來りて印度と波斯とに分離せ

し者なるに、二國氣候の差異は著しく二者の宗教に異色を與へたり。即波斯の高  
 地は荒地多く氣候亦嚴烈なりしより、其宗教はグルマンと同むく悲壯の特色を帶  
 び來り惡神なるアーハルマン(Ahriman)と善神アフラマゾダオ(Ahura mazdao)と激  
 戦して一時は惡神の勢力を占むるも、後には善神の世來るべきを確信せり。而し  
 て其惡神とは光明、眞理、清淨の謂にして、惡神とは暗黒、詐僞、不淨の謂なり。即波斯  
 人が如何に嚴厲の氣候に處して、光明を希求し暗黒を嫉惡して、此と共に道德的意  
 識を發揮し來りしかを見るべきなり(印度宗教史一節參照)。然るに其同胞の印度に來  
 りし者は、氣候の溫和清明なる信度河の平野に牧畜して平和快潤の牧畜生活を送  
 りしより、其宗教は極めて稚氣を帯びて嬉樂の風あり。朝に曙光の暗黒を破るを  
 見ては美少婦烏舍師(Ushas)車を馳せて出で來り、太陽此美少女を追跡して現はれ  
 來ると觀じ、或は天眸の運行を見ては其の喜ばしげなる行列は信者が供物を捧ぐ  
 るを喜びて諸神が進み行くと觀せしなり(三世印度宗教史一節參照)。  
 氣候は根本的に人心に影響すと雖も、其土地の形勢瘦肥亦大に宗教的意識に關係  
 あり。セム民族が天地に亘れる大勢力あるを感じ、單一なる神力の遍滿を信せし

が如きは沙原渺漠遙に天に接する間天地の宏偉に動かされし者にして、主として  
 其地形の影響に出でたる者なり。山地森地には幽玄崇高森嚴の趣多きが故に其  
 思想は又沈痛幽邃なり。印度の優波尼沙土哲學の如きは此種の産物にして、其の  
 阿蘭若迦(Aranjaka)と稱する文書の如きは森嚴の思想に成りしより、之を誦するに  
 は必づ森中に入りしといへり。此の如き地方には又森中に靈魂の彷徨せる等の  
 信仰多く、其宗教は凄涼幽邃なる幽鬼の崇拜ある事、今の印度の南方森林地方に於  
 ける土人の幽鬼崇拜が非常に畏怖恐懼の風あるにても明なり。或は廣漠なる土  
 地にてはセム民族に於けるが如く偉大の勢力を感知して、個々の幽鬼を崇拜する  
 の餘地なきあり。ウラルアルタイ民族の如きは北部亞細亞の廣原に生活せしよ  
 り、其最も崇拜する所は無限の天なりき。或は海國にして陸と海と錯雜して山水  
 の美を呈する處にては、快潤なる宗教あり。日本の宗教、希臘及ポリネシアの宗教  
 の如く、其神話には海に關する者多く、海より現はるゝ神あり、龍宮に似たる信仰多  
 し、希臘の神話にては、海中の都城エゲエ(Aegae)には海王ポサイドン(Poseidon)あり、  
 時々波濤なる白馬を驅りて海面を馳驅すといひ、日本の世界創造は諸冊二神が蒼

漠を探りて入洲を生成せしなりといふ。此の如き神話は大陸の所産にはあらずるを知るべし。

此の如く氣候と風土は直接に人心に影響するのみならず、其異同は延いて人民生活上の産業に異同を生じ、此に依りて其人民の信仰を左右する事甚大なり。土地荒蕪にして産業の營むべきなければ、自ら他民族と闘て之を犯さざるべからず。争闘に長したる亞弗利加黑人の間には其宗教も亦殘忍にして、人を神の犠牲に供するを常とす。ゲルマン民族特にスカンデナヴィアの古代人民は戦闘の人民なりしを以て、其神なるオーディンは戦の神となり、戦争は此神を奉じての一種宗教的動作となれり。之に反して土地豊沃にして牧畜或は耕作の農業を營む者にては、人情自ら温和質朴にして、南亞弗利加の農業を營めるゾル人の如きは、日毎に出現して人民を慈む太陽を大祖父即ウンクランク(Dahliak)として拜せり。太古の支那人は天の崇拜者なりしも、牧畜農業の民なりしかば、農業を人格化したる神農及耕作地を人格化したる黃帝を人間の祖先にして、恩人なるが如く思惟せり。之に反して狩獵の人民にては自ら狩獵の風あり、又其中に又沈着と伶俐の風あるを

常とす。此を以てアイヌは熊を神靈即カムイとし、亞米利加印度は同じく狩獵の人民なるが故に、苦行を行ひて之に耐え、其崇拜する所は太陽を英雄としたる勇者崇拜なり。又太古にありては既に商業的交通を發達したる國民には、其宗教に商業商略に似たる觀念あるを免れず。フェニケア、ペロップ等北方セム民族の商業をなせし人民には皆魔術の信仰あり。此等は純粹に此等人民の特産にはあらずれども、又其産業の影響の一端を表せりといふべし。

土地氣候の物質的事情の影響此の如く大なりども、外面より民族の性格歴史を動かして宗教の發達に影響する者は此のみにあらず、他の民族國民との交通接觸より其宗教信仰に感化せられ、或は之を自己に包容する事も亦極めて重大の勢力なり。而して外面の接觸が文明を進歩するは、一に其人民内部の進歩状態并に人民の素質と、及び之に對する外民族文明の程度との關係に出づる者にして、程度の差別懸隔甚しからざる者の接觸は多く進歩を助け、其懸隔甚しき者にては利益なきか、若くは却て有害なる者多し、何れにしても交通接觸が宗教觀念及習慣に變化を與ふるは拒むべからざる事實なり。

接觸に依りて大なる進歩をなせし最好例は基督の福音と希臘思想との融和に若くはなし。基督の福音は神を父とし人類同胞の博愛に則り、人間が神の子たる大義に依りて神の教を求むるにあり、其宗教的意識に於て既に猶太の法律宗教より遙に進歩したり。然れども其が希臘思想に接觸するや、救済の福音に鞏固たる根柢を與へ、人間は神の精靈を合著する人間として救はるべしとの自律道徳を生み、而して基督は即神の子にして神と同質なる神人なりとの宗教的意識は益す發揮せられ、此に於て神と子と精靈との三位一體説は全く希臘思想に依りて成立しぬ。其他接觸交通が宗教の發達を促したるの實例は一々之を擧げず。其反面より説明せんに、古今に亘りて最も自主の精神に富み、外來の勢力に反抗せしはイスラエルの民族の唯一神教を最とするも、而も其宗教は信仰に於ても、神話に於ても、多く他國民の宗教に接觸し、埃及、フェニケア、カルデア、波斯等の影響を受けたり。蓋し外部の勢力を輸入して能く之を同化するは、其短所を矯むるの効あるのみならず、又自家の意識を刺激して發達の勢力を活潑ならしむべければなり。接觸輸入は決して自家の特徵活氣を消磨する者にあらざして、孤立は却て進歩の活氣を銷沈する者なり。

然れども同等位の宗教が接觸して進歩をなさず、却て其欠點を増長したる者なきにあらず。佛教と道教と混淆して一の魔術的仙術の宗教を造り出だせしが如き是れなり。高度に發達したる宗教が低度の咒物崇拜、幽鬼崇拜の類に接して腐敗したる者も亦少なからず。今日諸方の野蠻人の間に基督教を宣布するも、其の靈魂崇拜或は英雄崇拜と化せざる者稀なるも此なり。又印度の佛教以後の婆羅門教はドラヅガ民族の幽鬼崇拜に接して、其爲に靈魂、幽鬼、咒物、表象等の崇拜より魔術等の慣行に染まり、下劣なる私利的道徳の宗教と化し、此接觸より婆羅門教を腐敗したる者は又佛教にも入り、西藏、日本の佛教に此種の下劣なる崇拜の多きは人の熟知する所なり。セム民族の宗教は一般に空想的分子少く、其の神界廣濶にして神の數多からず、其慣行も單純なりしに、其北部の人民がメソポタミアにて、アカデア(Akkadia)種族の宗教に接して、其の極めて多數の鬼神を崇拜し、魔法に似たる行多かりしに感染し、其影響は弘く北方のセム民族に及びぬ。其感化の最も著しく顯はれしはベビロニア及アッリアの宗教にして、アカデアの神名は殆ど盡く此人民



の間に入りて崇拜せられ、古セムの神は多く之と混和し去り、又古セムには盛ならざりし星辰崇拜は盛にバビロニアに起りたり。バビロニアに流寓したるイスラエルの豫言者が、其のモロホに犠牲を供するを非難し(エゼキエル十六、二十、二十三章)或は此國を稱して、偶像の國と稱せし(エゼキエル十六)も皆此が爲なり。

其他外部との接觸に依りて根本より宗教的意識に變化を生ずるにあらざして、唯其神を移植或は交換する事太古の社會に甚多し。蓋し幼稚の人心は、特に神の實在につきて思考せず、他の民族が尊崇せる神を見れば、己も亦同じく之を尊崇するを好む風あり、内心信仰の事が宗教の重要事なるを知らず、某の神を容れ某の方法にて之を崇拜すれば、其の神の恵を得るに十分なりと信するが故に、神の移植、交換は極めて容易なり。亞弗利加の黄金海岸なるファンチス(Fantis)人の如きは、他民族と神の交換をなす事多く、又歐洲にてもガウル、ケルト民族の神々は、後に希臘羅馬の神と合夥せられたり。佛教が支那及日本に入りし時も、宗教の輸入としてよりは、寧ろ異邦の優勝なる神の歡迎なりき。此を以て蘇我、物部二氏が佛教を入るゝや否やに就きて争ひしも、一は異邦の神と國神とは相容れずとて之を拒み、一は佛

は國神よりも優れりとして之を入れしなり。神の移植は又戦争の結果として行はるゝ事あり。或場合には、戰敗國の神が戰勝國に入るあり、百濟の佛教の日本に於ける、若くは猶太の基督教の羅馬に於けるが如き是れなり。然れども多くの場合に、神は國民の守護神たるが故に、國民と運命を共にし、戰敗國の神は勝者の神に服従す。メキシコ人は大殿堂を作り、其の征服したる國の神々を其中に閉鎖して出でざらしめ、ペリユ人は之をインカの堂に集めて自國の神に従屬せしめたり。羅馬人も亦征服國の神々特に神像を首府に集め、其神の功力に應じて隨時之を崇拜したり、即神の呼び出し(evocatio dei)と稱する者にして、既に征伏せられたる神々なれば、彼等は勝者の依頼に應じて各其神力を振ふべしと信ぜしなり。宗教の接觸は、此の如く單に思想信仰の交通なると、國民的關係に出づる神の交換移植なるとあり、其實例の如きは世界の宗教史上に甚多く、宗教の發達の此が爲に影響せらるゝ事甚大なる者あり。然れども一派の學者のなすが如く、太古の宗教は總て此の如き接觸關係ありしとなすは、一片の空想にして、要は歷史上此種の交通が宗教の發達に勢力ありしを認むれば足れり。

以上宗教發達の外面的事情を總括すれば、宗教の發達は氣候、地勢、産業、及外民族との接觸に支配せらるるといふに歸す。然れども外面的事情は人心の外部よりの刺激にして、内面の作用發達之に反應して始めて結果を呈する者なれば、吾人は此より一層所要なる内面的事情を研究するの要を見るなり。

### 第三節 民族の性格及社會内部の事情

國土氣風等外部の勢力は、固より宗教發達の一要素なるも、而も此等の中心に立ちて其効果を人文の上に現すは、即人の精神にあり。人心が宗教的生活の中心原動力として其精神的潮流を左右し、其人文發達に一定の方向風趣を與ふるは、其根本意志の動機力に存し、此動機力は能く外部の境遇のみならず、寫象感情の心生活を支配して人文潮流の根底をなす。而して意志の根本動機力は、大抵一民族を一貫統轄する勢力として、割合に變化少く、常に其人文發達を一定の方向に導く勢力にして、此根本統覺なる民族の性格が人文發達の源泉たるは、別に證明を要するまでもなし。異方の宗教が殆ど同一の教義或は儀禮を發表しながら、而も奪ふべから

ざる特色を有し、其發達の方向を異にするは、此根本性格の勢力なり。

或學者がセム民族を稱して、本能的に宗教的性格を有し、又唯一神教的なりといひしは、固より極端の言ひ方なれども、民族の性格は全體としては換ゆべからざる原動力たるを見たる言といふべし。今セム民族と印度ゲルマン民族との宗教とを比較するに、其中には宗祖改革者が出でて其發達に個人的感化を及ぼせし事も多く、二民族の宗教が希臘波斯等にて相接觸したる事も少なからざるも、其全體を達観すれば、二民族の特質奪ふべからざる者あり。即セム民族の宗教は、神の偉大なるに潛伏する傾向多く、印度ゲルマンのは之に反して、人間に神性あるを信じて自ら神に合一せんとする性格能く表るるを見る。固より何れの宗教にても、神力を畏敬する神力的(Theocratic)方面と、神人合一を庶幾する神人的(Anthropieic)方面と、二者其一を欠けば宗教の本務に違ふと雖も、セム民族の宗教が神力的にして、印度ゲルマンのが神人的なるは、其全體の特性として種々の現象に現れたり。

先づ之を神の觀念に觀察するに、セム民族にては神を畏敬すること其神名にも著しく、一般に神名となりしエール(El)は偉大の義、最上の神として後には惡魔の義に

も用ひられシシャダイ(Shaddai)は、有力又は畏るべきの義なり、又セム一般に存して多くの國民の最上守護神たりシパール(Paol)及ペヒロン等にも最も尊崇せられシモロホ(Moloch)は、共に君主又は王者の義なりき。されば此等國民の間にては人名も、又此の如き神の奴隸なりといふ意を表する者多く、世界萬物は偉大有力の神に作られたる機械土偶に異ならず。之に反して印度ゲルマンの神は變化多く、屬性も雜多にして人間に近く、世界は神力に作られしにみならずして、神の活動の舞臺たる事、人間が世界の中に活動せると大差なし。此を以て人名にも神の兄弟、神の朋友等の義多く、ラーマの兄弟(Ramānija)インドラ王の友(Rajendramitra)等の名稱多し。セムの神力的宗教にては、神も悪魔も共に強き意志を有して、直に世事人事に干渉し、好悪喜怒に依りて直接に人を賞罰する事、専制君主の如し。然るに神人的宗教にては、神々も天然の規律に支配せられ、其神力に制限ある事、人間に近き者あり、印度のヴィシュヌ(Vishnu)は最も人間に恵み多き神にして、惡を平げ善を助くるも、其神力は多く神自らが人間の形に現れてなす所にして、希臘の勇者神ヘラクレスは其勇行の間に人間の如くに負傷せし事あり。印度の梵天は万物を發現し又之を滅絶

する最高の神なるも、世界出入は其の任意専制にあらずして、一定の時期に來る必至の運行なり。希臘の神々も亦此に同じく、總て盲目の女神なる必至アナンケー(Ananke)即運命に支配肘制せらるると信じたり。

此を以て印度ゲルマンの宗教にては、神が人と化生する化現(Incarnation)の信仰も、多く、又人間にして俊傑なる者、勇者或は聖人は神位に列せらるる神化(Apotheosis)の語説も多かりき。オシヌの化現なるキシナ、ラーマ等勇者の崇拜、佛陀が兜率天上より此世に降生せしどの信仰、ヘラクレスが英雄より神となりし等、神と人間とは其間融通自由なりき。之に反してセム民族の宗教にては、神と人とは全く反對の兩極端なりしを以て、人にして神とならんといふが如きは、非理且瀆聖の事と認められき。基督が神の子にして人の肉を得て生れし救主なりとは、元セムなる猶太人の中に發生せし宗教なりと雖も、其信仰は希臘思想の影響に出でし者にして、此信仰は終に猶太人の宗教たる能はず、其源より排出せられて、全く印度ゲルマン民族の中に入りて發達したり。其外希臘にては、貴族民族にして某の神を祖先とする者多く、印度にては婆羅門の諸家系は皆神に出でし者なりしに、此の如き信仰は

セム民族の中にて、アヌリアにて僅に一二最高の貴族が神出なりとの信仰ありしのみなりき。猶太の豫言者は多く神を見たりといふも、其は僅に其外套の端を瞥見し、或は雲霧の中に其形影を見得しに過ぎず。然るに印度の聖人は皆親しく神に接したりといひ、其形骸音聲すら明に現るる者と信ぜられ、又瑜伽の觀行を修しては神を己心の中に現すべしと信じたり。

勢此の如くなるを以て、神に對する儀禮も、二者甚異に、神人的宗教にては固より神を敬するも、神力的宗教の畏敬に異にして、敬愛親密の態度あり、神に讃詞を捧げ、供物を供して之を招致し、或は神の助力を得べしと信ぜり。神力的宗教にては神は主權絶對神聖なるを以て、服従畏敬の儀禮多く、人命を捧げて之を祭る事多く、其道德は又他律的なりき、是れ先に他律的道德の條下に説明せし所なり。

神人的特性と神力的特質とは、印度ケルマンとセムとに現れて、此の如き差異を現し、民族分裂の後までも其特性を一貫して今日に至れり。此差別特色は皆多神教と一神教との別と見るべく、宗教的渴仰が唯一神に集中して總て生命道德を此に委托するに至りしと、其信仰が多神に散漫にして融通交感多きに至りしとは、實に

其性格の根本動機に出でし差異に外ならず、此差異は常に一切の變化發達の潜勢的動源中心源動力なりとす。

民族の性格は宗教的意識の中心動機にして、其發達を一貫する勢力にして、宗教の不動なる特徴秘奥は此に潜むも、而も其發達の境遇事情が其發達の歴史的成り行きを左右すること頗る大なる者あり、從來發達の方向事情の情力影響と相合して、同民族中にも異種の宗教を生じ、同一系の宗教にても其時代に從て異なる特色を發表せり。同じくセム民族の中にて、北部のアヌリア、カルデア等と南部のアラビア猶太等と相異なるが如き、同じ基督教といふも、羅馬教會の莊嚴と新教の清楚と相異なる、同じく新教の中にも組合教會が常識に富むに反して、メソヂスムが特別に宗教的熱情を獎勵するが如きは、皆同一性格同一系統の中にも事情境遇の差異に從て異なる方向の發達ありしが爲めなり。日本の宗教は全軀に祖先及英雄の人間崇拜に發表したるも、鎌倉佛教の如く、禪味眞悟に入りし時代もあり、武家の祖先崇拜が武勇の祖神を拜し、公家の祖神は人物としての理想たるよりは、寧ろ天上の雷神なりしが如き差異なり。

此の如き成り行の差異は、印度人と波斯即イラン人との實例に著し。二者は元同  
 一種族にして其宗教を共にせしも、印度の沃野と波斯の高原とに分住して其發達  
 を異にしてより、其差異は頗る顯著となりぬ。即イラン民族の宗教は光明清淨  
 の崇拜にして、其宗教的道德は農業商業及日常の生活にも及び、總て世間的勤勞を  
 重んじたり。今日の波斯教徒は尙此風を守りて、商業上の信實を以て名あり。然  
 るに印度の宗教は出世間の理想を追求し、遁世沈思に耽り意を彼岸超世の一方に  
 注ぎ、瑜祇佛教の如く最上涅槃を求むるのみとなりぬ。イランの宗教にては善神  
 と惡神と相對時争闘するも、終には惡毒が全滅して眞善の世界を現すべしとて、善  
 神に協力するを道德となせるに、印度人は此世は一切惡毒の因にして、之を脱して  
 彼岸の涅槃寂滅に入るを理想とするに至れり。此の如き者即同一源に出でし宗  
 教が、平行して發達せし結果にして、一は世界及精神の究竟淨化を目的として、光明  
 生命眞理に努力し、他は總て世間的纏綿を脱して無限の寂靜に入らんとして、爲に  
 激烈に世間及肉躰と闘ひぬ。

此例に同じく、希臘人と羅馬人とは種族宗教共に近親の關係を有し、且希臘の宗教

は間接にはエトラスカン民族を感化してと、直接の交通とに依りて、大に羅馬の宗  
 教を教育し、其神々の性質も會通したりき。然るに二者の文明及政治的生活は宗  
 教と共に異方面に發達したり。希臘人の宗教は、主として美的調和の宗教にして、  
 其人民は又技藝家思想家詩人として長處を有し、個人的特長、人格的、技能を發達し  
 たり、されば僧侶が特別の階級として勢力を擅にする等の事曾てあらざりき。然  
 るに羅馬は共同團結の觀念大に隆にして、實利、權利、義務の觀念は總ての事物に及  
 びしかば、其神々は皆此等の觀念を抽象して、正義、勇氣、信實等世間の政治道德に關  
 する事物の神たりき。即其神話は個人的特色に乏しく、人民も亦政治的團結の外  
 個人的天才に乏しく、詩的構想や哲學的思想は終に大に發揚せざりき。其長處は  
 實行道德にあり、趣味は直接簡明にして組織の才に長じたり。同一姉妹の宗教に  
 ても、其社會人文の差異に従て、此の如き徑庭を生じたり。

#### 第四節 宗教の發達に於ける個人的 勢力、宗祖改革者

宗教の發達は、一般人文的勢力の常して團體的非人格的なるも、而も其中には特別の個人が其宗教的天才に依りて其發達歴史を左右するの勢力は、決して看過すべからず。宗教の人文發表を以て言語風慣と同一種類となして、其團體的發達に重きを置く學者は、多く其間に於ける個人的勢力を蔑視し、其發達を不識的自發的となすも、此の如きは宗教的意識の反省的自覺的性質を無視したるの見解にして、如何に幼稚の宗教にても、其勢力は意識に訴へ個人の反省を惹起する事なき者なく、所謂不識的自發的といふ觀念は、嚴密に云へば宗教に適用すべからず。何れの宗教にても、其一般人民は宗教に關して平常特に反省考察する事なきも、其間には未開社會にても特別に宗教的なる個人なきはなく、或は讚歌祈禱の鍛鍊に其信仰を啓發し、若くは咒師卜者として特に神力の効果を考察し、呪法供儀の祭儀を熟慮し、其個人的事業を宗教に貢獻する者決して少なからず。且又一般人民と雖も、何か危機に際し、希求する所あるに際しては、別に省慮し沈思して、或は神の威力を歎じ、或は祈禱の方法につきて企圖する所あるは自然の勢にして、其限に於ては一切人民は、多少僧侶的に個人の勢力を宗教に及びせる者といふべし。されば宗教の發

達が團體的なるの故を以て、其の非人格的不識的なるを過重するは、宗教的意識の人格的性質を看過し、其の主觀的根柢より發表するを忘れて、團體に發表する結果の方面のみに着目したるの失なり。一旦意識の事實として主觀的躬親的經驗とならざりし者は、到底社會的人文としての宗教に發表せず。此故に其社會的發達の重要と共に、其人格的勢力は其材料源泉なれば個人的勢力は宗教の何れの時期にも通用にして、所謂創唱宗教に對して天然宗教と稱せらるゝ者も此數に漏れず。此の如き宗教的人格の個人的勢力は、社會の民衆の數と共に併存せるも、其中の某の個人が特別に其人格的勢力を及ぼすは一面にては其人の宗教的意識の發表なる教訓祈禱或は道德儀禮が、一般民衆の意識に投合するが故に、宗教的個人の勢力の生存競争に勝ち、一民族時代の信仰を支配するに因る。此點より云へば、個人的勢力の自然淘汰は社會的大勢力なりと雖も、他面より見れば又一個人の感化が社會を嚮導する事決して少からず。何れにしても人格的主觀的原動力は宗教の根柢にして、從て其個人的勢力は到底宗教の發達に否定すべからざる事實なりとす。

且や今日に存せる多くの宗教は此の如き個人即宗祖に依りて創設せられたりと  
自信して自ら他の自然發達の宗教に別たんとせり。一宗祖に創唱せられし宗教  
といふは即其個人的事業と其人格的感化とに基きて起りし者なり。其外宗教の  
發達に個人的勢力を及ぼす者は佛、施、基督の如く所謂創唱者と稱せらるゝ者のみ  
にあらず、所謂改革者なる者、又は時々世に出で、一代を感化する高僧、聖人の如き  
者皆其數に漏れず。

世人が多く宗祖等を以て、全く新なる宗教を創めし者となすも、其根本を探れば、所  
謂宗祖なる者も改革者或は高僧と類を異にする者にあらず。非常に偉大なる天  
才も、其民族的性格と其歴史因縁とを離れて、全く別の物を作り出だす者にあらず  
して、一宗一時代及國民の歴史的に蓄積し來りし進歩の程度を一身にて代表し其  
勢力を一身に集め、其宗其時代國民當時の當に取るべき進路を先覺して、之が先導  
啓發者となるなり、此を以て其人の祖宗としての性格并に事業は全く歴史的發達  
以外の特別の者にはあらず。然れども當時生存せる他の民衆は在來の進歩を一  
身に集め、又之が先導をなす事を得ざるに當りて、此人の偉大なる性格は能く之を

一身に負ひて發達の契機をなすは恰も河水を引て之を飲用に供する水道に轉  
ずる濾過池の如き者あり。濾過池は特立に又新に水を造る者にあらざれども通  
常の河水を轉じて飲料となすの偉大なる天職は此人に懸かり、又從て此濾過池た  
る宗祖の人物性格が水道中に飲水に其特性を與ふるや、極めて重大の關係あるな  
り。宗祖の性格は全く國民の性格を逸脱せず。其宗教的意識も全く國民の宗教  
以外に出でざれども、然も既に此が提擧者先覺として其個人的才能に依りて、宗教  
の發達に大なる貢獻をなせし人なれば、其人の個人的性格が其が提擧啓發したる  
宗教の新意識新歩趨に影響するや、又少小ならず。而して其個人的性格は一般國  
民の性情境遇に養成せらるゝも、亦其人の個人的遺傳、教育、境遇に左右せらるゝ者  
なれば、極めて偶事的なるが如き個人的事情が其宗教に現はれ來る事少きにあ  
らず。

宗祖の人格が宗教發達に及ぼす勢力を研究するには之を二種に分ちて理想化せ  
られたる宗祖の人格と事實的宗祖の人格とに分つを便とす。理想化せられし宗  
祖とは、其人物の歴史的に實たると否とを問はず、事實以上に更に其教徒の構想に

依りて其宗教の理想的人格となり、其の人格事業として傳へらるゝ者は事實なるよりは寧ろ理想として其宗教中に感化力を有する者なり。事實的宗祖とは其人の功業は事實として宗教の開達を左右したる者にして、教徒も必しも之を其宗教の理想とは見ざる者なり。

理想化せられし宗祖にても、其が人物事業として傳へらるゝ所の者は多くは歴史的事業に基かざるなく、其宗教も元は事實上其人の人格と事業とが主動原因となりしなり。然れども其宗教は獨り其人の宗教にあらで、其人が擔て一轉進をなしたる其宗教が、以前より發達し來りたる宗教的意識の特色を有し、從て其宗教的意識が理想とする所を有し、而して今偉人は之に新空氣を與へたる事なれば、其新宗教は、其從來の理想と此新步趨が吹き込みし理想とを有するを常とす。此に於て教徒は其の振起し來りし理想に依りて此偉人を理想化するに至る。此く理想化するに至るの事情は一轍ならず又簡單ならず、或は太古の世、人心質朴なるが故に一偉人の出づる事あれば此人を人間と見做さず、自己の理想とする所の屬性性能は盡く此人に附着するに至るあり、又は某の偉才が出で、其天才卓見に依りて、其

宗祖の事蹟を理想化し、其教訓事業の觀念意義を發揮して、衆民をして宗祖の信奉すべきを悟らしめ、以て感化の大本を立つるあり。此の如き鼓吹者は、餘り其人に接近したる人々の間に出でず、古語にも云へる如く、豫言者は其郷里にては榮譽を有せずして、近親の人は甚しく宗祖を尊崇する事なきを常とす。即宗祖を理想化して其觀念を發揮するは、宗祖と相離れたる時代方處に出づるを常とし、此人は又特別の天才を以て宗祖の感化を發揮するなり、故に又之を第二の宗祖とも稱すべし。兎に角歴史的人物なる宗祖も既に理想化せらるれば、其人物事業の感化は其人物の能く其宗教の理想の標識となり、其信仰を鼓吹するにありて存するが故に、殆ど地上の人たらずして、神的人たる事多し。佛隨が釋迦牟尼の個人的一生に基きて、佛教理想の歸着する所、其信仰道德の標本となり、終に宇宙實在の根底たる不生不滅の佛性、眞如の觀念と佛隨の人格とを合一し、耶蘇の一生事蹟が其弟子信者の渴仰を惹きて、救濟の源泉慈愛の化現となり、終に神子世を救ふ爲に降世せし救の實力と仰がるるに至りしが如きは是れなり。即此等の感化は歴史的人物を理想化せし結果なりとす。



佛隨基督の如き宗祖の人格と事蹟とは、其れ自らにして宗教上の大勢力なるも、其感化は又之を理想化する人物の性格境遇に依りて影響せられ、其人格的勢力の下に立つを免れず。後節に説明せん如く、佛隨の理想化は佛敎々團自然の發達に依りて、佛身の常住を信じ真理其物を法身佛とするに至りしも、之を組織せし馬鳴の人格的勢力は、佛三身の信仰を組織し、基督の死後弟子の渴仰は之を教主とせしも、其の福音の精神を明確にせしは保羅の勢力大なる者あり。されば佛陀、基督の如く、其人格が一宗教の源泉として大なる勢力感化を敎徒に及ぼせし者を源泉的本質的宗祖といふべくんば、馬鳴、保羅の如く、其偉大の思想を以て此宗祖の感化を大成して其宗教を完成組織したる者は、之を闡明の職をなす宗祖と稱すべし。此外宗教發達の上に人格的影響を及ぼすは、時々一宗系統の中に出現する高僧及改革者なりとす。高僧とは一宗教の系統に屬して、固より其敎祖の感化其宗教の本性に依りて薰陶養成せられたるも、尙其學識卓見德行に依りて其敎徒の間に自己の人格的感化を及ぼし、一代後昆の嚮導たる人なり。此等の人々の感化は其大本は固より組織的宗教以外に出でざるも、其人の顯著にして又多少獨得の特色あり

る才徳は人格的勢力を及ぼし、其人格學徳は一新宗教を開くにもあらず、撥亂反正の改革をなさず、其感化は成立宗教の範圍にて平和圓滑に行はるゝも、尙其勢力は成立宗教の發達變遷に影響するなり。此故に此種類の宗祖にして、偉大なる人は自ら一宗教中にて多くの信者を得、此人の感化に依りて多少他の宗徒と異彩ある一派宗徒の開基となり、其の此の如く大ならざる者にては或は敎義の修補に或は敎徒の感化に人格的影響を與ふ。即道宣律師が佛敎大乘律の組織に依りて律宗の祖となり、傳敎大師が天台眞言を合一して日本天台の基を開きしが如き、其外アウグスティンが其甚深の感動に動きて人類の罪深きを説きて基督教の信仰を高めたる、禪宗諸祖の悟道が常に其敎徒の求法習禪を勵策するが如き、又はシライエルマツヘルが新敎神學を大成して其宗義を確立したる、又はパンヤンが其著天路歷程に依りて弘く基督教の中に感化を及ぼしたるが如き、皆此類に屬し、而して其人々の感化事業を仔細に研究すれば、其人々の性格境遇が少なからず其感化に關係あるを見るに足るべし。

終に宗教改革者に至りては、多くは是れ撥亂反正の豪傑にして、一宗の腐敗若くは

萎靡を刷振せし人なり。宗教改革とは新しき者を始むる謂にあらざ、一系統宗教の範圍内にありて其腐敗沈滞を排除して原初活潑の始に復するなり此を以て宗教改革者の動機及目的は自己宗教の眞粹を發揮し回復せんとするにあり。然れども歴史的發展は繰り返しつゝも必ず進む者なれば、其復古回復の精神事業の中にも亦自ら新精神の存するあり、此新精神を現實にして其復古の目的を成す間には、到底改革者其人の人格的感化を含有せざる能はず、其限に於て改革者は又新しき者の創唱者宗祖と稱すべきなり。ルーテルの如きは羅馬教會の教權を否定して只管聖書と理性の基督教を主張したるものなるが故に、其改革は純粹基督教の復興なるが如き觀あり、彼自らも亦しか信ぜしなり。然れども其改革の眞相を尋ねれば、南歐の虚飾莊嚴を好む聖教主義に對して、北歐の嚴肅にして自由を喜ぶ思想の勃興したる者にして、ルーテルの人格は實に此が代表者として、獨逸公侯の獨立希望と相結びて教會に對する國家的反抗をなせしなり。此を以て獨逸的氣風の勃興としての宗教改革の中に、ルーテルの性格は特に彼が神祕的精靈論者なりし特色に現はれて、其感化を神祕的合一を説く一箇の教派に残しぬ。又日蓮の改

革の如きも、天台淨土等の非佛教的分子に對して釋迦の眞意を發揮するを目的とし、四十餘年未顯眞實の法華經佛教を興すにありき。日蓮自身の動機も此に存し、現今其教徒の觀念を支配する根本主義も、彌陀本尊の淨土佛教に對して釋迦本尊の眞佛教を唱ふるにあり。然れども此宗教運動は殆ど關東の平民主義が京都の貴族主義と鎌倉の武士道に對する反抗にして、日蓮が漁夫の子として生れ、當時の貴族的佛教に平ならざりしと、彼の峻嶒剛邁の氣象とに依りて其宗派を形成せしなり。されば日蓮宗は日蓮の人格と境遇とを主因とせし改革にして、其人格的感化は今尙其教徒の間に留存せるを見るべし。

此の如く述べ來れば、宗教發達の某時期にありては、開祖、大成者、高僧、改革者の人格境遇が重大なる勢力を有せし時代ありしを見るべく、從て此等宗祖の一生は宗教の發達に少なからざる影響を興へしなり。宗教史の研究に宗祖人物の研究が必要なるは此が爲なり。之を要するに、宗教的意識其れ自ら人格的主觀的方面を有する事多きが故に、其歴史的發展は個人的勢力躬親的感化に左右せらるゝ事頗る大にして、其進化は個人的活動を集めて華實を結び、其中にても宗祖改革者の精

神は永く其中に存して信者の精神を照らせり。宗教的生命は彼等の精神に集中煥發して一世を光被せしなり。

### 第五節 佛陀及基督の理想化

前節は個人の人格的勢力が如何に宗教の發達に影響するかを明にしぬ。其人格の偉大にして感化の深遠なりし者は一系宗教の源泉となり、其創唱者祖師と仰がれるのみならず、又神的人或は神に直接なる聖人として崇拜を受くるに至る。即此の如き一定の中心人格祖師を有する宗教は、他の之れなき者に列ちて特に創設宗教(Gesittete Religion)と稱せらるるなり。波斯のザラトストラ教がザラトストラなる一聖人の教に基くと信じ、印度の耆那教が耆那ブダーマナを祖とし、儒教が孔子を聖とし、猶太教がモセの法律宣布を以て其教系の源頭となすが如きは、皆此種類にして、或は其宗祖開祖なる者が實在の人にあらずりしあり、或は其創唱とは眞に新なる者を創設したるにあらず、一の組織或は改革なる者ありと雖も、其宗徒は其開祖を以て眞理眞宗教の開示者として崇拜し、其言を以て犯すべからざる教權

となすが故に、皆創設宗教の名を有せり。即創設宗教といふは、一定の開祖を教權とする一系の宗教に外ならず。

此の如き創設宗教の中最も多く、世界に勢力を占むるは佛教、基督教及モハンメド教即回教にして、各其宗祖なる人の名或は尊稱を以て其教系の名となせり。然れども、此中モハンメドは只神の豫言者(Prophet)使者と稱せしのみにして、自ら神力ありとせず、後世の信徒も亦教祖に對して此以上の信仰を注がざれど、佛陀と基督に至りては、其人自らの自信は如何なりしにせよ、其遺弟及後世の信徒は其教祖を以て、只人間の聖者とするのみにあらず、之が人格を理想化し、之が一生の事蹟は永遠の眞理に出でし者となしぬ。即先にも述べし如く、佛陀は眞理の本體が現れし人格となり、基督は神が特に人の罪を贖はん爲に世に降生せしめし神靈となり、茲に此二宗教は各其教祖の理想的超世的職分を信奉するを大本とするに至れり。佛教にては其信仰の大本として、佛陀の人格に關する宗教哲學的考察を佛身論と稱し、基督教にては之を基督論と稱す。此等は即神的創唱者を信ずる宗教の中心なるを以て、今此二者の發達に關して、其初期に教祖を理想化したる跡を觀察し、併せ

て其理想化に與て力ありし馬鳴及保羅につきても觀察する所あらん。

佛陀の眞事蹟に就きては今日は殆ど其正確なる者を得難しと雖も、後世の佛所行讚(Buddha-carita)普曜經(Lalia-vistāra)に傳ふる所は多く他の傳記を混じ、又甚しく其事蹟を誇張したるは明なる事實なり(印度宗教史考第(五)部一章參照)。今其眞蹟を推測すれば、一國主の子が世の無常に心動きて出家得道し、其透徹の道德教に依りて多くの弟子を教化せしならん。然るに其死後に至りて、教徒は此偉人を通常人間として見るに憚らず、己等の恩師にして又世間の導師世界大海の渡船師たる佛陀は尋常一片の人間なるべからずとし、其死は丈六の肉體を葬り終りしも、此く灰燼となりたりしは眞に佛陀の身軀にあらざ、佛の眞實身は常住にして常に吾人を教導せるを自覺したり。此に於て佛教史上重要な佛身(Buddha-kaya)の説を生じ、佛陀なる一人格は其肉體と一生の具象的事實以上に理想化せられ、一切の偶事的關係を離れて、必然普遍に人天の濟度者なりと思はれ、其本性は即宇宙の本體、眞理の本質にして、其濟度は即宗教客體の大慈悲なりと信ぜらるゝに至りぬ。此の如く、佛隨の人格は漸次宗教的客體と理想化せられつゝありしが、終に馬鳴に至りて佛を宇宙

の本體究竟眞理の實質となし、之を佛の如來藏(Ālaya-garbha)又法身(Dharma-kaya)と稱するに至れり。語を換へて云へば、佛陀覺者とは即覺知其者にして、不生不滅なる如實の本體、一切諸法の依て存立する所以の源泉なり。而して此法身如來藏は眞實智慧なるが故に其中に大智光諸功德を藏し、如何なる妙用と雖も開發活動せざるなく、此妙用に依りて能く一切衆生を濟度す、此故に上智の人は其上智なるだけの佛に攝し、佛を觀じ、凡愚は凡愚なるだけに佛の化現を見て之が濟度を受く。是れ即佛の報身(Nirmāṇa-kaya)應身(Sambhoga-kaya)にして、諸の時代に諸の佛が出現して機に應じ時に際し衆生を濟度するは此二身なり。釋迦佛陀の如きも亦此應身の一顯現なりとす。而も亦此の如き報身應身は特に肉體ある一定の人に現はるゝ者のみにあらず、如來藏即宇宙の源泉より出づる所の一切現象は皆人々の見地に應じての報身應身にあらざるなく、一切現象は法身如來が衆生を濟度せんとする慈悲攝護(Prasāda, Anugraha)の發表なるが故に、若し人にして之に歸敬し其濟度に攝せんとして専心の信仰(Bhakti)を之に捧ぐれば、此信仰は能く至る所に如來の身軀を見せしめ、何れの處にも如來の説法を聞かしめ、其慈悲を享け其攝護に包

容せられ、其智徳の度に應じたる報身應身を觀じ、終に眞實の法身に到着せん。馬鳴は此く深奥なる宗教哲學を以て佛陀を理想化し、釋迦佛の出現の決して偶然又任意にあらずして、必然に宗教的關係に出でし濟度者なりと理想化したなり。此宗教哲學は佛教の大本となりぬ。其は暫く措き、佛陀なる宗祖の人物は此の如くにして理想化せられ、教祖の滅後佛身の考察は熱心なる教徒の精神に依りて漸次其發達をなし、四百餘年にして一大偉才に依りて此の如く完全に理想化せられしかば、釋迦牟尼なる一高德の下に集まりし淨行士の教團は、此に於て鞏固なる哲學的觀念的基礎を有する宗教となりぬ。此より佛教は此理想的如來を中心として其弘大なる教化を行ひぬ。

佛教佛身論の理想化は之を基督教に於ける基督論(Christology)の理想化に比照し來れば一層の興味あるを覺ゆ。基督の事蹟は四福音書及使徒行傳に散見すれども、其正確と詳細なる事は今之を確むるに由なし。只其事實の大體を推測すれば、ナザレの村の大工の子ヤノスが神の慈愛を覺悟し、神の法律は即其慈愛なりと信じ、人々神の愛に信頼すれば天國を得べしと説き、多くの信隨者を得しが、彼の郷人

近親は其の熱心なる傳道説法を見、又其が人左の頬を打てば之に右の頬を出せといひ、汝の眼が罪を犯さば此罪ある眼を抉出せといひ、又は心の貧乏者は幸なりといふが如き奇矯に似たる説を傳へては、之を偽善者なりとし、或はヤノス狂氣せりとせり。ヤノスが嘗て其郷里に教を説きしに、郷人は皆これ木匠の子にあらずや、其母はマリヤ、其兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダにあらずや、其妹等は皆我等と共にあるにあらずや、然るに此人の凡そ此等の事は何處より來りしやと罵倒し、其近親も亦彼を狂人扱ひし或は之に不思議力を見せよと迫り、終に斷崖よりつき落し之を殺さんとするに至れり。ヤノスは其生時には決して神の子にもあらず、又後世教徒が考ふる如く、光輪を被れる神的人にもあらず、豫言者の常として其故郷には尊ばれざりしなり。其信徒に至りては固より之に隨喜せしも、不思議力ある若くは救済の大能ある救主とまでには思はざりしなり。然れども其悲惨の最後と、當時の事情とは自ら之が一生を神的人なるヤノスと理想化するに至れり。」ヤノスが猶太人の王なりと稱するの罪に依りて十字架の刑を受けて逝くや、其弟子及隨喜の婦人等は、一に基督の信仰に依りて集りし者なれば、今は將帥を失へる

亂軍の如く、牧者を失ひし羊群の如く、自ら如何に處し又此より如何にして救の道を説くべきかを思ひて、悲嘆慟哭しぬ。生前は只恩師として仰ぎし人も、此に至りては一層景慕の念を増さるべからず、彼等の多くはかなわぬ事ながらに、ヤソスが再び生き來りて己等を教導せん事を空に願ひ、又基督の敵は基督が自ら死より救ふ能はざるを嘲りしかば、弟子等は尙更其再生を望みぬ。又高德彼の如く、大恩此の如きの人は、其肉軀の死と共に徒爾にして永く死し去るべき者にあらざるを思へば、弟子等が基督の再生を翹望せしは推察するに餘あり。特に此頃の猶太人は殆ど此世と彼世を判別せず、物質と靈とに就きて明なる區別概念なく、且豫言者の言に依れば、猶太人の救主として現るゝ人は、死後其幽靈出づるとの信仰は一般に行はれしかば、基督の弟子が半は肉軀的に半幽靈的なる基督の再生出現を見るべき事情は十分に備りてありしなり。而して此に弟子達の中にて、特に感情に富み激發し易きの性質を備へ、又特に最も基督を尊崇し之をメシアスなりと斷ぜし(馬二加八)ベテロあり。彼は最も基督の死を慟哭し、最も其再生を望む人なりしかば、當時幽靈の信仰に助けられ、ガラリヤに在りて終に基督の靈に接し、其聲を聞き其

形が天に上るを見たり。此よりして弟子等は精神の激動を受け、彼も基督を見、此も再生の基督に聞きたりと傳へ、精神的傳染は終に五百人弟子の前に基督の靈を見るに至れり。此に於て彼等は、基督の復活と其が世界の主なることを信ぜざらんとするも得べからず。舊約の豫言は新光明を以て見られ、皆基督の救主たる豫言となり、特にエサイヤが(五二、五)人の罪を助けん爲に自ら傷くる神の奴ありとの豫言は、基督に適中し、此の如きの救主既に出づ、世は此より新ならん、人は皆罪を赦されて、神の榮光ある國は此世界に下らんとの希望は事實となるべしと確信せらるゝに至りぬ。舊約書中世の救主義人に關する豫言(特に詩篇七の一一〇、八六の六、撒加利二、但以理七の一〇、三、一〇等)は基督に關する豫言となりしかば、又其他神の使、人間の救主に關する一切の特質は基督に附加せられ、何れの點より見るも基督は世の救主メシアスとなりぬ。

此の如く此等原始の使徒は、基督を義人救主として、其死が世の救となるを信ぜしも、而も此は神が其法律の徴證として示せし者にして、人は神の法律に依りて救はるべしと信じたれば、(使徒二の二三、三)基督は義人にして救主なるも、尙基督の死其者

に救の力あり、基督の人格其者が教主なるにはあらず、基督の事蹟は理想化せられたりと雖も、尙基督の人格が直に救の理想的發表とはならざりしなり。佛教の始に、佛が渡船師世尊と見らるゝに至りしも、未だ法身とならざりしが如く、原始使徒の基督論は尙一步を進めざるべからざりしなり、而して之が事業を完成せしは異邦人の使徒と呼ばれし保羅なりとす。

今保羅の基督觀を見るに先ちて、其來歴と性格とに就て一言するの要あり。保羅は熱血男兒にして、一方にては感情に富み、他方にては銳利の理會力を具え、之を統ぶるに強盛なる意志を以てしたり。神經質にして激發し易きも、又誠實幽靜なる真心を具へ、猶太人の常として神に對する敬虔信順の情に富み、又自ら深く人生に就きて眞摯の考察をなし、人間の微弱にして肉體の頼むに足らざるを深く悟るに從て、過境の神に依頼し形而上の靈界を憧憬する事益深きの人なりき。特に其蒲柳の性質と心意の鞏固とは相反映して、一方にては身軀を輕んじ、否殆ど之を憎惡し、他方にては精神を重んじ、神靈の平和信仰の甘味に滿腹の慶喜妙樂を感ぜしめぬ。此の如きは實に宗教家たるの理想的性格を具へたる者にして、此人が其熱血

の感情と銳利の理會力とを以て、基督の事蹟に其本質的特質を觀じ、其中心の意義を觀破し、且肉を卑め靈を尊ぶの持論が基督の肉を十字架上に殺して靈を天上に復活せしめし一事に依りて大に啓發せられ、此に基きて甚深なる宗教的意識の源を開きしは偶然にあらず。保羅は始は純粹の猶太教パリサイの徒として、基督と其遺弟とを惡み、後基督の靈を見て俄然基督の信者となりしは、彼をして一度も見し事なき基督を理想化せしむるに最適當なる境遇を作りしなり。

保羅は小亞細亞タルソの市に一パリサイ徒の子として生れ、少時よりラビの教育の下に、純粹且嚴肅なる猶太教徒として生長しぬ。長じてエルサレムに留るや、彼は基督の徒が基督を以てメシアスなりとなすの僭越を惡み、之を以て神の法律を無みする者なりと信ぜしを以て、先づステファノを追放するの運動に盡力し、次でダマスコにある基督教徒を逮捕せん爲にエルサレムを發しぬ。然れども保羅が基督のメシアスたるを信ぜず、其徒を惡みしは、徒に私情纏綿の爲に豫言者を歡迎せざる故郷人たるにあらず、又徒に宗派心を挾で他宗徒を疾惡する者にはあざりき。彼は敬虔に神に事へ、基督の教は神の教に違へりと確信し、摯實の考察信念に

依りて基督并に其徒を惡みしを以て、其を惡むだけ其れ丈基督に就きて深く思惟しつゝありしなり。此に於てステファノの殉死の節操に感激し、中心陰に基督の感化力に驚歎せし彼のダマスコの旅行は、偶然なるが如くにして而も必然的に、彼が信念を一轉して最も熱心なる基督の信者又其福音の使徒たらしめたり。即保羅は基督教徒究迫の路に上りながら、其前途の事業の正否を疑ひつゝありし時に當り、ダマスコの市に到るべき前日突然にも天上に光あるを見、神經質なる彼は又此と共に基督の聲を聞きぬ(使徒行傳九章二二、二六章)。豫て基督の死に就きては眞摯の考察を廻らし又今將に其徒を究迫せんが爲に旅せる保羅は、此天上光明(Ousia)に依りて心機一轉せり、此光明と聲音とは彼が心中の靈なる基督を天上の靈として現じぬ。而して保羅は之を以て光の體(神立比三)の體(或は天に屬する體(哥林多前四四等))なりとし、從來基督の復活として云ひ傳へられし事實を化して靈の出現となし之に對して基督十字架上の死を肉體の罪障滅殺の好代表となすに至れり。曾て耶蘇を見し事なき保羅は却つて基督の基督たる所以の心髓本質を看取して、其個事的肉體の外に其必然の本質なる靈(Soul)を見たり。此を以て彼は曾て云へり(林

の多六後四)。

光をして暗より輝き出でしめたる神、我儕をしてイエスキリストの面に於て、神の榮光を認識すべき瞬間を生ぜしめん爲に、我等の心を照し給へり。

此の如きは保羅が基督を理想化するに至りし事情にして、保羅は殆ど此事業の爲に生れ來りしの觀あり。

保羅は此の如く靈なる天上の光と聲とに依りて、基督をメシアスと承認するの端緒を開き、基督の死と復活との事實傳承に依りて、基督の人格を理想化せしが故に、其大本より云へば、基督の現象的一面より進で他方の靈的方面を認めしなり。故に其基督論は常に人としてアダムの子孫なる肉體の基督と、神の遣はし給へる神靈即神の子たる基督との對比に基き、常に之を肉と靈、罪と善との對立觀と聯絡したり。羅馬書(三、四)に神が其子基督を吾人に示せしをいひ、基督の肉と靈との何たるやを論じて

彼は肉體に由ればダビデの裔より生れ、聖善の靈に依れば彼が死より蘇りし時より、明に神の子たる事顯れたり。



といへり。而して神が此子を遣はして其肉體を殺し其靈を昇天せしめしは、一に此に依りて一切の信ずる者を救はんとの神の大能を顯はして(六一)基督をして衆生救済の主たらしめしなり。此を以て基督の事蹟及福音といふは皆神の大能が其子に顯はれしに外ならず、其事情は偶然に衆生救済の福音となりしに外ならずして、本來基督の神子としての本質に出でし必然の結果、否神の照鑑なりしなり。保羅は此の如くにして基督の事蹟を理想化したるが故に、基督は單に十字架上に死して天に昇りしといふ現象に依りて救済の主たるに外ならず、其復活に依りて始めて其人に神の子たるの實を見せしも、彼は本質神の子たるなり。創世紀(一二章)に天的、靈的、原型的人間と地的、肉體的、模寫的人間とを分てる例に従へば、基督は其甲なりとは保羅が猶太の教理に基きて固く信ぜし所の基督觀なりき。是れ恰も佛教に於て馬鳴が法身を以て眞如來藏となし、報身、應身は此本體の顯現なりとせしと同じく、保羅の基督は單に救済の「標本」ならずして、一方にては万物及人類の源泉、他方にては救済の實力なり。

此神子なる万能の本體は元は神の體にて居りしかど(腓六二)神は人の肉體の罪を

法律にて罰せんが爲に此人類の模型万有の源泉にして神に同じき其子を罪ある肉の形となして之を此地上世界に遣はし(八馬三)其光ある靈の本體を離れしめ、人の形にて女の胎中より生れ、肉體を罰すべき法律の下に立たしめたり(加拉四)。故に既に肉體なる人間として基督は決して不思議の人間にあらず、ヨセフとマリヤ夫婦の子として生れ、罪を有し法律の下に立ち、此肉體を殺せし事に依りて人々の罪を贖ひしなり。然れども基督は、只肉の形に生れしのみ、既に形(μορφή)なるが故に自ら罪を贖はず(哥林多前二)然れども他方にては既に肉として肉の罪を贖はん爲に生れ來りし者なれば、必然に肉に伴ふ罪を有せしなり、罪の贖をなせし者は罪と同一ならざるながらに、之が贖ひの要素を有せざるべからざればなり。基督は神の子たる本體としては万人万物の主なり、罪の形を有して殺されし人としては一切に代はりて死し(五哥林多後一五)世界的解脱の大能を現はしたり。

基督の事蹟は此の如くにして世界解脱の原動力となりぬ。基督の肉體が十字架上に死せしは神が法律の正義なり、其靈が復活して天に昇りしは神が救済の思慮なり。保羅が基督を理想化せしは其罪の肉體と救済の死とを對立して、其肉體の

死が即靈の復活となりし一點にあり、肉體の死は理想化せられて罪惡の滅殺となり、衆人の眼に映せし復活は靈の聖となりぬ。

是に依て見れば、佛陀基督の如き宗祖の人格と事蹟とは、一宗教の基を開き其特質に滅すべからざる印象を興ふるは論を待たざるも、而も其人格事蹟は其儘にて事實を事實としては極めて偉大なる勢力感化を及ぼすに足らず。之を理想化する偉大の人物ありて此等の人格事業に激發せられ、自己甚深の信念に依りて又自己の性格考察に依りて、宗祖の人格事業の心髓を發揮するに至りて始めて大に其實力を顯はすに至るなり。山を出で、始めて山を見るとは此謂にして、ブライデールも亦曰く、

連山の中にて、最高峯の高さは之に近づくよりは寧ろ隔たりたる地點にて能く認識せらるゝが如く、倭絶なる人格に就きて十分の意義が彼等に直接する人々よりも之を距る人に發揮せらるゝは、人類の歴史上數多き現象なり。蓋し隔りたる人は此の如き人格を性格的特質にて見るも、之に親炙せし人は日々交通の瑣々たる印象の爲に總括的遠觀を防げらるゝなり。

是れ實に馬鳴の原始佛教徒に對し、保羅の原始使徒に對する關係なり。一宗の間祖を見る者は之を理想化する人に就きて注意を怠るべからず。

### 第三章 宗教と他の人文現象との交渉

二九六

人間の精神が天然物質の境遇に反應して、人間の主張を以て生活するに至りて人文あり。其境遇外圍一様ならず精神の需要亦多趣なるに従て、人文の現象亦多方面に發表し其勢力を交渉す。而して此等の人文諸現象は、時に或は其利害を異にして相妨害する者なきにあらざるも、元人間生活の必然需要に出でし者なれば、其歸趣は一に歸して、共に人間の生活を豊富にし高尚にする者ならずんばならず、其の相防げ相助くる合離は進歩の常にして、複雑なる人文は單に調和のみを以て進み得る者にあらず。

宗教は最も深く人心に根底を有し、又最高の理想を憧憬する人文として、殆ど其中心の位置を占め、時によりては總て他の人文を統轄するの勢力を振ふ事ありて、他を感化し影響する事多きと共に、又他の人文の勢力に依りて發達に影響を受くる事少小にあらず。世間の論者往々にして宗教は未開時代の遺物、文明の敵にして、蓋と同じく暗黒の中のみ光明を放つといふ者あり。蓋し宗教は宗義儀禮の傳承に依り、教會の教權に基くに至れば保守的傾向多く、爲に文明の進歩に伴はざる

事あり、且世の文明なる者は其物質的方面に於て最も多く人の注目を惹き、物質的豊富は多く宗教的理想と相容れざる事あり、此等の關係は人をして宗教は文明の敵なりと思はしめし原因ならん。然れども宗教には生命あり發達ある事、他の人文に異ならず、且同じく人心の理想追求が或は精神的或は物質的或は社會的方面に表れたる者なれば、其發達成長の間には、相互の増進に依りて精神的希求と物質的豊富と相助くる事なくんばあらず。儀禮が因習を重んずる爲に道德の進歩に後れ、道德上非認せらるゝに至りし人身供犠の如き、残忍の儀禮或は猥褻陋卑の表象を保存する點より見れば、宗教は道德に背けるも、元此の如き道德の進歩は、元宗教の精神的進歩が之を促進したる者あり。宗義の方面より云へば、教會傳承の宗義が世の科學に衝突する事多きも、世の科學は元宗教の中より發達せし者にして、且宗教は永く科學と衝突する者にあらず、新科學の世界觀に基きたる新方面の宗教が、古宗義に對して勃興する事例少なからず。されば人文の發達は單調ならざるも、其成長は諸人文勢力の統一的進歩に外ならず、而して宗教は其中に重要な位置を占め、社會の何れの方面にも活動交渉せざるなし。今其關係を研究せん爲に、

特に諸人文の宗教に對する關係勢力に着目して之を分類するに、神話及言語は一般社會的潮流として人の自覺反省に訴ふる事少くして、人の寫象を養成支配し又宗教の寫象界に勢力を有する現象なり。道德風習、法律の如きは社會的制裁力に依りて個人を支配し、此點に於て宗教の客觀的發表社會的活動と相交渉影響する現象なり。其次に社會的勢力を有する者ながら尙個人の自覺意識を喚起し此に依りて社會の動力となり、宗教と交渉する者あり即教育學術の如きは主として知力界の勢力をなし、美術は感情を主とし、經濟は慾望に訴ふる勢力として宗教と相交渉す。

#### 第四章 社會的に寫象界を養ふ人文現象

##### 第一節 神話

人文開發の始にありては、人心の生活は天然、人生、宗教、道德、法律等の現象を分たず、善惡正邪眞否に對する人の觀想は相混交して活動し、從て此等を概念的に判別せずして發表す、此の發表は即神話(Mythos)として出づ。即神話は幼稚にして物我を融通する人心の宇宙人生に對する觀想興味を總括したる發表にして、原人が天然を説明せんとし、人間の行爲を指定せんとし、人間天然の成り行を明にせんと努力したる結果は、即總ての事物に人間的意志動作を認め、天然并に人事に個人的動作を附着する神話となるなり。

神話とは一言にして云へば、人類が人格化的統覺(Personifizierende Apperception)に依りて天然人生に對して此等は總て自己と同じく活動せりと觀想したる信仰の表發なり。外界を觀測して、万物悉く人格的にして生物の如しと統覺すれば、外界現象の變轉する活動と、狀態とは自ら人間がなす活動狀態となるを以て、此外界を想像し

又之が信仰を發表する時には、之を人間の如くにせざる可らず。曙光の白むは、即人格ある曙光が自ら白みて人間を愉快ならしむるなり、火が暖なるは人を暖かならしめんとて燃ゆるなり。此の如く天然が盡く生物の如くに考へられ又説かれるれば、人間の空想は益長じ來りて天然現象の人格的動作に種々の空想を附加し來り、嘗に自己人間に對する關係に於て天然を人格的に見るのみならず、天然現象間の關係も悉く人格的に見え來る。此を以て曙の美き空の次に勇ましき太陽がいで來れば、美少婦なる曙が彼の東天に居りしを、勇士なる太陽が之を慕ひて追ひ來りしとなり、電光は髪々舌を吐く蛇となり、又驟雨の勇士が棒を出だして其敵を殺すと稱せられ、雷鳴は其戰鬪の響となり、其他此の如き觀想説話は無限に増殖し得べし。即人格化的寫象に基きたる天然觀并に人事觀の結果は、人格的説話として發表するが故に、斯の如き説話及其信仰を合せて、神話(Myth)若くは Mythology と稱するなり。吾人が神話といふ時には、單に説話たるに止まらずして、當時の人間が眞摯の信仰を以て天然人事に就きて物語りし活ける説話にして、後世の只話として物語らるゝ死せる説話にあらざるを記せざるべからず。

神話の成立は、人が自己に痛切の關係ある四圍の物象現象を把持して、天然其物の中に人格的生氣ありとなすに出づ。此を以て、人類が自己と優勝の勢力との關係を觀ずる宗教も、自己と他人との關係を規定する道徳も、又天然及世界を觀ずる世界觀及人生觀も、皆一致協同して其中に存在せり。神話は眞に宗教にあらざ、然れども神話が世界人生を觀ずるには、先づ其の自己と痛切の關係ある點に於て之を觀取し、其考察は冷靜なる知識慾の爲の説明にあらざるが故に、其動機に於て既に宗教的なり、又之が觀想の方法は、天然人生を活物として之を自己に關係するに於て宗教的なり、加之、神話の結果は天然の中に人間よりは優勝なる活力を觀じて、之に依賴し之を信仰するが故に宗教的なり。神話は人類思想の胎處たるも、又特に宗教の胎處にして、何れの國民の宗教も源を神話に發せざるなし。原始の宗教は神話的宗教にして、神話は原始の宗教といふも敢て不可なきなり。

神話の信仰は人心の人格化的統覺に出で、而して此過程は何時迄も人間の思想が表象的把持に依りて行はるゝ限は到底亡びず、其範圍と材料とは精神の開發と共に増進す。即其材料は未開人の天然的生活に最も關係多き、日月の昇曬變化、氣象

風雲の變態の如き、天然の事に關して最も顯著なる神話を作り出だすも、其他動植物の特質畸形、山谷林野の奇象より、人間社會に於ける風習儀式に關しても、其起原性質を神話的に鍛鍊組成し、又は人間の中にて特別なる職業或は力量ある者、即ち巫者、醫者、占卜師、鍛工の如き、其特別の性能は皆神話の材料となりて、生氣的人格的説話を生む。されば神話の材料内容は、大別して、自然界と人事となり、天然神話(Natural-myth)は主として、天然現象を題目として、風伯、雨師或は日神、月神を説き、人事神話は人間の生死、婚姻、家族の起源等を一定人格の動作に歸するも、二者は相複合して決して獨立せず。風伯、雨師といふは、既に人間社會に存する巫者、咒術師が能く風を起し、雨を起すとの信仰に出でし觀念にして、日神、月神も多くは王者或は勇者として信ぜられ、他方にては人事神話も亦天然と融通して、動植物に變化したる人を脱き、天より下り、日月の子なる人間が王者となり、或は社會に秩序を與へたりといひ、雨風暴風の神は又社會の猛惡なる武夫と混淆せり。且神話は一般に天地萬物が活きて人格的意志を以て活動するとの觀念に基く者なれば、其發表なる説話は人間の靈魂に關する信仰と相離れず、天然の中に人格的生氣を認むるは、やが

て其中に人間靈魂の憑依を信じ、天然現象を靈魂の關係にて觀察する者なるが故に、所謂天然神話も其信仰の根柢より云へば、人間に基きし者といはざるべからず。巫者に依りて風雲の神を説き、人間に夫婦の關係あるが故に、又日月を夫婦として星を其子となす等、天然説明の神話、界も人間社會の投影模寫としては、又人事神話たるを失はず。

天然神話と人事神話との分別は、其が目的とする所の對象に依りて分ちたる便宜の分類にして、其組成の材料に至りては二者の別分明ならず。只便宜上此二別を立てて諸國の神話を見るに、其國土社會の事情に従て其表面に現れたる主要神話の種類も多く、又同一の事物に關しても異なる神話的説明を施せるは自然の勢なり。埃及の如き熱國にては太陽神話が主要部なるあり、印度の如き驟雨の國にては驟雨神話あり、或は獨逸の如く氣候激烈にして、寒暑の來往が人間生活に關係多き處にては、歲時神話あり、星辰の觀測に長せしペロロンには、星辰神話多し。王者の威權、夙に盛なる國には王室の祖神に關する神話あり、社會の組織制度に關する神話、巫者と神との交通、此世界と死人の國との關係等神話として、諸の國に其國情

民俗に應じて發表せり。

神話の内容種類此の如く多きも、其は何れも人間に同じやうにして而して優れたる活物が、天然人事の原動力となれるを信ずる者なれば、神話は自ら宗教と根柢を同じうし、神話に伴て其中の神格を崇拜する宗教あり、神話は單に説話ならずして、信仰なるが故に人間の生活に切實の關係を有し、其諸神は始より宗教的客體なり。此を以て神話の諸神は、他方にて其中に存する宗教的意識に伴て種々の變化をなし、或者は天然の威力を化して、高大無邊なる唯一神とするに至り、或者は變幻の天然現象を一々に特立の神として、其の方面より崇拜して極めて人間的の神を作るもあり。此間の變化にありて神話と宗教とは其機能同じからず、(一)は天然の觀想信念として、(他)は之に對する宗教的關係として人心に活動するも、而も二者は殆ど別つべからざる様に聯合して其變化をなすなり。神話は宗教的意識に其の崇拜すべき客體を與へ、宗教は自家の需要に基きて神話が人格化したる神的性質を崇拜し、或は慈愛或は威力或は嫉妬の神となして宗教的關係を結ぶ。此の如くなれば此等諸神は既に純粹なる神話の神より進みし者にして、具象的の現象を直に活

動ある人格的勢力と見たる神話は、既に轉じて現象の背後に隠れたる神として抽象に近づけるなり。其終局は猶太教豫言者の唯一神教に於てエホヰを一切創造者にして又法律の管運者として、殆ど全く其太初之神話と相離るゝに至り、或は印度にて闍波尼沙土哲學以後、宇宙の本體として梵天を極めて抽象過境的にしたるが如き是れなり。

宗教が神話と多少特立するに至れば、人智信仰の變化と共に、神話は永く其太古のうぶなる信仰を維持する能はず、然れども又滅亡せずして他の變形と化す。即神話の諸神は或は極めて人間的に見られたる宗教的客體に結合して、後にも述べん如く、道徳の影響に依りて勇者崇拜に關聯せる勇者説話(Heroic Tale)及其他の説話なる。説話とは神話中の人物を歴史的人物の如くに彩色したる者にして、其實質は神話なれども、其形式外形を傳記の如くに物語る者なり。説話には勇者説話最も多し、其實例にて示さんに、希臘のヘラクレスは元は外國の神なるが希臘に入りて神として又勇者として崇拜せらるゝや、此ヘラクレスが天然神話にて、光明として一切を保護し清淨にし惡を拂ふ神なりし痕跡は、勇者の事蹟として或は暗黒

の巨人を斃し、怪物を殺す等の説話となれり。印度にてキリシナラーマに關する説話も此に同じ。勇者説話は多く歴史的彩色を有するを以て後に述べん如く傳説に近く、二者相混じり易し。然れども、一般に傳説にありては、其人は純粹に又明白に人間にあらざ、寧ろ人間以上の存在が人界に下り來りての動作を説きしなり。此故に傳説を信ずる人民は、其人物事蹟の實在を疑はざるも、必しも一定の時處に現はれたりとせず、適當の處には何れにも現はるべしとなし、印度のキリシナの如きは、今日も善人を助くる爲に出現する事ありといへり。

然れども説話には、勇者説話の如く事實として道德に關係多き信仰以外に、寧ろ詩的構想の満足爲に存在し、事實なりしとの主張なしに享樂せられ又幾分か信ぜらるゝ者多し。是れ人間の詩的構想が、其處其時の事情に應じて此の如き事もあらんか或は此くありたいと思ふ構想及願望を事實の如くに言ひあらはし、某の人物某處時に現はれて此の如き事をなしたりとするなり。此の如き説話を遊離説話(Mirchen)と稱すべし、其内容は世界の現在の事物以外に理想的構想を廻らしたる者なればなり。遊離説話は多くは其人物を現世以外の天仙的人格に借るを以

て多くの場合に於ては天仙説話(Faery tale)なり。春日の麗かなる空に三保の松原に富嶽を望み、天上の光明や香りも空に充ちたらん如く思ひて、天人の羽衣先づ飛び下りて天女之に次ぎて天下り來ると構想せしか如き(謡曲羽衣、其源は駿河國の説話なり)或はキリスマスの夜に神が特に兒童に幸するが如く想ひて、其夜はサンタクロース老爺雪の空より下り來り、煙筒より室内に入り來りて星光樅樹の下に多く玩具を齎らすといふが如きは是れなり。其他風土記謡曲の中に此類多く、獨逸萊茵河上のロレライの如き皆是れなり。天仙説話の中には、此の如く單に詩的構想及理想的願望を表明構想したる者あると共に、一般人民の哲學的考察が其構想を助けし者も亦少なからず、特に其哲學的考察は一般人心が時間及空間の束縛制限を逸脱せんとすの不識的衝動よりして、時間空間の性質に關して空想的に考察したる者を多しとす。即日本にありては、浦島の子の説話は、玉手箱の中に人生老年の考察を表明し、支那にては、西王母の話、邯鄲の夢、獨逸にありては、蕾薇姬(Dornroschen)の話、米國にありては、リッパワン、リッパケル(Rip Van Winkle)の話の如き、皆各人生の時間的實相及現世の理想界との空間的關係に關する遊離説話なり。遊離説話は



初は、民間の構想理想として一般の信仰を惹くも、時代精神の變遷に伴て、一般には信仰せられず、唯兒童を慰むるの具となる事あり。此くなれば即ち、伽嘶と稱すべし。

説話一轉すれば實質ある歴史的事實を彩色潤飾するに神話を以てしたる傳説(Legende)となる。即傳説とは歴史的に某時某處に現れたる人物の事蹟に神話的説話を附加して、一種の歴史小説を作るなり。例せば、釋迦牟尼佛に關して其一生の事蹟として傳ふる所の話しは、殆ど人間以上の不思議なる事實のみなれども此傳説を信ずる時代人民にありては、之を歴史的事實と信ぜしなり。而して其傳説の成立を研究すれば、眞に歴史的事實なる核實其中になきにあらざるも、其の最も顯著なる點は、多く天然神話を此歴史に纏綿したる者なり。即釋迦佛隨が惡魔と決闘したりといふは、佛隨なる太陽と驟雨との争なり、佛が成道して正覺を得たる時に東方に明星出でしといふは、佛日出づる前に明星輝くアシヰンの神話より轉じたる者なり(印度宗教史考第一)。古來偉人の傳記には此の如き神話的混淆なき者なく、聖徳太子の誕生、基督の誕生として傳ふる事蹟の如き皆是れなり。

傳説、説話と共に神話の餘命として存するは俗説(Folklore)なり。俗説は發達したる宗教科學の説明信仰を十分に領會信受する能はざる人々が其四圍一切の現象に就きて、神話、説話、傳説の材料に依りて人格化的の説明を試みたる結果にして、弘く云へば、あらゆる事實の世俗的(學術に對して)解釋なり、然れども其材料及方法は神話的なるを以て其結果は避離説話に近き者多し。彼岸の中日に日の西山に入るを見て、お天道様が極樂の東門に入るなりといひ、彗星は惡鬼の靈なりといふが如きは、天牀に關する俗説なり。凝灰岩あれば鬼が火を雨らせし跡なりといひ、大なる岩にて人の形したるあれば仙人或は松浦佐用姫が石に化したるなりといひ、西洋にてアルペン山上の化石を十字軍の人々が遺せし東洋の貝なりといふは、地質的俗説なり。狐の狡猾なるは精智ある人の生れがはりといひ、猫は妓女の生れがはりといふが如きは、動物的俗説なり。老杉老松には其靈ありとて之を燒杉といひ、相老松とて其説話を組織するが如きは、植物的俗説なり。燐火を幽靈火とて死人の靈なりといひ、或は其行列を狐の嫁入となし、又雲の水蒸氣なるを知らず、煙騰りて雲となるといひ、又は雲蒸の團變を稱して龍が天に上るといふが如きは、氣

象的俗説なり。其外天然現象に就きて此の如き俗説は、あらゆる範圍に見るを得べく、又今は其信仰なきも地名等に存して仙人石、英國の巨人行路等の名に其俗説の名残を止むる者少ならかす。

俗説は天然現象に關するのみならず人事に關して亦多し。セム民族の間にて、女子には出産の苦あるを説明せんとて、創世の始めエデンの樂園にてアダム、エブ夫婦ありしに、神の禁を犯して初に智慧の果を食ひしは女なるエブなりしかば、今も女人は其罰を受くるなりといへり。印度にて四姓階級の説明として、其差別は其祖先が梵天の頭或は腹等より出でしが爲に生じたる差別なりとするは、階級なる社會的現象に關する俗説なり。古事記に人間社會にて一方に生るゝ人あれば他方に死ありて、大抵生は死より多き現象を説明して、伊弉諾尊が伊弉册尊を黄泉國に見賜ひし時、册尊は現世の人々を日に千頭絞り殺さんといひ、諾尊は之れに答へて、「されが我は又千五百の産屋を立てん」といひ賜ひしより、是を以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生るゝと斷ぜり。又同書に通々葦命は國の神大山祇の女木花咲耶姫を受して、其姉なる

石長姫を斥けぬ。命は此の如く、雪零り風吹けどとこしなへなる石の如く、ときはに堅き石長姫を嫌ひ、木の花の榮ゆる如く、忽に榮ゆるも忽に散る木花咲耶姫に婚して子を生みしかば、其子孫の壽長からずとて、

是を以て今に至るまですめらみことたちの御命長くはまさいるなりと斷定せり。是皆社會上生理上、甚複雑なる現象を此の如く神話的に説明したる者にして、俗説の特徴なり。

説話、傳説、俗説は神話の遺棄にして、神話が宗教と相分れたる後の殘物なり。然れども、此れ等は各人民に依りて眞實として信憑せらるゝ時代あり、其時代には此等も亦宗教の信仰に關聯して全く分離せず、印度人の如きは今も尙ラマ、キリシナの説話を信じ、佛教徒の中にも其多數は尙佛傳に關する傳説を眞實事として信じ、本願寺の如きは尙親鸞上人が六角堂觀音の夢告に依りて觀音の化身なる玉目君を娶りしを説き、其蓮如上人は石山觀音の化身なりとの傳説を事實として教ふるなり。然れども説話は、人智が事實を重んずるに至れば速に其信仰を失ふ者にして、今日にありては、兒童と雖も、祖母の膝下に昔話を聞きながら直に其事實なる

や否やを問ふを常とす、是れ既に説話信仰の時代にあらざ、彼等も事實ならざる事を信ぜざればなり。傳説に至りては事實なりとして歴史的事實に結合したる説話なるが故に人智の批評力が發達したる後にあらざれば、容易に其信仰を失はず、然れども荒誕無稽といふ語の出では、既に其信仰を破壊するの徴なり。俗説に至りては博く民間に行はれて、容易に消滅せざるも科學の光明は漸次其信仰を教育ある社會より奪ひ去るなり。一般人民が盡く俗説を棄つるは何れの時にあらずやを期し難きも、兎に角早晚其信仰消滅すべき者なり。

傳説も既に人をして其事實を信ぜしむるの力なく、單に一片架空の傳説、説話となりたり、只民間の俗説のみ下層人民の信仰を維ぐも、此も亦天然觀の神話に遠ざかりて、多くの歴史小説説話を混淆する時代に當りて、最も多く太古天然觀の神話的信仰を傳ふるは童謡なりとす。童謡は兒童の幼稚なる心情を以て天然現象を觀じたる結果にして、其の多くは特に詩人等の述作より兒童間に行はるゝ者にあらざ、兒童精神の自然の發表として、一種の韻文をして一國一地方に一般に行はれ、又兒童の口より口に傳はりて變遷極めて少き者なり。我國の「お月さんいくつ」の歌

の如き、殆ど全國に行はれ極めて無意義なる歌の中にも、可憐の兒童が月を己が友の如くに觀じて歌へる者なり。此の如き類の童謡を蒐集するは極めて興味多き事にて、獨逸のグリムグリムの如きは童謡の研究より起りて、之を古代獨逸の神話に参照し、神話の大研究を遂げぬ。我國童謡の一二例を挙げんか。

春はへ來い來い、春の山にはなわ、梅が咲く、來い來い、

の歌は、陸中の童謡にして、彼地の四五月頃遠山尙雪を戴くも、春風北上川に漣漪を起として、春麥既に長く櫻桃梅李一時に開き初めんとする時、無心の幼童が野邊に歌ふ一の天然讚誦なり。其婉曲の聲を聞けば其のあどけなき天然觀に同情して、古代の人類の神話的、天然觀の時代を追想せしむるに足る者あり。次に又「天道さんはよわいね、風の神はつよいね」といふは、關東にて兒童が紙鳶を揚ぐる時風の威力を増さんとして歌ふ者にして、關西にては此句に次ぎて、風神若し我を助けば明日神酒を供せんとの意を歌へり。此の如きの歌は實に吠隨の婆山ハヤシマを歌へる神話に似て、其中には祈禱の分子を有するを見よ。或に又夕日はなやかにして暮雲紅黃の彩をなす時に、兒童が「夕やけ小やけ、あした天氣になあれ」と歌ふは、吠隨にて雲な

るハルツナヤ(Parjanya)を祈るに同じく、雷鳴の時に雷落ちよ、桑の棒でどやす打つぞ、といふが如きは、一の呪咀にして、リトア人の農夫が雷鳴の時に雷なるヘルクナ(Pelona)に對して「ヘルツナよ、自ら止めて我が田に不幸を落とさせ、余は汝に豚の薫肉を捧げん」といふと異趣同巧とやいはん。

之を要するに神話は宗教の胎處なり、母なり、故に此なければ宗教出でず。然れども其子が生長すれば母は死するを常とし、死せざるも益老衰して其生活力を失ふを免れず。説話等は即神話老衰期の生活なり。老母が生活して老邁しながら尙子女の事に干渉するが如く、説話傳説、俗説は其餘命ある間は宗教に交渉して、或は之を利し或は之を害す。今日にありても傳説、俗説が尙民間の宗教的意識を支配し民間の説話が殆ど其宗教をなせるは此が爲なり。蓋し一般人民にありては科學哲學に依りて精微になれる宗教に直入し難きを以て、宗祖に關する傳説は其宗教的感化の一部分となり、或は俗説に依りて安立を求むるなり。特に俗説は神話の遺業として万物に生ける靈の宿れる者なるが如くに説く者多きを以て、俗説が教ふる此靈は或は神靈として宗教的に崇拜せられ、或は兇物崇拜の動機となる。

物に靈ありとする兇物崇拜は、民間宗教、民間信仰 (Volksglaube (Populärreligion)) の特性にして、俗説と民間宗教とは常に相密接せり。

## 第二節 言語

言語は思想の必要なる機關なれば、總て人の思想は言語と相離れず、言語は民族的産物として其中に生息する總ての人の思想に影響を與へて社會的勢力を有せり。されば宗教の思想特に宗教的客體なる神に關する觀念は言語の影響を受くる事少なからず、印度の如く名詞に男、中、女の三性を有する國にては、終に男性にもあらず女性にもあらず即人間的性質を超越したる中性の最上實想を考察して其觀念を明白にするに便益多かりしも、此の如き中性は進歩の後に由でし者にして、其元はヘブライ語の如く男性と女性とのみの者多く此の如き言語の人民にては抽象的神格の觀念を明白に表明し難き困難あり。其の他ドラヴィダ語が高性と劣性とを區別し、アルゴンキン語にて生物性と無生物性とを區別するが如き、其源は思想が自然に此分別をなせしに出るも、此區別が一旦成立したる後には、其に依りて思想

觀念を左右し、其勢力宗教思想に及ぶを免れず。性に次ぎて同義異語及同語異義も亦神格の觀念を變化する一勢力にして、元來異なる神も其の性質の一部を同じうし、其に依りて命名せらるれば、其名稱の類同にて終に同一神と見做さるゝに至ることあり、又其反對に同一神が多名を有して多數の神に別るゝ事あり。パピロン、フニケアの宗教にて多數の神を崇拜したりしが、交替的多神教の常として其多くは最高の神、君主と稱せられし事が宗教的意識の統一を助けて、多神の中に自ら君王なる一神あるを信ずる傾向を生じ、埃及にても諸の神を尊稱して強大(Nitar)と稱し、何か統一最上の唯一神あるを求むる導火を與へぬ。其反對にて希臘のツァイスの如きは天上の最大神なりしに、諸の屬性を有せしより後には風ツァイス、雨ツァイス等各異神なるが如き觀を呈するに至れり。此の如く言語が宗教的觀念に變化嚮導の勢力を與ふるは、思想と言語との必然的關係に出づるを見るべし。然れども此に注意を要するは、言語が此の如き勢力を有する事實に基き、宗教は言語の産物に外ならず、神話は言語の疾病なりといふが如き斷案は過當なるにあり。マクスミューラー等言語學者は此の如き觀を唱へ、宗教の根本原動力を言語の性質に

歸せんとするも、其は言語の發表が元思想の産物なるを忘れし斷案にして、例せばパピロン、埃及等の宗教が神名の致一に助けられて唯一神教的傾向を開發せしは、根底に於ては宗教的需要が多神の中に統一の根據を求めんとし、宗教的動機が包括的統一に進み、而して言語の性質が之の助因となりしのみ。又名詞の性につきて見るも、名詞に諸の性別をなすは、元來思想が萬物を活物として其活動の強弱剛柔に依りて之れが男女性を別ち、其別が又社會的勢力歴史的惰力に依りて思想を嚮導せしのみ、名詞の性が先づ成立して後に神話が成立せしにあらす。要之、言語學派の説は言語過重の爲に宗教并に神話の心理的根底を無視したる者なり。言語が思想に影響し、其性質に依て宗教の發達を左右するは明白の事實なるも、此は寧ろ偶然の變化に有力なる原因にして、宗教發達の必然的勢力はやはり心理の方面にあり。

宗教的觀念に對しては言語の勢力は寧ろ偶然的なるも、思想發表の具として自ら儀禮の要部となり、又宗教的意識の主觀的勢力を轉じて客觀的團結力たらしむる一機關をなせり。即言語は人間と人間との交通に欠くべからざると同じく、又

人の神に對する關係にも重要な機關として用ひられ、人間が神に對する願望を表するに言語なる祈禱を以てし、又神の好意を得ん爲には言語なる讚誦を用ひ、此の如き言語儀禮は又人々の協同を増進し、教會信仰の團結に有力なる分子をなせり。此の如く祈禱及讚誦に依りて神に對する關係を作れば、此祈禱讚誦の言語に神靈の力ありとなす言語的、神話を信ずるに至らざるべからず。從て又言語其物を神とするに至る。

言語を神靈とするは既に猶太人最古の宗教に存し、創世記(一)の三には、神光あれど宜ひければ光成りきとて其言に神力あるかの如く信じたり。此信仰は基督教にも現はれ、約翰福音書(記元百年頃の書)には、神の傍に幾多のことば(Verbs)あり、基督は此ことばの一なりとて、ことばは即神力の發現となせり。回教にありてもセム民族元來の信仰を承けて、神の力は其言即命令の言語に依りて發表すとし、之をアムル(Aml)といひ、神は自らは天上に超然として此アムルをして世界を支配せしむと説けり。此等は直に人間の言語にはあらざれど、神の言語が此の如き靈なる者とするに至りしは人間の言語を貴重したる結果なり。人間の言語を神とするは

印度に最も能く現はれたり。即吠陀の宗教にては、祈禱即ブリハ(Viśvā)を神とし、祈禱の主即ブリハスバチ(Bṛhaspati)と稱し、此神は諸の神を作り、諸の神をして其事業をなさしむといへり。同じ宗教のナマハ(Nama)即南無も亦同一の神にして、此は祈禱に用ふる南無即壽命する詞、其者を直に神としたるなり。此より後、印度にては又言語の辨舌に神格を與へ、言說即ヴァチ(Vāc)なる女神したり、日本の辨才天は此ヴァチに出づ。

後世の哲學及宗教にても亦此思想を發達組織したる者あり。歴山府猶太哲學の翹楚なるフロは、神は自ら世界に現れず、其ことば即ロゴスに依りて世界に交渉すとなし、ロゴスは神より出でたる直接の力(Directive)にして、諸のロゴスは世界事物の原型又原動力なり。事物に屬種個體あるは皆其に相當するロゴスの發現なり、ロゴスは總て人間の智慧信仰の萌芽なり、故にロゴスは神人の媒介者、僧侶なりとして之を尊崇せり。此思想は猶太思想に依りてプラトーンの觀念實在論を變形して生ぜし者にして、約翰の思想も此に基き、其後基督教のグノシス派なるタチアン(Tatian)アテナゴラス(Athenagoras)以下及中世の觀念實在論多く此説を奉じ、言語

は即宇宙の原動力神人の媒介者とせられぬ。此信仰は紀元前四世紀印度の言語哲學的宗教家波爾尼(Ṛṣi)に於て最も能く組織せられたり。波爾尼も亦プラトーンに同じく、觀念即言語には不可見の本體ありとし、古印度の聲常住論に従て、此言詞が表する音聲には常住の本體あるが故に、又音聲に依りて現はるゝ言詞は此本體の發表なるが故に、此に依りて其意義を他人に傳へ得るなりとなせり。此言詞音聲の本體を發表せらるゝ者即塞普多(śabda)と稱す、各の塞普多は屬種等吾人の觀念概念に相當したる聲の常住の本體なるが故に、犬より畜生に、畜生より有情に及ぼすが如く、總ての塞普多は其極最上純粹の存在に歸す。此、最高の塞、普、多は即梵天にして、其他の塞普多及其發表なる言語及物は皆其の變象なり。恰も水晶は無色純粹なるも、紫紅の色にて一時其色を呈しながら其本體は無色なるが如し。此の故に一切の言語は常住の本體を有するも、此等は又梵天なる最上塞普多に出づ、されば解脱とは一切の差別を脱して言語の本體に歸入するにあり。マイトラヤニ優波尼沙土(六二)に能く言語なる梵天を曉悟する者は最上梵に歸入すといへる者は是れなり。

觀念實在論の哲學は此の如く諸處に言語崇拜の宗教を生ぜり。此宗教は又人間が言語の表象として文字を有するに及びては文字の崇拜となり、龍樹(紀元後二世)の佛教以後に最も能く發達したり、龍樹の著作大智度論第四十八卷は此の宗教を述べし者にして、祈禱、禮拜の言辭なる讚誦、即佛教の所謂眞言(Mantṛa)は諸法無礙の神靈力を包有するが故に、之を能持即陀羅尼(Dhāraṇī)と稱す。陀羅尼は於一切諸法通達無礙なるを以て神的なり。且陀羅尼に此の如き功德力あるは、其語に義あるが故にして、義あるは名あるに因り、名あるは語あるに因り、語あるは字あるに因る。此に於て字は甚貴重なるのみならず、各常住の本體にして、其に各特異なる功德あり、此を以て吾人は此諸文字を崇拜せざるべからずとて、梵字の阿字以下四十二字に就きて各其功德を叙述せり。即是れ今日眞言佛教の起源にして、彼教にては眞言を神とし、阿字を本不生なる宇宙の本體とし、以下諸字は各其功德に依りて崇拜せらる。

プラトーン、波爾尼の如き認識論的根據に出でし觀念若くは言語の實體化は、此の如く其末に於て單に言語文字を崇拜する宗教となれり。然れども其原因は、主と

して宗教と言語とが密接の關係を有せしに出で、神の名は即神の代表となり、神に對する人間の言語が神化せられしに因るなり。而も其初期にありては、意義あるの故を以て拜せられし言語文字も、今日日本佛教にては意義もなく單に祕法咒文として徒に崇拜せらるゝなり。

言語が宗教の信仰教理を助くるに從て、教理を啓示する神の言語が尊ばるゝは回教のフムルに於て見しが如し。此の如く教理及啓示を尊重すると共に教理と言語とは甚だ密接に關係するを免れず。教理を表するに一定の言語を用ひて宗義(Dogma)若くは信條(Glaubensartikel)を生じ、教理信條は又一種の神の如く尊重せらる。回教の如きは教祖が説きし其經典なる哈蘭即説法を稱して又文書(Kitab)巻物(Shuh)表(Shuh)葉(Zubeh)と稱し、此の説法文書の巻物葉は、其原本天上にあり、教祖の説法は其直寫なるを以て一字一句も之を變更すべからずとせり。佛教にても既に經文尊重の弊甚しく、佛の金口より出でし説法は犯すべからずとし、龍樹が龍宮より將來したる華嚴經の原本なる恒本大本は菩薩のみ之を見るべく、此世にある畧本は其略寫なりとせり。此れ回教の哈蘭に對すると同様の思想にして、經典の言語文

章を神化したる一の言語崇拜なり。佛僧が經文誦讀に其文字を誤讀するを以て罪と思惟せるは其結果なり。此の如く教理經典を貴重するに至れば、教理に關する爭論は言語文字の争となるを常とす。



## 第五章 社會的制裁を有する人文

## 第一節 道德

人間精神の道德的機能は、其源自利心にありや、將利他に出づるやの問題は此に論ぜず。兎に角人間が明白に道德的意識を發揮するは、其社會的生活の中にて何か服従すべき秩序を認むるに出づるや明なり。此の如き秩序の認識は、家族其他の社會的事情に出づる事多きも、亦原始の人類にありては天然界の秩序を人事に關聯して鑽仰する事最も大なるを以て、其が人間幸福の源泉、宇宙威力の本體即神として尊崇する所の天然現象に依りて、秩序及威力の服従すべきを示さるゝ事甚大なる者あり。天然の恩威炳然たるに服従する宗教的分子は、他方にて其威力は私情に假借せず私曲を容れざるを教へて、自然に人世に於ける秩序服従の道德性を刺激するなり。

天然宗教の中にて、人をして其恩威の炳然たるに驚歎せしむべき現象少なからず、太陽の如き、風雨の如き、皆原始人類の最も盛に崇拜したる所なりと雖も、其の最も公明偉大にして、最も道德的意識に刺激を與へしは、天空なり。太陽の物たる直に其活動によりて人の運命に干渉せざれども、其中には太陽星辰の肅然として出現するありて莊嚴仰ぐべし。故に人間は一旦天空の威嚴を認めて之を崇拜するや、其宏大なるを仰ぎ、其が一切に遍く一切を包括せるを見ては、自ら之を一切の主人支配者とし、一切を見知り、一切を運行するの偉大なる力を信するに至る。此に於て大空は最も道德に關係多き恩威の神となる。印度の婆樓那(Varuna)、猶太人のヤフエ(Yahve)、支那の天(又上帝)皆是れなり。猶太のヤフエは後に國民の守護神となりしも、其始は天上の神にして豫言者時代以後にも其痕跡を存し、アモス(五の八、九の六)は之を讚して、

彼は幸福と星宿とを作る、彼は暗より朝を作り、……見よ、彼は山を作り、風を作り、人に其の睡るべき事を示す。彼は朝の曙光と暗黒とを作り、彼は地の高處を歩む。彼は主と稱せらる。

といひ、而してエサイヤ(三三)は此ヤフエを我等の判官、我等の立法者、我等の王として道德的主權者として崇拜するに至れり。吠隨に於ける婆樓那亦全く此に同

むく、其冥鑑は最も人の良心を刺激し、其に對する讃歌は、其崇拜が如何に道德的意識を刺激せしかを示せり。即阿他婆集錄(四卷一六)には曰く、

此等總ての世界を支配する貴人は手に取る如くに(總て世事を見る、隱に事をなすと思ふも神々は總て之を見る。人々の立ち歩み、靜に動き、或は家の中に或は伏戸に入るも之を見る)二人が共に坐して計畫すれば、王なる婆樓那は第三者として之を知る。此地と及其終悠遠なる大空は、兩ながら王なる婆樓那の者なり。二の大洋は婆樓那の腹なり、彼は此の小さき水溜にも住す。虚空を過ぎて遠く通れん人も王なる婆樓那を離れず、天より降りて彼の使者は此世界を横ぎり、千の眼もて彼等は全地を透視す。王なる婆樓那は、天と地の内と及其外に存する者を知る。人の瞬をも彼は數へ、彼は博奕者が骰子を投ずる如く此等を支配す。婆樓那よ、三重七重に擴れる汝の怒れる繩は、偽をいふ人を捕へ、誠を語る人には觸れざれ。

神話中の宗教的意識が畏敬の心情を作り出だせしと共に、又他方にては神話中の天然宗教が天然の變轉天體の循環の秩序整然たるに及此の如き神に對する儀禮祭法の一毫も犯すべからざるに依て人をして秩序なる概念に到達せしめしは重要な事實なり。埃及にて太陽の女にして天上運行の秩序なりし女神マイト(Mait)は、即人の死後其德行審判の標準となる神にして、死人はオシリス(Osiris)に裁判せらるゝや、人の心とマイトとを衡器にて計り其罪を判決す。其が神話中の天然崇拜に出で特に天體の運行秩序に感化を受けしや明なり(其國の王朝法制の源亦此天體崇拜の宗教に出でしなり)。此と同じき實證は印度ゲルマン族にあり、其中にて後に正直正義の意味に發達せしリクタ(Rig)なる語は、元は天地其處を得、天上の諸神が毎日に秩序正しき運行をなすを表する者にして、又祭儀秩序の義に用ひられ、印度人は此二者に依りて、此に秩序の概念を得、此概念は道德法律の上にて善及正の概念を生むの源となりしなり。此意義特色は高尙に發達したる宗教にも存し、儒教が常に天命天意を基とせしは、其太古の天然の意識の保存にして、基督の言にも天父の正大を説くに天日の無私を以てせり(馬太五の四五)。此の如く宗教的歸敬に依り其心的機能の大本を得て生まれし道德的意識は、其が求めて服せんとする所の道德的秩序を先づ家族の中に發見し、家族中の長者に對しては神に對する

と同じ様なる畏敬敬虔の行をなし、其幼者弱者に對しては神が己に對するが如き好意思恩恵を以て之に對するに至る此傾向は延びて其の屬する所の團族(Tribe)部族の長者幼者に對して、各正當に行ふべき道德的態度を取り、部族の長に道德的に服従するのみならず、又其宗教的信仰の力に依りて之を神の如くに敬し、又其首長は威力と恩寵とを以て部下に蒞む。此の如くにして社會的道德の意識は生ぜしなり。即原初に神話及祭儀の中に含まれし天然の神的なるに驚歎せしに發する宗教的關係は、同じく神話の中に存する社會的生活の秩序を明にして道德的關係を生み出だせり。

道德が此の如く天然宗教の中より生まれて獨立(關係的に)の生命を有するに至れば、又其れ自らの力を得來り、宗教に反應を呈し、道德的意識は又宗教的意識に影響し、神を以て道德上の理想的標本となすに至るは自然の趨勢なり。此に於て戰鬪的なるゲルマンの主要神オーディンは大勇の神となり、男らしくして又莊麗なるを人の理想としたる希臘人にはヘラクレレスあり、其のツォイスは高德有力の支配人なり。此道德的理想化は神を人格化するに有力なる刺激原因にして、其結果として

諸の天然神は各道德的性能を有して或は其司管となる。即儀式の規律なるリタが一般道德の神となる如く、ソーチは辨才才徳の女神、エスタは家族平和を管し、エノは夫婦の貞操を守り、オイメニデースは罪人を糺すといふに至り、諸神は各一定の理想に從て人格化せられ、其性質を明確にす。此の如き人格化は即勇者祖先崇拜を誘起し、或は希臘の如き國民理想の勇者崇拜となり、或はセム民族に於ける家族團族の祖先を拜する宗教となり、自然に一民族一國民の特別に崇拜する神を生じ、アッルのアッスリア人に於ける、エホアのイスラエル人に於けるが如き國民神の宗教を生ず。此の如き諸神は自ら人間と直接に交通し、又人間と利害を共にする者となり、一國一都府の守護神として親しく崇拜せらる。此と共に人間の勝れたる者は神に均しとして崇拜せられ、或は又神が人間の女に接して見を生ましめし等の信仰を生じ、此の如き見は半神半人として特に勇者となり、其勇行を叙事詩等に讃歎せられ、此等の英雄は皆神として崇拜せらる。英雄崇拜の結果は神話と歴史傳説とを混淆する基となり、一家一社會の創立者、功績者と神と混淆し、其社會の王若くは貴族は其神の子孫なりとの信仰を伴生す。されば勇者崇拜は又常に祖

先<sup>〇</sup>崇<sup>〇</sup>拜<sup>〇</sup>に關聯し二者相助けて一家一社會の守護神となり、或は運命の神となる、氏神及産土神は皆是れなり。

此の如く人間理想の勇者となりし神は、人間が偉大にして歎美すべしとなせる一切高德の模範となり、英雄崇拜を隆にするは自然の勢にして、希臘人のヘラクレス(Heracles)は、元は希臘の諸地方に行はれし神話と并にアッスリアの光明に關する神話より合成せられし神なるも、後に希臘人の道德的意識に依りて理想化せられ、勇猛有徳の神となり、勤勉し、苦に堪え、迫害を受け不運に遭ふも屈せざる勇者と信ぜざられ、彼は此故を以て其賞としてオリンピックの神位に列せらるゝに至りしと。此に於て彼は希臘國民一般の理想として崇拜せられ、練習場の体操オリンピックの競技をなす者は之を男子の強き模範として勇者の守護神とし、龍辨家は之を先見思慮ある、慧巧の神と崇拜し、ストア學派は之を忍耐廉潔の模範と拜するに至れり。從て此神は總ての守護神となれり。印度のラーマ(Rama)とキリシナ(Krishna)は、傳説中の勇者が神の化現と信ぜらるゝに至りし者にして、其勇者崇拜たるに至りてはヘラクレスに同じ。我國の八幡宮亦此と同種にして、應神天皇は其神前に加冠

したる義家と關聯して勇者崇拜の對象となり、弓矢の神源氏一族の守護神となりしなり。勇者崇拜は常に歴史傳説特に武勇譚と離るべからざる關係を有し來るを以て、勇者と神との混淆進み、其崇拜盛んなるに及びては、此武勇譚、叙事詩は勇者崇拜の宗教に聖典たるが如き觀をなすに至る。希臘のイリアド、オデュッセイア、印度のラーマ物語(Ramayana)大、マハ、ラータ(Mahabharata)の如きは皆此にして、叙事詩と宗教と關聯あるは此が爲なり。

神の人格化は又一方にては死し逝きし人々の紀念と合し、先に述べし如く勇者崇拜と相關聯して茲に祖先崇拜を盛にす。凡そ親子兄弟の死せし者に就きて、其平常を記憶し、之を距る事遠きに從て其の惡方面を忘れて其追慕すべき者のみを追想するは人の常情なり。此の如き理想化の尊崇は、常に二方面に働き、一方にては死せし祖先の性能功徳を理想化して人の模範理想とし、他方にては此祖先追慕の念を移して現在の老人たる一家の長、一社會の元老に及ぼし、之に對して一種の宗教的尊崇をなし、宗教の精神的結合と、同祖の血族的觀念と相合す。此に於て宗教と道德とは密に相助け、祖先を知徳の模範となすと共に、主我の心を棄て、家長酋

長に服従する道德態を生じ、又單に自利の爲に拜せし神格の崇拜にも道德的色彩を加ふるに至る。而して此の如き祖先家長酋長の崇拜を助くるには、勇者崇拜の宗教的意識興て力あり。彼等を理想的人物として尊崇するを以て、同時に彼等を理想神守護神にして又祖神となし、一人一家一族の幸運を此等の神格に依頼祈願す。其の國土、其の時代に於て宗教が家族社會の團結と離す可かざる關聯を有し、又社會的團結が主として其根底を宗教的意識に有するは是が爲なり。

宗教と家族的關聯の最も密接なりしは支那の祖先崇拜に基く宗教道德的意識にあり。蓋し支那人も天然崇拜には天地山川を拜せしも、其牧畜的家族生活は漸次祖先崇拜の宗教を盛にし、祖先崇拜は殆ど宗教的意識と慣行の全躰となり、一家の和合も、一家を擴大したる一國の統治團結も、皆此意識慣行を基とせしなり。故に支那の儒教は齊家と治國平天下とを一聯の術となし、祖先父母に對する孝と國君に對する忠とを一物不二とし、孝は百行の本と稱せられ、其祖先崇拜は一切の事物古を是とし、祖先の行を守り、父の道を改めざる保守を以て社會道德の大本となしたり。日本の宗教道德も亦此と同種類に屬するも、彼よりは一層天然的特色を離

れて純粹に祖先崇拜を以て其宗教となせり。

道德が宗教に反應する結果は此の如き崇拜を生じて其諸神界は人間のとなり、人の如き感情行動を有する者となり、彼等は力量道德の上にては人間に勝れたるながらに、尙人間の短所を有し、憤怒愛憎の念熾に詭計策略に於ても甚勝れたる者となり、人間は其道德非道德を併せて之を神に歸し、神が人間と異なるは只力量の優劣となる。是れ人格的崇拜の宗教にて、諸神の間に不道德の盛なる所以にして、人は己の貌に従て其神を造るといひ、又クセノファースが人は己の徳をも不徳をも其神に附着すといひしも、此事實を表明せる者なり。然れども此時代にも、人は其々の性質行爲を不道德なりと意識して之を神に附着するにあらず、道德的に自らも此くありたしと思へる理想を附着し、其結果不識の間に他の不道德をも附加するのみ。加之、此の如き時代に神に附着したる屬性にして、今日吾人の眼には不道德と見ゆる者も其當時には不道德ならざりし者多くあるなり。されば道德が宗教に反應活動する結果は兎に角宗教と道德との密接を來たし、又其神を道德的に來るなり。神が既に道德的となれば又自ら人間道德の模範と見らるゝのみな

らず、又其司管者、監督者とならざるべからず。此を以て人が道德には一定の客観的規律ありと信じ、又特に此規律は善悪の行爲に従て其れ相應の應報ありと信ずるに及びては神は此應報の支配者となり、神力は賞罰の源泉となり來る。

此の如き應報が直接現世的の應報として行はるゝとの信仰は多くの國民に見る所にして、希臘にてラオコーンが神罰の爲に直に神前にて大蛇に殺されしが如き是れなり。且又其應報の責任者は行爲者一人に止まらずして、一家一族より一社會に及ぶとの信仰亦甚多し、猶太教にて、アダムとエヴとの罪は其子孫なる人類全體に及びしと信ずるは其最弘き者なり。應報の信仰發達するに従て、現世のみならず死後の信仰と結合して、死後應報を信じ、死後世界に應報ありとすれば、其世界は大別して善悪の二となり、此二種の死後世界には各其司管なる神を生ず。印度にて始は單に死後世界の神なりし夜摩、即煩魔が變じて下界地獄に罰を司る神となりしが如き、佛教にて極樂(Sukhavati)と地獄(Naraka)の二あり、基督教には樂園(Paradies)と幽府(Hölle)あり、希臘にはエリシムム(Elysium)とハーデス(Hades)とありて、ラダマンティス(Rhadamanthys)は前者の神、プラトーン(Pluton)は後者の神となれり。

死後應報の信仰は道德の影響に出でたると共に、又必ず靈魂の信仰を豫定す。靈魂の信仰は始より道德に關係なしに生ずるものにして、多くは呼吸を靈魂とし、梵語のアヌ Ash、希臘のアンイマ、羅馬のスピリトゥス Spiritus の如き、此の如き靈魂は肉體の後にも永續すとす。而して多くの國民にては、靈魂は肉體の死後善悪の應報世界に行くを以て終局となせるも、又或國民にては、靈魂が死後再生死して應報を受くと信ずるに至れり。即是れ輪廻轉生(Melampusychose, Teufelswanderung)の信仰にして、輪廻とは即靈魂が死後應報の爲に善悪二世界に行くのみならず、又其外に善悪行爲の性質輕重に應じて或は人間中にて種々の階級に生れ或は畜生其他諸の境界に生るとす者なり。蓋し此信仰は世界中第一に埃及にて發生し、印度にも起り、又支那には列子、希臘にはピタゴラス及其徒の之を説きしあり。此等諸方の輪廻説の間に歴史的關係ありやなしやは今日は十分に明ならず、其中にて其組織を最も綿密にしたるは印度の宗教なり。

應報及輪廻の信仰は、又甚だ何かの終局に達すべきを要求するを以て、此に世界終局論(Eschatology)に關する信仰を生ず。而して其信仰に於ける世界の終局は皆道德

上の圓滿なる究竟を想像或は考察せし者にして、印度の宗教にては一切皆梵天に歸入する最高の終局を説き、波斯にては善神アフラの勝利を世界の終局となし、古獨逸人亦善神の大奮闘を信じ、猶太及埃及にては世界の終局には最後(der jüngste Tag)の裁判ありて、善人は十分の報を得べしと信じたり。其他此種の信仰は多くの國民に發見し得べし。

## 第二節 風習

今日風習として行はるゝ者は、何等の意義なしに行はるゝに似たれども、其始に溯れば皆各其必要と意義ありし者にして、其始社會の中にて多少の必要ある事は屢行はるゝ事となり、屢反復して行はるゝに及びては風習となる。風習となれば幾分かは隨時の個人的便宜に背くも、一人之を行はざれば、己れ獨り他と異なる物となるの不便あるを以て、自ら風習に服従すべき制裁を有するに至る。風習が常に尊重せられ莊嚴なる意義を有するは此が爲なり。今英語にて莊嚴の義に用ふる solemn といふ語は、羅馬にて同じ語なる sollemnis として、其元は一なる solus と年なる annus とより成りし語にて、即年毎に起り來るの義にて、年行事の義に外ならざりしなり。反復して行はれし風習が自然に神聖なる強制の力を有し來る事見るべきなり。此の如き風習が瓊少の必要あるのみにして社會自然の制裁に依りて社會的慣行として行はるれば風習(Branch)と稱すべく、社會的必要を有して一定の善惡の規範に支配せらるれば道德となり、道德の必要莊重なれば政治上の制裁に依りて法律として行はる。二者共に社會的慣行が制裁力を有するに至りし者なるは一なり。風習は其自然の性質として莊重神聖なり従て又神聖の態度を以て人の内心外行を支配する宗教と常に相關聯するは自然の勢なり。

若し心理的に分析すれば、風習の起原は個人にあり、一個人が便益とする所にして又多數の便益とする所の者なれば、此は漸次多數人の採用する處となり、個人の習慣(Gewohnheit)より集成せられて社會的の風習となるに似たり。然れども社會學上の研究に依れば、事實上の發達は之を反して、原始の社會には始より社會的風習強き者にして、個人的習慣は其範圍外に出でず、一部落一社會には自然に適宜の風習ありて、嚴密なる制裁を有し、其社會的制裁は中々に嚴厲にして、人々の内心如何を

既はず、只其外面發表に於て人を服従せしむ、否原始の人類は我慾には長じたるも、理性的に意志の自由を主張する者にあらざれば、此の如き風習の制裁は今日吾人が想像するよりも容易に行はれ、又社會の團結秩序も多く此風習の行はるゝに依りて助けられしなり。此の如く風習の力盛なる社會時代にては社會に於ける宗教の組織も亦内心の信仰に依るよりは寧ろ外面の祭儀に依りて成立せるなり。祭儀は多少内心の信仰に關係ありて、其の信ずる所の性質に相應する者なるも、其の主とする所は外形の行事にありて、風習的に行はれ、外形儀禮は風習と協合して同一範圍に行はる。されば此二者は後世には判然相別れたるも、此時代には殆ど區別なしに行はれしなり。

風習の中にて最も宗教的儀禮に關係密接なるは集會及祭祀なり。何れの社會にも定時に部落民衆相集るの風習なきはなく、又何れの宗教も定時に神を祭る、而して此二者は今日にても尙一致して行はる。風習儀禮の結合的發達に最も力多きは蓋し火なりん、火の發見は殆ど人類の大革命をなして、人類社會の事源を此に發する者甚多し。抑古代に木を摩擦して火を得る時代には、火の貴重なるは云ふ迄

もなく、又一旦作り得し火は之を消滅せしめざらん爲に、常に之を燃し置くの必要あり。此の如き習慣は又直に宗教的意識と結合し、太古の人民は此の如き不思議の火を神力とし、若くは神の現はれと信ずるを以て火の貯藏は神聖の場所となり、爐或は竈は家中にて神を祭祀する所となり、火神の崇拜と竈神の崇拜とは炊事の關係よりして并び行はる。支那の竈、日本のオキツヒコ、オキツヒメは即竈神にして、支那の神は之を祀るの祭なり、印度の阿姑尼、日本のヒノカミ、ヒノカグツチは即火神なり。此の如き火神竈神は何れの國にありても、太古には重要な神として尊ばれ、一部落若くは一家族には大抵皆共同の火及竈を有するを以て、其祭祀は社會的團結の基礎となり、又其祭祀よりして諸の社會的及家庭的風習を生ぜしなり。

生活の必要より生じたる火神竈神の祭祀が多く社會及家庭に影響するには特に食事に關聯するを常とす。即火神竈神の成立は一は火に依りて暖を取るにあるも亦火の發明は火食の利益を知らしめ、既に部落若くは家族にして共同の竈前に集るれば、火に依りて暖を取り、其間に親和を増長すると共に、又共に食事をなすが



故に、食事は一方にては其定時の必要に依りて人々の団樂を催うし、又共同生活の基を開き大に社會的風習の發達を促すなり。此故に羅馬にて食事といふ語コエナ(Coena)は共同の義より出で、又食事の義なる獨逸語のマル(Mahl)英語のミール(Meal)は古獨逸語のマル(Mehl)即時刻より出で、食事は定時に人々の籠前に團樂する機會となりしなり。此を以て古代社會の食事は饑渴の必要の外に漸次社會的家族的集會を生じて社會的制裁を有する風習となるに至る。且かゝる集會には人が食事をなすのみならず、火食の恩人なる火神靈神に食を供し、又食事毎に祖先にも之を供するを常とするが故に、食事の集會は又宗教的祭祀の集會となり此と同時に供物及祈禱を行ふ。今日佛僧及基督教徒が食前に祈禱をなすも此の遺風にして、此の如き定時の集會及祭祀は又祭禮節句の起原となる。即毎日の食事は一家の集會祭祀となれば、又時を定めて部落全體の集會祭祀をなすの要あり。太古の曆時は多くは月の盈昃と時候の變化とを基とせしに依り、満月、新月、兩弦に小祭を行ひ、春秋兩分、夏冬兩至の如き時に祭祀を行ひ、自ら祭禮と節句との風習を生ず。祭禮と節句とは其性質全く同じ者にはあらず、祭禮は一定の神を祭る者にして、節

句は某の時期を定めて集會し、其他其時に必要なる祝福をなし、此と共に時候に適當したる娛樂を行ふなり。然れども古は二者合一して行はれ其間に明なる區別なかりき。此の如き祭禮節句の集會は、元來火神の崇拜と食事の集會とを其最大の原因となすを以て集會には燈火を點し、食事をなすを常とす、且既に酒ある社會にては酒は火と同じく神として崇拜せらるゝ事多きを以て、集會祭禮には必ず酒を濺ぎ又之を飲むの風習あり。此等の風習は固より一方には人間が光明を好み飲食を楽しむ自然の性情に助けられしなるべきも、其起原は火、食事に關する儀禮風習より出でしなり。

祭禮節句の定期は固より一樣ならず、毎日太陽の出入、食時の小より、満月、弦月、新月、季節の過渡、兩分、兩至の如き大に至る。又農業社會にありては、播種及收穫の二時に神への祈禱感騰と祝福を共にしたる社會的集會を開くを常とす。吠陀時代には日の出入に火の祭をなし、食時には祖先諸神靈を祭るの家族的儀禮を行ひたり。其他にても太陽の出入を期として禮拜する者多く、回教は日に六回の禮拜をなす、此等は後世には時報の鐘に源を開く事あり、何れの國にても寺院の鐘は又時刻を

報ずるの職をなす。月に關する祭禮節句は甚多し。吠陀時代には満月に蘇摩の祭をなし、酒を灌き酒を飲み之を集會即刹頭(Sakra)と稱しぬ、卯月八日は此の遺風なり。猶太等にて肝要なりし宗教的定日サバト(Sabbath)は月の變化に基きて、新月満月兩弦を神聖にしたる者にして、此の如き一月四回の節句は何れの國にも見る所なり。季節の祭即節句は甚多し、我國の五節句も今は殆ど宗教的性質なきが如きも、元は皆守護神を祭りしならん。即上巳には女兒の爲に其將來を祝福し、重陽には菊の盃を呼で壽を祈るが如き是れなり。吠陀にて一年の三季の初にはソノの大祭即大集會をなし、又三火の祭をなして火を燃やしたり。日本の盃祭、御灌の如きは皆季候に應じたる祭なり。兩分兩至を節句とする事亦多く行はれ、古代ペリウ(南米)の四大祭日は此時を以て行ひたり。支那にても此四時を祭とし特に兩分は社日として播種收穫の祭をなしたり。日本古來の新嘗祭も亦收穫の祭なり。

一年の節句にして弘く行はるゝは年始なり、支那の夏曆にては冬至を年始とし、其他國々にて異なり。其他年の節句にて著しきは、セム民族の間に行はれて一年最悪の時候を節句として祭を行ひ、後希臘にも及びし所謂アドニス(Adonis)の祭なり。即此祭の始は女神イスタルが其寵愛せる美壯年の死せしを醫すべき水を求むる爲に、下界に下りて拘留せられしより、地上に諸の災害起り、生殖力の神なるイスタル在らざる爲に、一切の生物皆生殖の力を失ひしを嘆くなり。此のアドニスの祭はつまり一年中の最も苦しき時候を嘆く節句にして、夏期暑熱に苦むフニケア及ペヒロンにては之を中夏の頃に行ひ、高地暑に苦まざるスリアにては中冬に之を行ふ。

火と食事とに相並で宗教的習慣の基となるは住居なり、家居は人を天然の威力及仇敵猛獸の害より拒ぎ、且一家族共住團樂の基礎となる者なるが故に、太古の人間は一方にて此保護の力を神の如く見て之が恩恵を謝すると共に、他方にては火食其他の社會的事情に依りて鞏固に赴きつゝある家族の親和を此家宅に謝するが故に、家屋の造立保存に就きては種々の宗教風習を生じ、第一には家を建つるに先づ其の地の神靈を祀り、又新屋の爲に神の保護を求むる祭祀を營み、其より後には常に家屋に關する諸の神を祭る事竊神に同じ。蓋し節分の豆撒の如きは鬼を追

ふよりも寧ろ家宅の守護神に供物をなすの意なりしならん。吠陀時代には家居建築の始に祭をなし我國にては地鎮祭及上棟式を行ふ宗教的習慣あり、又家宅守護の神として宅神ヤカガミあり、現今の日本には多く稻荷を以て宅地の鎮守となせり。住居に關する宗教的慣行は即家族團結の發表なれば、其中には自ら家族内の行事を含蓄して、家族の大本たる婚姻、誕生、及葬式、祭祀は皆家庭の宗教的儀禮として行はれ、其方法は一定の風習となる。其方法は國と時代とにて異なるも、其が家庭の守護神多くは火若くは祖神を中心とし、其祭祀を兼ねて行はるるは何れの國にても同じ。印度にて家庭行事(Grihya-karman)と稱するは即此等行事の總稱にして、婚姻は家庭聖火(Grihya-agni)を圍りて夫婦が握手三周するを方とし、誕生には聖火の前に其式を行ひ、割髪命名等皆エダの讃誦を以て行ひぬ。葬祭が同じく火神を中心とするは云ふまでもなし。羅馬にては帝國時代以前家族の觀念盛なる間は、家庭内なる祖先墳墓の上に燃やしたる火を中心として冠婚葬祭を營みぬ。文明の多少開發したる國にても、婚姻葬式等は一定の神を中心として其前に行ふを常としたりしが、尙今日にも其が宗教的行事たる意識を失ざるもあれど、又我邦の如く

全く社會的風習として存するもあり。

此の如くにして家族的行事と神と關聯し來れば、神は人の家屋に主たるのみならず、又自らの住所ある者となり、祭壇より神社に進み、一村一部落には各其守護神の社殿あるに至る。此の如き村郷の神社は村郷の團結風習に大影響を及ぼす者にして、祭禮節句は多く此處にて行はれ、此機會によりて部落内の親交を増進し、又其中に技藝の進歩を競争するの場となり、又は祭日を利用して市場を開き物品を展覧して部落の好尚を教育する事甚多し。支那の社といふは神殿の義にして、又集會の義なり、祠は神殿と共に春の祭の義あるが如き、皆神殿と社會的集會風習との密接なるを示せり。

此の如く火食住居等の關係は祭禮節句の風習を生じ、社會的分子と宗教的分子と相混合して行はれ、今日に及へり。然れども其節句の性質或は歴史上の事情に依りて、其中に二分子の消長あるを免れず。例せば支那の社日にては鎮守の神に收穫を謝する點より云へば宗教的にして、郷飲酒の禮即一郷の懇親會は宗教的には祖先諸神が食卓を共にして飲酒する祭儀なるも、終には純粹に社會的行事として

行はるるに至れり。月四回のサバトは歐洲の基督教より日本に入りて日曜の休日となりては、何等の宗教的意義なきに至れり。然るに同じ起原性質なる印度の布薩(Upasatha)は佛教の説教日となれり。其他今日にても宗教的社會的分子の合同せる者多く、日本の彼岸は祖先を祭り神佛に參詣するの日なるも、此は又一年の好季節なるが故に社會的に娛樂として行はるゝなり。

此の如く風習と宗教とは相互に協同せる者にして、今日遺存する風習にして今人は何等の意義なき者の如くに行へる事にも、始は宗教と密接なりし社會の風習より出でし者も亦多し。其一例を擧ぐれば挨拶の如き日常行爲の簡單なる者も尙宗教と習慣との複雑なる交渉に依りて成立せし者なり。未開の時代にありては、人の交通常に平和ならず、人に遣へば先づ平和の意志を示し、若くは相手に謙讓するの意を示すは交際の第一義たるを以て、此時代には挨拶は必要の事なりしなり。此を以て此實を表する爲には或は印度人の如く掌を前に合せ或は亞刺比亞人の如く手腕を胸に交叉して攻撃の意なきを示し、若くは日本の如く頭を下げて服従の態度を表するを常とす。此の如き挨拶が社會の風習として制裁力を有し

て行はるゝには、此實際の必要のみに成らず、宗教上に神に對する態度は此習慣を助け、人々をして此方式に従はざるべからしめ、挨拶には又一定の言詞ありて、大抵は祈禱の意義を有せり。羅馬人が Pax vobiscum(平和は君にあれ)といひ佛僧が Dharmas (幸なれ)といひ、獨逸にて Gott sei mit dir(神は君と共にあれ)といふが如きは、對手の爲に祝福する者なるが、其祝福は神に對手の幸福を求むる祈禱の詞に成れり。挨拶進みて一種盟約の形を呈するに至れば、其言詞は一層宗教的色彩を帯び、我國中古武士の間に行はれし常套語なる、弓矢入幡といふが如きは、入幡神の照覽に依りて此言をなすの義にして、今日英語にて By Godといふも此に同じ。又基督教中にて胸なる十字架に手を附くるも意義は此に同じ。

此外社會的風習の詳細に至れば、其が宗教と關係多き事驚くべく意外の邊に多し。此關係の最も顯著なるは節句祭禮にして、節句祭禮が社會の進歩及風習流行に影響したるは甚大なり、文學は此に生ぜしあり、衣服食物の好尚も此に依りて進む事あり、又此節句祭禮を期として行ふの風習多く派生するを見るべし。彼岸の贈答、鎮守祭の饗應交通より、某の日の水を貯へ、某の日には灸をなし、或は旅に出立する

に宜し等の信仰風習皆是れなり。

### 第三節 法律

法律とは國家が其權力の範圍に屬する人々に對して、其團結の安寧秩序を維持増進せん爲に命ずる一切の規定なり。此を以て法律は國家と共に始まる者なるも、此の如き命令制裁の權力の主體なる國家が尙十分に成立せざる前にありても、社會の風習道德は社會的制裁を以て行はれ、而して法律の源は既に此社會的制裁の中に存す、其故は、共同生活あれば其中に自然に其團體中の人々を制裁する何種かの權力を生ずるが故なり。而して原始社會に於ける風習及道德は常に宗教と密接に關係し、又之に助けらるゝが故に、法律も其始にありては密に宗教と關係し、此關係は文化の高度に發達したる後迄も續く者なり。

法律の完成の爲には國家の鞏固を要し、國家の鞏固となるは共同の團結生活の増進に基く。團結生活の増進は、外面的には四鄰の團體に對する利害の戰鬪の爲に、一首將の下に若くは其他の方法にて攻守の團結をなし、内部にありては同血族、同

言語等の結合に依り、且は祖先を同じくし習慣を共にし來りし諸の因縁に基くを常とす。而して此團結の内縁たる血統、言語、習慣は必ず宗教と結合して同一言語を用ひ同一の發達をなし來りし同人種として同一の神話を有し、其信仰を同じくし、又其外面的儀禮を同じくする事は、團結を助くるの大なる力なり。加之多くの場合には先に道德の條下に説明したる如く、神と祖先と結合して祖先崇拜起るに及びては、此宗教は社會團結の大勢力となり、祖先崇拜にして最上神を一團族の酋長の祖先なりとするに至れば、宗教心は神の子孫たる酋長に對する、服従の心を養ひ、又今日の蠻人に多く見る實例に依れば、酋長君主は多く咒法に長じ咒力を有すとの信仰盛なるが爲に、之に服従して團結を増進し、或は然らざるも一團族一都府に守護神ありとの信仰出で、團結を増進す。此の如くにして國民神(Volksgott)或は種族神起り、或は君主の威權を隆盛にし、或は貴族僧侶等一定階級の威力を鞏固にし、此に依りて社會團結の國家的組織秩序を助成す。

社會的團結と宗教との此の如き關聯は、何れの國民にも見えざる所なく、國家の成立法律の確立には此發達を必とするに似たり。埃及にありて、最初六王朝の時代

には火の神にして生成者の名を得しアタハ(Atah)は埃及王國の統一者として大に崇拜せられ、此と共に國王君主を神として崇拜せり、即ピラミッドの築造は君主を神とするの信仰に出でしなり。又君主を以て直に神の子孫なりとして、神に服従する所以を以て君主に事ふるも世界に多き事實なり。支那の帝王が天命を受くれば天子として一國の政柄を執るべしとするは、天を以て直に帝王の血族的祖先となすにはあらずるも、社會團結の中心たる首長と宗教信仰の中心たる天とを關聯し、此に依りて國君の仁政臣民の服従を規定するに至りし者なり。此の如きは即直に君主を以て神の子孫となす信仰と、單に其の神を一族一國の守護神となす思想との中間に立てる者といふべきなり。

セム民族の宗教も、亦支那人の如く、唯一偉大の神に服従する精神を他方に移して其君主に服したり。即彼民族原始の宗教的意識に、強力と稱せられし天地間偉大の力なるエル(El)を畏敬するにありしが、如く其政治組織は至る處一國一民族に専制の一君主を戴きたり。此等民族は神の畏敬と君主に服従とに依りて一國一族の間に團結を鞏固にし、從て排外的精神を醸し、終に元のエルを化して諸の

國民に於ける特別の守護神となすに至れり。即亞刺比亞人はエールに冠詞を附してアルイラン(Al Ilan)即アラハ(Alah)を其國神とし、バビロニア人も始はイル(El)を最上神とせしが、下界の神なりし恐るべき神なるベル(Bel)又バール(Baal)を其國民の神とし、其神は又諸の種族都府の守護神となり、テール人のバール即ちバールツル(Baal-tsur)シドン人のバール即バールチドン(Baal-tsidon)タルソ人のバール即バールタルス(Baal-Tars)となりぬ。アツスタア人は其の都府の神アヌル(Assur)を國民神とし、其他猶太人のエホヤ(Jehova)モアソ人のヘモシ(Chemosh)アンモン人のミルコム(Milkom)皆各其國民神なり。元は同一の根柢に出でしセム族の諸種族は、各其名稱來歴に從て其主要神を崇拜し、之を自族の最高なる守護人となせしより、此等の神の獨立と共に諸種族は又各獨立の團結をなし、自族の神を奉じて、他の神を拜せる他種族と相闘ふに至りぬ。特に猶太國民の神政府組織は、エホヅを中心として國家を作らんとしたる者なりき。

種族守護神の觀念を發達したるはセムの諸種族を最とするも、ゲルマン及希臘の如き亦此に依りて政治的團結の基礎を作りし者なり。即ゲルマンはオデンを以

て自族の神とせしが故に、戦には必ず其神旗を立て、殆ど此神を大将としたる軍團を作りぬ。希臘にては其神話はオリッピヤの山にある多くの神々が對等の位地にあると同じく、政治上には貴族的共和政治を作りしが、而も諸の都府は獨立に政治組織をなせるが故に、各の都府には特に之を守護する神あり、都府の政治及祭禮等は其神を中心として行はれたり。女神アテーナイ(Athena)のアチナイ府に於ける、アポロ(Apollo)のスパルタに於けるが如き是れなり。

○ 社會を團結し國家の組織を確立するは、何れにしても神に關聯するを常とす。換言すれば、政治的主權は、宗教的意識に助けられて發達し、其神聖の力に依りて實力を得來るなり。宗教の力は此の如く主權の根柢となるが故に、一方にては國法の根柢として一國政體の大體を形成して、支那に於けるが如く天子は天命を受けて國の主權を握り、此民を治むとの國法、法理に顯るゝも、又他方に於て此主權の運用は主として其國に屬する人民の秩序安寧を規定すべき公私兩法に現はれて、太古國家の民法的刑法となる。蓋し此時代にありて一國の主權に關する法理は、自然に此の如くにして宗教に依りて成立せるも、人民一般は尙此法理を意識せず、治者と

と被治者との關係は法理的(即權利的)關係なるよりは、寧ろ權力關係として行はるるが故に、國の主權を助くる宗教の勢力は、主として彼の民法的刑法に現はるゝなり。○ 宗教的意識の國體法理に影響する者は、即神と主權との關聯を明にして、其結果は宗教的國家、即神政治及君主神權の思想となり、其主權の國民に對する運動として現はるゝは主として神罰と刑罰との聯結となり、其結果は法律、宗教となる。人民は既に實際の必要に依り、又其宗教的意識に助けられて主權に服従す。此に於て從來は單に社會の制裁に支配せられしは一轉して主權に對する服従となり、習慣的の道徳は法律となる。此法律は始より完全なる法典として現はれずして、不文の習慣的、法律(Gewohnheitsrecht)なるは云ふ迄もなきも、此時代にありて開發せし法律的意識は主として個人間の惡行損害を矯正する點にあり、他人に害を加へし者あれば、加害者は之を賠償すべきの義務を強制せられ、國權は此強制を助けて人々の惡事を矯正し、又能ふべくんば之を禁止せんとす。此故に此時代の法律は私法(Privatrecht)にして又公法(Öffentliches Recht)の性質を有し、被害の賠償といふ點にては私法なる民法關係なるも、國權が此賠償を以て一の刑罰と見做す上より見れば公法

なる刑法なり。是れ前に此時代の法律を稱して民法的刑法といひし所以にして  
 舊經の所謂贖刑の如きは其代表なり。古猶太の如きは特に此の如き刑法を明に  
 したる者にして、出埃及記(民数記二二五、創世記九の六、)  
(民数記三五の一九、二一、)

若し加害ある時は、生命にて生命を償ひ、目にて目を償ひ、齒にて齒を償ひ、手にて  
 手を償ひ、足にて足を償ひ、烙にて烙を償ひ、傷にて傷を償ひ、打傷にて打傷を償ふ  
 べし。

といへるは、即當時民法的賠償を刑罰として行ひしなり。此の如く私人に對する  
 加害を賠償的に刑罰する點より云へば、此法律の動機は主として私法に存して個  
 人の爲にするが如きも、其害は公法的に社會全體の秩序を重んずるが爲に出でし  
 者にして、猶太人は此の如き條規と共に、又敵に對し殘忍なるべきを命じ、敵國との  
 戦に臨まざる者は之を殺して神の犠牲とせしなり(士師記五の二三、)。然も又此等  
 の刑罰に代ゆるに償金をも許せし事あり。公法と私法との混同して離れざるを  
 見るべし。

刑罰の性質此の如く、而して公權の源泉は神にあり、又刑罰に當る行爲の罰すべき

所以は直接に被害者に對せずして、神の守護に立ちて、其意志に成れる社會の公安  
 の爲にしあれば、此民法的刑法も亦神の威權に基ける者とならざるべからず。損  
 害に對する賠償は神に對する賠償にして、刑罰は神の刑罰なりとの意識は、此法律  
 の根底に存す。然れども神に對すといひ、神がなすといふも、其實は現世社會の必  
 要に出づる者なり。即例せば古代に旅客好遇を以て神に對する義務となし(印度  
希臘亞利比亞等皆然り、)或は敵に對する戰鬪を國神に對する義務となす(ゲルマン、  
猶太も、)其實は皆當時社會の必要に出でし規定なり。只此時代の人民は此等の必  
 要を神に歸して、其宗教的意識に依りて此刑法を行ひ、又此に服従せしなり。神罰  
 と刑罰との合一は意識の事實なりしなり。

此に於て、此刑罰を執行するは國君及其指命する人々にあるも彼等は決して單に  
 我意を以て之を行はず、罪を糾すにも罰を行ふにも一に神意を昧し神の名に依り  
 て之を行ふ。此を以て太古の社會には有罪の人あれば、之が有罪を決するには一  
 種の神託に依りて判決せり。我國の探湯ウラナの如き此にして、神前にて手を熱湯に漬  
 け探る、此方法は始は罪の有無を決する方法にして、有罪の者は神意に依りて手爛



ると信ぜしなり。印度にありては此と同様に罪人をして熱棒を握らしめ、手爛すれば即有罪の徴となし(アハの一六)猶太にても神前にて判決せり(出埃の九)。而して摩拏法典は最も此關係を明にせり、同法典(七卷)には曰く、

原初に當りて自在天は王即司法の執權者の爲に其子司法を作りて、刑罪の棒に依りて一切衆生の保護者たらしめたり。

又其判官は裁判の前には神を拜すべきを規定しては曰く(八卷)

王は…世界の守護なる諸天に降敬を捧げて審問(Karya-darçana)を始むべし。

即一切の刑罰は神命を奉じ、神意に依りて行ふ者なりき。古事記にて、八百萬神が素盞雄尊の天照大神に對する暴行を罰せん爲に千位の置戸(オキド)賠償を負はせ、爪髪を切りて之を追放するや、其罰はカムヤラヒ即神的追放と稱せられぬ。支那にありても刑罰は天子が天意を享けてなす所なりしが故に、書の舜典には五刑官刑以等の諸刑を規定して、欽哉、欽哉、惟刑之恤哉(イヒ)、其欽み恤うるといふは即天命を奉還するの意なりしなり。故に皋陶謨には、天討有罪、五刑五用哉、政事懋哉、懋哉といへり。

此の如く刑罰神罰の合一は法律の方面より云へば宗教的刑法なるも之を宗教の方面より見れば即法律宗教(Gesetzesreligion)となり、神の教旨命令は總て刑法的律法として見られ、此に依りて社會の道德を維持するの宗教を作る。婆羅門教、猶太教、回教、波斯教の如きは其好代表なり。此の如き時代の刑法は現世的刑罰と共に宗教上の刑罰を以て人を制止し、宗教は純粹に宗教的道德と共に現世的規律を含有せり、即倫理の條下に他律的宗教道德として述べし者は是れなり。我國の太古にては罪の贖として置戸を科せしと共に、又罪を穢なりとして、宗教的修法は罪の穢を消すべしとなし、此主意に従て罪人に對して、大祓を誦し神に罪を拂ひ淨めん事を祈れり。婆羅門教の摩拏法典も亦此と同じく、刑罰を神罰とすると同時に、人間の業果(Karma-phala)に依りて得る輪廻の諸境界を以て現世に於ける刑罰の續きとなしたり。此故に同教にて世間の犯罪(Pataka)と宗教道德の罪惡(Papya)とは別物にあらざりき。讀者は佛教にも此觀念の遺分子多く存せるを見らるゝならん。最後に猶太教の如きは法律宗教の最も發達したる者にして、神の十誡は即ち法律(Thor)として、神は吾人の罪を糺し義を遂げん爲に此法律を立てしなり。此を以て

此法律は神の命に従て一切の義務を履行し、又不淨獸の血に遠ざかり、祭禮を行ひ、割禮、洗禮を行ふ等の事を合蓄し、此法律に従ふは即義にして、エホバの目に善と見る事をなし、其誠命に耳を傾け(五の二六)神の前に歩まん(七の二一)事は此法律宗教の大本にして、神の法律を守り、之に義とせられて人祖アダム以來の罪より救はる事は、其宗教的意識の心髓なりき。

此の如き法律宗教に關して、外形の一特徴ともいふべきは、宗教は同時に法律にして、其聖典は即法典なる點にあり。婆羅門教の所謂達磨(Dharma)は元確立定則の義にして、教法にして又法律となり、其聖典はワシシタ(Vasishtha)アーバスタンバ(Āpastamba)等の諸法典(Dharma-sūtra)と及此等を大成したる摩拏の法典(Dharma-sūtra)なり。聖典たる摩拏の法典が其中に聖知(Veda)、聖知の解釋(Vedānta)、習慣の正行(Ācāra)、政治及社會の組織(Vyāvahāra)、刑律及法律(Prāyocitta)、業果(Karma-phala)の六項を合蓄するにても、其性質を見るべし。猶太教にありてもアンムナ(Ammonah)は篤實義を行ふの義を有し、宗教の意義に用ひらるゝと共に又法律を履行する義務として用ひられ、其聖書舊約書は諸の宗教的訓誡教旨を含有するも、其重要部な

るモセス五書は一の律書に外ならず。神が其法律を守る者を義とし、之を破る者を罰せんとすの約束なり。

法律の最弘く又強く應用せらるべき刑法が宗教に依りて行はるゝと共に、又宗教の助に成りし團結なる國家の政權は自ら宗教と密接の關係を有し、太古の國家は多くは祭政一致の基礎に立てる宗教的國家にてあるなり。君主が國民に君臨するは、其が神の子孫たるの故に存すとすれば、君主は政を行ふに祖先なる神の意を昧すると共に、又祖先を祭るを政治の一部分となさざるべからず。神武天皇が東征の時に、皇祖なる天照大神を背に負ひて戦争し、政治の始に鳥見山に靈時を建てて皇祖を祭り賜ひしが如き是なり。支那帝王は天命に依りて民に君たるが故に、政と共に常に天意を伺ふを必要とす。此を以て堯は先づ欽(欽)みて昊天(昊天)に若(若)ひ、日月星辰を曆象し、舜の位に即くや先づ天文觀測の器械璣璣玉衡(璣璣玉衡)を整齊し、上帝(上帝)即天(天)を類し、六宗に禮し、山川を望祭し、偏く群神を祭り、此は支那帝王の大原則となりぬ。漢の丙吉が時侯の違和に配慮して爲政者の責となしたる、或は支那にては一般に日蝕其他の天變地異あれば之が祭をなして、天に謝罪するも皆此が爲なり。印度

にても君主は常に神を尊崇するを爲政の本とし、僧侶をして政に參與せしむるを  
必としたり。

祭と政とは、マツリゴトとして此の如く一致し、君主の大權は神に出づるとすれば、  
一方にては神意に背く君主は或は其位置を失はるゝ事、支那の禪讓放伐の如き結  
果を呈すべきも、他方にては君主は神の代理として君權即神權の思想を生み來ら  
ざるべからず。支那にて天が君主の義なる后の名にて稱せらるゝと共に、天子が  
元は天即上帝の名なりし帝の名を冒せるが如き、印度の摩拏法典が(七の八)

見盡たりとも、王者は人間の如くに輕んぜらるべきにあらざ。彼は人間の形し  
たる大神格なり。

といへるが如き、皆是れなり。十六世紀の英國に君主神權説の出でしは、必しも偶  
然にあらざ。今日歐洲諸國帝王の即位式は皆教會の參列に依りて行はれ、教會の  
長が王の頭に膏を澆ぎ、之に王冠を冠する受膏式(Salvage Anointment)を以て即位式となすは、  
此時代此思想の遺物にてあるなり。其他世界諸國にて傳國の寶として傳はる者  
が多く神より出でしと傳ふるも、此信仰の産物なり。

祭政一致は此の如く君主神權の制を生ずるも、また他方にては僧侶執政の神政治  
(Theocracy)を生ず。蓋し君主の權強大なる時には君主は神の代理人なりとの思想  
永く世を支配し得べきも、神の代理者は又僧侶にも附與せらるべき資格にして、神  
人の媒介たる僧侶司祭は特に自ら神の代表と稱するに便宜ある位置にある者な  
り。此に於てか君主神權の思想を生ぜしと同一根據は、又僧侶の威權を増長す。  
印度の如き君主は神なりしも、僧侶亦地上に於ける神と稱し、二者の權力競争の結  
果は終に僧侶の勝に歸し、君主は最も僧侶を好遇し、又政治は必ず之に計らざるべ  
からざるに至れり。法典は婆羅門を神として、火は聖なるも聖ならざるも有力の  
神格なるが如く、婆羅門は學あるも學なきも大神格(Mahadevata)なり(九七三)婆羅門  
は生れながらにて諸神も之を神格とす(八四)といへり。此の如くにして僧侶な  
る婆羅門は一切の神力を有し、王者も到底之に敵する能はざる事となり、印度の社  
會は王者の統治あるも殆ど婆羅門專權の神政治國の如くになりぬ。猶太にあり  
ても、一時は王者と僧侶との競争ありしが、僧侶の權漸次増進し、終にダビデ、サロモ  
二王をして僧侶に媚ぶるの已むを得ざるに至らしめ、一時は神政府の形をなすに

至りぬ。サドカイの徒 (Saduzier) パリサイの徒 (Pharisier) の如きは、實に舊約の法律を以て一國を支配せんとしたる者なりき。クラツツがパリサイの徒を稱して、一切を宗教的法律となし、宗教的に公認せられざる一切を奪ひ去ると云ひし者は是れなり。我國の祭政一致にては、固より神政府をなすに至らざりしも、祭祀の事を掌りし中臣氏が佛教渡來の以前に權勢を得しは、幾分か此に近き者なりとす。

法律、宗教と祭政一致は宗教と法律との交渉に生じたる二の大現象なり。然れ共多くの國民にては既に此時期を過ぎ、法律的團結は國家として、宗教的團結は教會となりて二者其概念を判別するに至れり。此に於て國家と教會との關係を生ず。國家は主權の統治權に支配せらるゝ社會的團結なり、故に其團結の國土人民國性等に制限せられ、國民の境界を自由に超ゆる能はざる團結なり。之に反して教會は同一の救主の救済を信仰し、若くは同一政權の下に團結し、同一の信仰を抱きて同一の道行を修する團結なり、此故に人間として同一の救を要求し、同一の道行ある限に於ては自由に國民國土の範圍を超ゆるを得べく、其性質は國民的ならず、普遍的なり。此を以て宗教史上教會なる概念及其事實が発生せしは宗教が國民的

性質を脱して宇內的に進みし時にあり。固より人類は國民的性質を離れて生存する者にあらざるを以て、教會は國家を離れて空中に發生するにあらざ、國家の中に存在して、彼は法律に依りて人民を支配する間に、此は救の福音を以て之を支配するなり。教會にも亦君主的組織と共和的組織とを有し、從て救國救權の束縛に寛嚴の別あり、又國家に對しても温和嚴厲の別ありと雖も、概念を異にし主權を別にする二者が同一人民を支配せんとするに當りては、到底其交渉を生ずるを免れず。教會は國家の事業を助くる事あるも、必しも常に此と一致ならず、國家も亦多くは教會に依りて國安維持の助となすも、時には此と衝突するを免れず。歐洲の中世に於て、教會の有形の首長たる法王が非常の威權を得て國家を屈服したるは、教會の國家を壓倒したるものにして、教會國家の交渉は最も顯著に最有形的に中世史に現はれたり。今一般に二者の關係を國法の方面より見れば、一國教主義、二、教會公認主義、三、教會放任主義の三種とならん。

第一國教 (State-religion) とは、一の國家の主權が特に其の教會を特定して其臣民の當に入會すべき教會と定むるにあり。即羅馬のコンスタンチン帝が基督教を羅馬

帝國の宗教としたる、聖徳太子の佛教に於ける、徳川政府の佛教に於ける土耳其の回教に於けるが如き皆是れなり。明治維新後初年の政府も亦此主義にて、始は神道を、後には神佛を共に大教となせし是れなり。此の主義は近世には漸次衰滅せしも歐洲にありて露國が希臘正教を國教となして此教會に對する臣民の義務を定めたる、英國が英國教會(Church of England)を立つる、暹羅が佛教を國教とせるが如き是れなり。

第二教會公認とは、國家の主權が國家に無害若くは有効と認むる者は盡く之を公認して、其の公法上の權義を定むるのみにして、其他宗教に關して、臣民に一定の義務を命ぜざるなり。故に反面より云へば消極的國教主義と稱すべきも、積極的に云へば國家に害なき限り信教の自由を許す者なり。日本憲法の如きは此主義にして歐洲諸國多く此主義を執れり。

第三教會放任とは、國家が宗教教會に對して其主權の勢用を及ぼさざるなり。現今共和國は多く此制を執り、北米合衆國の如きは其最好の標本なりとす。此三者の外に行政上教國(Reigning state)を立つるを得、然れども教國は即神政府にし

て、歴史上には寧ろ國家と教會との分別劃然たりざりし時代に出でし者若くは羅馬教會の如く教會を以て國家を壓制支配せんとするに出づる者にして、今日の如く國家主權の確立したる時代には到底維持すべからず、羅馬教會の教國主義が衰滅せるは其好表徴なり。

## 第六章 自覺を喚起して社會的勢力となる人文

## 第一節 教育

教育は教師學校の組織方法を具へて人間を養成するを目的とするが故に教育の理想は人間とは何ぞや、人間は如何に生活すべきやの觀念理想の變遷と共に發達したり。而して人間の觀念は宗教及其と離るべからざる道德に左右せらるゝ事多きを以て、教育及其學説は古來宗教に關係する事多かりき。

宗教が民族宗教として信仰よりも寧ろ祭儀に依りて行はれし時代には、教育も特に其術を施すなく、無意識的に行はれぬ。希臘のデルフ神託は僧侶が國民の道德を指導するの不識的器具たりしが如きは是れなり。其より進みて、宗教の信條明白となり、教權確立して、宗教は僧侶を教師として人民を化するに至りし時代には、法律主義の教化多く、從て其教育は國民の義務正行を宗教的課程として教へ、其實行を訓練し宗教的に人間を作るにありき。印度猶太の如きも最此種の教育に於て秀でし國にして、教育とは人を宗教的にするの外なかりき。

此の如き偏頗の宗教的教育は、歐洲の中世、日本の足利時代迄も甚盛に行はれて、教育者とは即僧侶にして僧侶は多くは只宗教の儀式規律を以て人の行爲を束縛し、其信條に依りて人心を拘束する者多かりき。此を以て學者聖人は多く此の如き僧侶の儀式的教育に反對し、希臘にありては所謂賢人等が儀式に反抗して其徒に授くるあり、猶太にても僧侶外なる豫言者及シナゴグ(Synagogue)の書記等が、獨立して人民を教育したるあり、豫言者エゼキヤの如きは神の法律は供儀の法律にあらざるとなし(同書七)イサイアは王ヨシヤの力に依りて、國民の宗教的法律を定め、國民宗教道德の大本を制定したり、而して此時に成りし法律神教は猶太國民の國民教育に基本となりぬ。斯の如くにして、宗教の内において教育が祭儀に獨立するに至りしは、實に教育の概念が獨立に發生するの始にして、宗教と教育とは一旦其概念を明晰に判別し、而して後に又二者が相助け相合一すべきの運を作るの始なりき。

教育と宗教の二者を判別し、而して教育の方面よりして宗教を離れんとしたるは、早く既に古代に發生したり。即總ての點に於て、圓滿調和の發達を喜びし希臘人

と、最も人道を喜び人間社會の實利を貴びし支那人とは、此の如き獨立の教育を始め、希臘にありては教育の理想を圓滿なる人間に置き、支那にありては其の家族的國家的道徳に従て完全なる家族國家の人を作るを教育としたり。

希臘人が人間の最高理想は善美(*kalokagathia*)にあり、最高善美は即神ならざるを得ずして、教育は神話の信仰祭祀祈禱の行事を離れて、純粹に宗教態を理想となし、プラトーンに至りて始めて教育に就きて組織的考察をなすに至れり。プラトーンの學說にては、一切の事物は觀念にして最高善美の觀念は神にあり、國家も個人も總て此の神に近似するを目的とするを以て國家の一員としても、一個人としても人の教育は神に近似し、人の道徳は神を愛するにありとしたり。されば此の教育説は詳細の點に於て、種々の方面を觀察したるも、其究竟は宏大なる宗教に歸着すといふべし、而も其神といひ宗教といふも、寧ろ當時の神話的宗教に反對したる者なりき。

支那にては、古より教育は儒即郷先生の司る所なりしが、此等儒の最大なる教育家は孔子に現はれ、曾子、子思之を次ぎたり。儒教の教育説は大本に於て人をして、天

道の世界の顯現なる人道を履ましむるにあり、其方法として仁義禮智の四達徳を勉め、禮樂射御書數の六藝を修め、此に依りて齊家治國平天下各人の天職を行ふを理想としたり。其教育は主として士大夫に施す者なりしかば、其禮樂といふは日常の行事をも含蓄するも、其主要なるは國家の祭禮を修し祖先を祀り天地山川を祭るの方法として授けられたり。此故に儒教の教育は其實行的方面にては宗教の儀禮を重んじたる者なり。加之其人道といふは即天道なるを以て、教育は神なる天道に従ひ、天命に服するを教へ、天命なる性に従ふの道は即教育なりき。されば支那の教育の大本は其の國教に基づきし者なりしも、孔子に至りて教育の理想及概念は明に祭禮神事の外に獨立したり。

教育の起源は其理論も實行も、共に人心感化に直接なる宗教と關聯して生れ出で、其後二者各其概念と領域とを劃然判別し、教育は現世の爲の人間を作り、宗教は理想世界に依りて現世の人間を嚮導するを目的とするに至れり。此故に二者の間は必ず衝突すべき者にあらずとするも、其間に多少の徑庭を生ずるは數の免れざる處なり、特に前述の如く僧侶が教育の教權を握りて之を教會の下に壓服したる

事は歐洲中世及日本足利時代の如く、屢見する所の現象にして、宗教の代表者が私有する所の傳承的教權教理が世界的知識と背戻して教育と衝突せし事決して少しとせず。凡そ教育の獨立隆盛は常に政權教權の束縛を解きて、人道(Menschheit)の概念起る時にあり。近世歐洲にて教育の事が學者の考察に上りしは、コメニウス(Co-menius)ルソウ等の人道派(Humanism)にあり此等人道派の始にありては、人道教育とは多少宗教に反對する者の如く考へられ、ルソウは宗教の如き人工的修養に反對し、コメニウスは羅馬教の形式主義に反抗して起れり。我國にありても、教育の概念は此と同様の人道派に依りて勃興し、始には貝原益軒あり、天理人道を敬し自己を修むるを主とし、當時の國教たりし佛教以外に人道教育を説きぬ。之に次ぎて石田梅巖に始まりし、心學なる一派も亦人間の性善なりと説きて、此本性善徳を發揮啓するの教育を實行し、其精神と相合する限は神儒佛何れをも執りしと共に又宗派的差別をなす事には力を極めて反抗したり。

此の如く教育が獨立の概念と領域を發揮し得たる後にありては、教育の目的は無私宏博なる人道と無偏見なる學術的知見にあり、之に反して宗教にありては、其が

一定の組織成立を成すに及びて、多くは其元來の理想目的たるべき人道眞理の爲よりは寧ろ其教會其宗義を以て宗派の別をなし、宏博に反して偏狹となり、知見に反して宗義を人に強ゆるに至る、是れ文化の進みし時代には多く教育と宗教とが相衝突して文化の争闘(Kulturkampf)若くは宗教と教育との衝突と稱する現象を生ずる所以なり。然れども文化の争闘は其實を云へば、科學若くは教育人道と宗教とが衝突するにあらずして、宗派教會の教權宗義が其他の人文即政治、道德、科學等に此等の代表として人間を作らんとする教育と衝突するにあり。此故に文化の争闘は、多く人道派が當時の教權たる教會と相合はざるに出で、教會の外形以外に宗教の本質を極めて衷情の宗教を敢行せし人道派にありては、教會には反抗するも宗教的敬虔は寧ろ之を主張したり、ヘルデル及シライエルマツヘルの如き是れなり。特にシライエルマツヘルは宗教と教育とを合一調和し、宗教は一切の中に神に歸依し、神の中に一切を觀ずる絶對的依屬となしたるが故に、人間の一個人は即又他方にては一切神の發表にして、人間が有する所の性能は即神に出でし者なり、此を以て人間の性能を圓滿に發達啓導する教育は宗教の天分に於て欠くべ



からざる者となせり。我國の心學も亦殆ど此と同様の見地に達し、教育の啓達を以て儒教の率性、佛教の見性と同一なりとし、道德の修練教育を以て直に宗教となしたり。

近世の宗教は何れの國にありても、教育ある社會にては教會の教權以外に行はるるが故に、所謂文化の争闘なる現象は十八世紀の末以後には漸次文化ある社會には消滅しつゝあるなり。然れども下層多數の人民は、多くは無宗教なるが、然らざれば教會の教權に盲従する者なるを以て、教會の宗義は理性よりも知見よりも重く、其命令は世間の道德よりも貴くして、或は法王を羅拜し、或は僧侶に盲従す。されば世間の人道的教育が其理想に従て教育を此等人民に施さんとすれば、勢此の如きの宗教と衝突せざるべからず。彼は須彌山説を以て宇宙の形態を説き、此は星學を以てし、彼は道德を神命に歸し、此は人道に據らんとする等の現象は現に多く見る所の事實なり。此に於て十五世紀以後文化の争闘を経て終に調和の域に達したる教育ある人々、即社會の先覺は此下層社會に於ける文化の争闘を救済するの策を施さざるべからず。近頃米國獨逸に勃興したる倫理修養運動(ethische Kultur)

の如きは即其一なり。此運動は主として、基督教の發達に附着し來りし傳説教義を以て人民を教導するに反對して、人をして衷心自己の人格品性を重んぜしめ、其人格修養の根柢は之を人道に對する尊敬、宇宙の道德的秩序即神に對する恭虔に求め、人道倫理を以て教育の大本となさんとするにあり。

兎に角宗教と教育とは其發達の間に、合しては離れ、離れては又合し來れり。二者は果して如何なる調和に終るべきか、倫理修養運動の將來は如何、普通教育に於ける宗教的教育は如何にすべきか、又教育の行政機關と宗教上の行政とは如何の關係を保たしむべきか、此等は今尙疑問の中にある問題なるを以て、此に叙せず、只從來の關係を叙し、終に左の數言を附せん。即第一には、學校教育は家庭及宗教と相待て行はるべし。第二には、社會の道德は法律のみの能くする所にあらず、弘く社會の教育は宗教若くは倫理修養運動に依らざるべからず。第三に、社會問題並に事業、即例せば、慈善、救貧、冤囚保護の如き事は、法律行政の能く行ふ所にあらず、宗教家及其團體をして之を行はしむれば、甚周到に圓滑に又機敏に之を行ふを得べし。第四に、宗教をして社會の善良なる教師たらしむるには、其傳道の方を盡さるべし。

からず。宗教家にして此心あらば、一席の集會も一度の訪問も、葬祭の演説乃至宗教家の一言一行は社會の教育となるべし。

## 第二節 哲學及科學

若し文化の争鬭なる者を以て、宗教の其他人文特に知識に關する現象との交渉を表すべしとせば、宗教の哲學及科學に對する交渉は文化争鬭の肝要なる者にして、哲學及科學は、人間精神の反省考慮即學說に基きて社會の精神を動かし一世を風靡し、其結果は社會的影響を及ぼし、佛國革命時代が民約說の學說に依て直に國家政府を改造せんとせしが如き、或は所謂近世文化が其思想に依て教育を革新し道徳を刷振せんとするが如く、大に世に向て實行的活動を呈し、此社會的活動は直に宗教と人文的に交渉を生じ來る。

哲學及科學とは、知識的探求の謂にして、其起因は人間知識慾の満足にあり、此故に神話の中にも既に内外の現象の何たるを知らんとする知識慾は、其他の道徳宗教等の實行慾と共に并存し、哲學科學は既に神話の中に宗教と共に同一胎處に生息

し、其時代に於ける天然其他の神話的説明は萬物を活きたりとして諸神の行動として之を説きしを以て、其中なる知識慾は特に宗教と密接に關係して満足を求めつゝありしなり。其後人間の知識が經驗知見の擴張と共に進歩して、粗末ながらも科學を作るに及びても、其の説明學說は容易に宗教神話と分離獨立する者にあらず、却て宗教の教師たる僧侶は、何れの國に在りても他の人民よりは知識ある階級なるが故に、其時代の科學は主として僧侶の手にて修養せらるゝを常とす。特に世界の成立を説き、人間の運命を説明するが如き事より、彗星、風災時々の天變地異、人間の疾病、夢、癲癩の如き特異の現象は、特に人間の利害に痛切の關係を有して宗教的感情と密着し、從て皆宗教家の説明に依るの外なき姿あり、或は供犠祭祀の必要より天象を觀測して星學の始をなし、古代聖人の蹟を傳へて歴史記録の源を開くは、皆僧侶のなす所なり。此が爲に佛教、基督教の如く進歩したる宗教にありても、須彌山説、六日天地創造説の如き事が、近年まで否今日にても多くの人に宗教の要素なるが如く見らるゝの不幸を來たせり。特に宗教は其神聖威嚴の爲に容易に其定説教理を變更し難き性質を有するを以て、古代の粗末なる知識も一旦僧

俗の手に入りて宗義教理の一部分となれば、一般人智の進歩に應化併進する能はず。

兎に角、原始天然崇拜の時代にありては、宗教と自然科学と混淆し、特に天然崇拜の多神的神話、人格的説明を以て満足し、其天然説明は便宜隨時の性質多き事、其宗教の崇拜が單一交替神教として存するに同じく、甚だ統一を欠くを常とす、此に於て人間の知識慾は、此幼稚なる科學説を統一するの要を感じ來る。即ち是れ哲學の曙光にして、哲學は何れの國にても神話の多神的傾向と其天然説明の隨時的性質に反對して統一的説明を要求して起るなり。

多神が一神に統一せられ、多元が一元に統一せらるゝは、宗教と哲學との範圍にて相呼應して起る現象なり。之が標本ともいふべきは、印度にて吠陀讚誦の神話宗教が一進して優波尼沙土の一元の哲學宗教となり、其中に哲學を生ぜしが如きは尙れなり。然れども哲學的需要に喚起せられしは少數の人にして、多數の人民は尙神話的多神崇拜の域に止まるは數の免れざる所なれば、神話傳説及僧侶的學説は寧ろ宗教の本部として殘存し、哲學の方は宗教と獨立反對の如き姿を呈する事多

し。希臘の如きは是れにして、タレス以來其哲學的意識が發達するや、哲學は漸次其國民一般の宗教に反對の位置に立ち、ソクラテースは終に此衝突の犠牲として死するに至れり。然れども、此衝突は終に多神教の覆滅に終らざるべからず。プラトーンが宗教的哲學に依りて神話の宗教を高め、其他哲學者、技術家が相助けて神話宗教を清淨にせんとするや、從來の希臘宗教は倒れて、其結果なる哲學的宗教は新プラトーン派を経て、基督教の中に重要なる生活養分を供給したり。

此の如くにして、哲學が神話的科學の中より崛起し、宗教に反應して進歩するに至れば、科學も自ら神話的なる幼稚の状態を脱して自家の方針を得、特に哲學者の手に養はれて進歩す。此に至れば、科學も亦神話宗教の束縛を脱したる者にして、哲學と相結托して古傳を維持する宗教に反對するは自然の勢なり。然れども、科學が全く宗教に獨立する事は容易にあらず、印度の如き優波尼沙土の一元哲學を出だせしも、其科學は永く神話の束縛を脱せず、支那にありても陰陽五行の如き天然説明出でしも、其は甚しく神話彩色を帯ぶる者にして、今日まで支那には科學の獨立したる事なし。歐洲にても、ヘリクレース時代以後、アリストテレスの博物、ア

ルヘメテースの物理、ヒポクラテスの醫學、プリニ一の歴史等大に科學を進歩して、後世の純粹科學の源を開きしも、其中には潮の満干を海の呼吸なりとなす等、無數の神話的分子を有したり。

哲學科學が宗教より獨立せんとするも、其糺絆容易に解け難く其間には哲學科學を目的としながら、宗教に依りて之を建設せんとする者多く出で、二者の混和を來たす事甚多し。印度に於ける六派見解(Shat-darsana)の哲學は、宗教の爲にし、孔子儒教の國家倫理説も、其基は天の崇拜にありき。而して此の如き宗教化的哲學の最も著しきは、猶太教の勢力の下に希臘哲學を養ひたる歷山府の哲學にして、其端緒は既にプラトーンに發し、新プラトーン派、新ピタゴラス派、歷山府猶太哲學等となりぬ(此等に就きては哲學史を見よ)。

要之、太古に於ける科學哲學の宗教に對する關係は、自家の胎處なりし多神的なる神話宗教より脱化して、又此と共に宗教を轉進するにあり。然れども、是れ大體の傾向にして、始より一神教の傾向多き猶太教の如きは、此の如き現象を生ぜず、一神教の畏服的傾向と其國民の探求的精神に乏しきとは、相合して其中には殆ど科學

哲學の端を開かず、只僅にタルムツド(Talmud)に於て宇宙の神祕的説明を現はせしに過ぎざりき。

科學と哲學とは多少宗教と獨立して進歩せり、其探求の方法に其研鑽の結果に、万人共に承認せざるべからざる者を獲來るの時なくんばあらず。此くなれば教會の宗義は之と衝突する事なく、進では之と協和し、又之を利用するの利あるを發見するに至るべし。然れども彼は自由討究を主とし、此は信奉を躰とするを以て、此點に於て二者が協和するは甚困難なれば、宗教は先づ科學哲學を已に利用するを勉む。佛教が一旦宗教として精神的に成立したる後に至りて、當時の哲學たる因明の論法を應用し、勝論の風に從て万有の分析をなしたるが如き是れなり。即其結果は佛教の教理を組織論述したる對法阿毘達磨(Abhidharma)となり、後世の煩瑣的學風の源となり、佛教の宗教は哲學論議に外ならざるを致せり。基督教にても中世煩瑣學風(Scholasticism)は其代表者が希臘の哲學科學を基督教理の器具に用ひしに始まり、其始め基督教が猶太國外に傳播するに當つて、既に希臘哲學の勢力の下に立ちしも、明白に哲學上の知識即クノシス(Procs)を宗教上の信仰即ピステス